

---

# **青き龍に願いを込めて**

泡沫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青き龍に願いを込めて

### 【Zコード】

Z9708L

### 【作者名】

泡沫

### 【あらすじ】

そう俺は神様にお願いをした。いや、神様かどうかは分からない。でも、願いは通じたはず。何故ならその願いは叶ったのだから。その代償に空から神様が落ちてきた！？「願いを言いなさい。叶えてあげるから。それと恋愛限定ね。面白くないから。ん~そうね私が樂しければいいの。なにかしなさい」上から目線の嫌な奴。しかし、認めたくない程の美人！この後俺はどうすれば！？神様と人間が繰り広げる爽快ラブコメディー…ってラブコメなの！？

## 空からの神様召喚（トラブルメーカー）

今、あまつきおおぞら天月大空あまつきおおぞらこと俺は自宅のテレビの前に座つてくつろいでいる。そんな俺の横に今1人の女の子がソファにくつろいでいる。その子はとてもない美人で身長は165くらいだろうか。出るところしつかりと出でいて、足まで届く蒼髪に蒼眼がトレードマークなかなり目立つ風貌。

「どうした大空？また何か考えておるのか。まったくそんな暇があったら私のために働けばいいものを」

「つたく…」

この偉あおがみたつみそうなのは青神龍美。名前を見ただけ分かるだろうか？青い竜の神様。こいつは青龍、らしい。というのも実際神様つていう証拠が無い。

だからといって信じない訳ではない。本人がそう言つているわけだからそれを前提としようじゃないか。それにこいつの破天荒ぶり、世間知らずぶりといつたらそれはもう絶滅寸前のお嬢様レベルで俺の手に負えるべきものではない。

そもそもなんでこいつが俺の家にいるのかそこから説明しなければならないだろう。

あれはそう高校受験の合格発表の日だ。中学教師から無謀だとしか言われなかつた私立高校に合格し浮かれていた時だつた。

空から人が落ちてきた。いや、俺の上に着陸…いや、やつぱり落ちてきた。

俺の上に被さるように乗つているのは、蒼い色のドレスを着た蒼髪蒼眼の美少女。落ちてきた時に見えそつたパンツまでが蒼色だつたかまでは俺の知るところではないが。

「どうか、どんな状況だ？飛行機から落ちてきた外国の方？それとも電波な異次元ファンタジーの方？」

とその時落ちてきた蒼色美少女が目を覚ました。俺は慌てて英会話モードに切り替える。合格ギリギリの英語力なめんなよ？

「ど、ドモ！は、はうわー ゆー？」

「それは何語だ？日本語で話さんか」

俺の英語力は皆無だつたようだ。つて日本語？この人日本人ですか？こんな髪でこんな眼をしていて日本人？

「お主もしかして、異国の者なのか？」

「いやバリバリの日本人ですけど……」

「だつたら最初から日本語で話さんか。このバカ者！」

初対面なのにバカ者呼ばわりですかー。それはそれは素敵な性格の持ち主のようで。

「あのー失礼かもですが…どこの方ですか？」

「神の国に決まつておるだろう。お主が私に願いを懸けたのだろうはい。後者の電波な方でした。僕ちんかなりショックというかなんというか。」

「つて願いを俺が？」

「そうだ。そして私は願いを叶えた。だからお主は”じゅけん”とやらに合格したのだろう？」

俺は必死に記憶を辿つてみると確かに一週間前に神社で御参りはした。

「もしかしてそん時か？」「つたくようやく思い出したのか？とにかく疲れた。お主の名前はなんだ？」

「大空だ」

「…名前負けか」

「二度と言いやがるな。で、そつちは？」

「青神龍美だ。これでも青龍という偉大な神なんだぞ？ふむ、さて行くとするか」

「まさかとは思うが俺の家に行くとかいう電波な展開ではなかろうな？」

「よく分かつたな。なら話は早い。早速案内してくれ」

よし！日本語は通じるんだな！そして、話は通じない。見た目とギャップがありすぎる。ていうかもつたいねえ。

「早くせんか、バカ者。私はお腹が空いた」

「はいはい、何か作りますよ」

こうして俺の家に電波な美少女龍美がやつて来ることになったのだ。

しかし、知れば知るほどに世間知らず、というより一般常識を知らない。車が通った時は鉄の馬呼ばわり。テレビなんかが映った時は失神寸前。初対面にバカ者呼ばわり。

さてここで問題です。次に彼女が言い出すことはなんだと思います？答えは

「腹減った」

それでも神ですか。神様つてみんなそんなもんですか。くそつ。なんだかんだで飯の用意してる俺つて。

発砲スチロールの容器にお湯を淹れて某巨大ヒーローが帰らなければならぬ時間を持つだけでラーメンが出来るという画期的な飯を提供してみる。

「なんだ…この食い物は」

「カツブヌードル。手軽に食べて上手くて安いといつ素敵フードだ」

「やはり大空は日本人ではないのか？」

いきなり呼び捨てかよ。まあいいけどさ。

「青神さんはいつの時代の人なのかな？」

「ふむ、最後に願い叶えたのは誰だったか…。そう、狸のような奴でこの国を治めたな」

まあ待て。見た目狸で日本を治めたのって…

「それって徳川家康つて人じゃない？」

「そう、その人だ」

あーあ。さつきまで浮かれていた自分が嘘のようだ。今ではもう全てがどうでもいい。

「その徳川家康の願いを叶えちゃうような青龍さんが俺に何の用

で？」

「お主の願いを叶えようと思つて来た。文句があるのか？」

「帰れ。そして一度と来るんじゃねえ」

「無理だ。そもそもお主の命令を聞く私ではない」

「じゃあ願いだ。帰つてください」

「それも無理」

「願いを叶えるんじゃなかつたのか？」

「それでは面白くないから。願いを言いなさい。叶えてあげるから。それと恋愛限定ね。面白くないから。ん~そつね私が樂しければいいの。そういうなにかにしなさい」

電波訂正。こいつはただのワガママだ。

「とりあえず今は願いなんてない。だから帰つてくれよ。そのうち親だつて帰つてくるし」

「大空は親が好きか？」

「好きつちや好きだけど、いなかつたら樂だろうな」

「その願い聞き入れた」

「は？」

まさかこいつ…。

その時携帯が鳴る。こいつまさか俺の両親を…。俺は恐る恐る携帯の通話ボタンを押す。

『あ、大空？お母さん達世界一周していくから一年は帰れないともうの~。おうようひしくね~』

そこで電話が切れた。まず一つは心配して壇した。二つ目は

「何がしたいんだお前は」

「何がつていなかつたら樂と言つたのは大空だぞ？それに今は願いが無いなら側にいるしかなかろう」

「まさか…待てよ…それつて…

「ここに住む氣か？」

「そのつもりだが」

俺は頭を床に打ちつけた。もう何も考えたくねえ。そう思いながら

らテレビの電源を入れ、バラエティーを見て気を晴らす。

それが今に至るわけだ。

一つだけ言っておこう。俺は何も悪いはしていないぞ？

## 地上に立つ非常（ミステリアス）

もう嫌だ。b ↵天月大空。

なぜいきなりこんなことを?と聞かれたら答えは一つ。

「大空、暇。なにか面白いことはないの?」

この偉そうな居候をどうにかしてください。神様お願いします。と言つても居候が神様なわけでどうしようもないの。

なぜこの神様こと青神龍美さんがこんなにも暇をしているのか?それはお昼のバラエティー番組が終わり夕方のニュース番組しかやつていなから。

「このスーツの男は喋つても面白くないわ。いつそ消してしまつた方が」「やめい!」

ずっとこんな調子である。

「じゃあ夕飯の買い出しにでも行くか?」

何を隠そう、青神さんのおかげで両親は世界一周旅行に出掛けるところよく分からぬ展開になつてしまつており、いつまで待つても夕飯は出てこない。ああ、なんたる不幸か。

そもそも神様と会つたのにも関わらず、一度も幸せと思ったことがない。というか出会う前までは幸せでした。目の前の人には不幸将军です、こんちくしょう。俺の平和と幸せを返せ。

などと愚痴つても仕方ないので買い物に近所のスーパーに向かつた。

そして今、目の前に見えるこのスーパー。一見普通のスーパーだが、実は違う。

そう、このスーパーはとてつもなくやる気のないスーパーなのだ。いや、店員が適当という訳ではなく。最近のスーパーというのは夕方のタイムセールやポイントサービスなどいくつかの工夫をするものだがこの店にはそんな概念は一ミリたりとも存在しない。そもそもライバル視する店もないのに気になくても客は来るので。

そんなスーパーだからこそこの時間帯は客足はぼちぼちというところで、今の世を何も知らない青神を連れてきても問題はないだろう。

「大空ーこの美味しい食い物はなんなんだ？」

「あー、それはガムって言つてお菓子でだな。噛むことで味が出るんだ。味が無くなつたら口から吐き出す」

「一度口に入れたものをだすの？ 行儀が悪いわね」

「そういうものなの」

待てよ。一つ引つかかる。なんでガムを食つてんだ？

「勝手に商品食うな！」

「なに？ これはお供え物じやないの？」

「そんなとこだけきちんと神様かよ。つて感心してゐ場合じやない。とにかく勝手に置いてある物を食べるな」

「大空がそう言うなら仕方ないわね」

結局ガムは買つ羽田に。といふかガムを氣に入つたようで一個百円の板ガムを10個も買った改め買わされた。百円でも10買えば千円。つい最近まで中学生だった俺からすれば大きな数字である。そして帰り道。日も暮れ、辺りが少し明るいが電灯に灯りが点き始める。

「大空、お腹空いた」

「今日それしか言つてなくないか？ ていうか俺の願いよりも自分優先かよ」

「今日の晩餐は何なの？」

「……諦めたよ。とりあえずは誰でも美味しく作れるカレーかな」

「”かれえ”？ それはなんなかしら？」

「そこからかよ。まあ、百聞は一見にしかずだ。とりあえず食つてみるのが早い」

「ふむ、ならば思い切り料理の腕を振るえばいいわ

なんでそんな上から目線になれるのか。神様はなかなかに不思議な生き物だ。なんというか見てて飽きない。ていうか目を離せない。

「うしてる間にも青神は公園の噴水に飛び込んでいる。

「どうだ？ 大空も水浴びをしないか？」

「慎んでお断りするよ。つーか風邪ひくぞ。それにそこで遊ぶのは

小さい子供だけだ」

「……」

青神は無口のまま噴水から出でてくる。

「つたく… 水浸しになつて。家に帰つたらひとまず風呂に入れよ」

「ふろ？」

「またかよ。暖かいお湯で水浴びをするんだ」

「湯浴み？ それなら好きね。しつかりと私の背中を流しなさいよ」

「はいはい… はい？」

「その間抜けな返事はなに？ いいから早く帰りなさいよ。早く湯浴みがしたい」

聞き違いでなければ背中を流せと言つた。つまりは俺が一緒に風呂に入らなければならないと。

「青神！ ちょっと待て」

「大空の言つことは聞かないわ。そもそも聞く意味が無い」

「趣面が変わつてないか？ それより俺が背中を流すのか？」

「当然だろう。私は今まで一人で湯浴みをしたことはない」

「左様ですか」

つまりはお嬢様だと。この調子だとこいつに家事は望めなさそうだ。

「さあ、着いたぞ。湯浴みの準備を早く。火を焚けー」

「火は使わないから落ち着け。とりあえずバスタオルは籠の中に入れとくから使え。なにかあつたら呼べ」

「そうか。ならまず湯はどこだ？」

「やつぱりそこからか」

俺はとほほと頭を下げる。ひとまず気を取り直して説明を始める。ある程度は理解したらしい。早く風呂に入りたいせいか俺がいる前で服を脱ぎ出す。慌てて脱衣所から出る。

自分が女という意識がないのか、俺を男と思つてないのか。ただの天然なのか。

まあ俺に分かることじやないし気にしないでおこつ。

今日は徹夜でもして世の中ルールを教え込まないといけないみたいだな。

そんなことを思いながらカレーの調理に取りかかる。ひとまず米を炊き次に野菜を切り、炒めて、鍋に投入。火が通つりルウを入れた所でトラブルメーカーが投入。

「それが”かれえ”？なんか嫌な色をしてるわね」

「お前服は…？」

青神は服を着てなかつた。こうして見ると美少女に見えていたのが一変して女性として見えてくる。つまりは凹凸が激しい体をしているという話だ。

「服？濡れているから着るわけ無いわよ。それが？」

「隠さないのか？」

「…………あ。きやーつ！！」

殴られた。それも壁にめり込まんばかりの勢いで吹っ飛ばされた。「か、神の裸を見るとはなんたる愚弄、なんたる屈辱！かくなる上は大空」と吹き飛ばしてくれる！」

「ちょ、待つた待つた！カレーが焦げる！」

「そ、それは少し困る。私はその”かれえ”とやらが楽しみだからな。決して私にも非があつたと認めた訳じやないの！」

カレーを作つた人へ、ありがとうの気持ちを伝えたい。そして青神、分かつて消滅させようとしやがつたな。

「まあいい、じゃあ早速食べるか！これ着てさつさとテーブルに座れ

「これはなに？」

「ジャージだ。この時代の楽な服。それがジャージだ。早く着ないと湯冷めするぞ」

「ふむ、そうだな」

青神はいそいそとジャージを着始める。その間は出来るだけここの一帯が吹き飛ばないよう努めながら、カレーライスの用意をする。

「準備出来たぞ。もう着替えたか?」

「なかなか着心地のいい衣服ね。もうつてもいい?」

「ダメ」

「どうしてもダメなのか?」

大空アイには今この目の前の美少女が非常に可愛く見えている。もはや脳内では台詞も入れ替わっていて。

『ど、どうしても、お、大空のジャージが欲しいの。…お願ひだから…』

実際は寄越せレベルなんだろうが可愛いいなら仕方ない。

「分かった。お前にやる。さっさと座れ。そして食え」

「ふむ、誓めてつかわす。なに食べるのは任せて」

「食うだけなら誰でも出来るからな」

「バレた?まあいいじゃない。こんな美少女と晚餐にありつけるのよ?ほら、私に感謝したいでしょ?」

「絶対にしねえよ。さつさと食べな」

恐る恐るスプーンに手をかけ、カレーをすくつ。手を震わせながら口へと運んでいく。

俺は思わず生唾を飲む。

「う、美味いか?」

「うむ、独特的の香りがなんとも言えない。美味しいー!カレーなるものがこんなに美味しいなんて知らなかつたわ」

カレーの発音がまともになつたのはスルーでいいのか?いいんだな?

「美味しいなら良かつた。じゃあここで重大発表」

「今なら何でも許せる。安心して話していいわ」

「明日、青神はここから出てはいけません!」

「イヤだ」

「許せるんじやなかつたのかよ。神様の言葉はそんなんに軽いのか?」「だつてそれじやつまらないもの」

「つたく」

俺は大きなため息をつく。

「じゃあ、お前は一般常識を知つてているのか?否、知らない!…よつて外には出るな!」

「大空の側にいればいいじやないの」

大空イヤー発動。

『大空の側にいたいの。…ダメなの?』

「明日は高校の入学説明会があるんだ。絶対外せない。母さんか父さんがいれば問題なかつたけど、俺しかいないからな」

「なら、私が親の代わりに行けばいいじやない」

「青神さん? あなたは自分の容姿を知つてます? この人実は俺の俺ですつて言つて誰が信じるか! そもそも俺の親を知つてる奴もいる!」

「なら兄弟とか親戚とかそれっぽいことを言つて『まかせばいいじゃない』

「そこまで言つてまで着いて来たいのか?」

「……」

「なんなんだよ!」  
「行きたい。ここにいても暇だしね」

「仕方ねえか?」

「はい。強行突破されました。どうか今日何回強行突破されたんだ俺。弱すぎだろ。」

「とにかく目立つた行動はとるんじやない! いいな?」

「承知した。カレーおかわりしてもいいの?」

「食えるだけ食べばいい」

「じゃあ、もう一杯」

俺は立ち上がりカレーのおかわりを入れる。

風呂に入つて夕飯食べて青神は俺のとなりで可愛いい寝息をたて

て寝ている。

大人びても子供っぽくも見える彼女は見た目だけなら年も俺とあんまり変わらなく見えるだろう。しかし、神様だ。年齢なんて知つたこっちゃない。でも普通にしてたらただの女の子。なら守るのが男なのか…な。

なんて思いつつ青神を母さんの部屋のベッドへと運ぶ。

「つたく。本当に神様なんだかな」

実際どうでもいいはずの疑問を少し[冗談感覚で考えながら俺は眠りについた。

## 神様導く一目惚れ（Hンカウンター）

「おい、準備は出来たのか？入学説明会終わっちゃうぞ」「後少し待つて！」

朝起きて夢でした。というオチは存在しなかつたことは伝えておけ。

代わりに朝起きると美少女が起こしに来るという素敵なフラグイベントが発生はしたが。だからと言って、別に幼なじみでも妹でもない神様。しかも一言曰から、「お腹空いた」だ。

こいつはこれぱっかりしか言わないのか。神様って飯食わせてもらつてないのか？

などと暫し回想にふけっていると青神は準備が出来たようで部屋から出てくる。

青神が着てきたのは母さんの着れなくなつた服。しかしながら母さんの服も着る人で変わるもんなんだな。と母親と曰の前の美少女を比べてしまう。

「どう？似合つてるでしょ？見てもいいのよ？お金は取らないから」「似合つてる、似合つてる。さあ行くぞ」

「あ、適当に答えたわね？そう、ならこっちにも考えが…」

「ついつい見とれてしまふほど似合つています！」

「えつ？ま、まあ、それなりいのよ。行きましょう」「

「なんだよ褒めたのに「え？」って」

「意外だつたのよ。大空が褒めるなんて思わなかつたから」「昨日会つたばかりの奴の何を知つてるんだ？さあ行くぞ。本当に

遅刻しちまつ

「会つたばかりの奴ね…」

「どうした？走るぞ」

「焦らないで行けばいいじゃないの。時間はまだあるわよ」

「ねえよ！徒步20分の道のりを行くのに関わらず説明会が始ま

まで15分だ！」

「仕方ないわね。多少は私も責任を感じないこともないから少し手伝つてあげる」

「おい、こいつは今度は何をしようとしてる？」

「いい？一瞬だから」

「何が一瞬なん…うおつ！」

本当に一瞬だった。何がと言われても困る。ただ、いつの間にか春に俺が通うことになる私立輝世名高校に着いていた。

「何をした…」

「ふむ、久しぶりに力を使つたから心配だつたけど…大丈夫そうね」「あのー、心配な力を使いやがつたんですか？」

「気にしないの。それにここで立つていたら人の邪魔になるわよ」「青神が言うことは間違つてない。しかし、無性に腹がたつのはどういう不思議なんだ？誰か分かつたら教えてくれ。

その時、後ろから俺の名前をバカみたいに大きな声で叫ぶ、所謂アホが近付いてくる。

そいつは小学校からの付き合いで中学までずっと同じクラスというなんとも運命的な巡り合わせの人物だ。

正直な話、男とそんな巡り合わせでも嬉しくない。寧ろ嫌だと言うと奴は凹むからやめとくが。

そうそうこいつの名前は…

「大空！お前の横にいる美少女は誰だ！どんなフラグが立つた？どんなシチュード？あ、僕は水沢海斗！よろしく」

「私は青神龍美。仲良くしてあげる」

「おい青神、そんな言い方はないだろ？」

「でもなんで、海斗とやらは喜んでいるの？」

「は？」

俺は説明に幾つか大切なことを忘れていたようだ。

こいつは変態、そしてオタクだということ。美少女だったらなんでも良いという、性癖の持ち主だということ。

さあ、これからはそれを踏まえて話そりじゃないか。

「海斗、いい加減身悶えるのを止める。ていうか後5分だ！早く入るぞ」

「龍美さん！」

「なんだ？」

「僕と結こ…ごふつ！」

俺の右アッパーが綺麗に下腹部に炸裂。海斗の体は見事に後ろへ飛ぶ。

「なにするんだ！」

「初対面にプロポーズするような奴は飛んでよし！青神、あいつはほつといて行くぞ」

俺は青神の手を引き、説明会の会場である、体育館へと走っていく。

後ろからそのイベントは偽物だ！物語を進めて後から分かる偽プログラグだ！と訳の分からぬ言葉を叫ぶ動く死体がいたような気がするが…まあ、気のせいだろう。

やつとのことでたどり着いた体育館。もう始まるのか、照明が落とされ、ステージのみ明るく照らされている。来るのが遅かつたせいで席は一番後ろしか空いていなかつた。このことが青神の導きだつたのかもしれない。関係ないかもしれない。でも、俺はそれによつて出会えたのだ。

それは席に座つて直ぐのことだつた。もうすぐ説明会があるというアナウンスが入り、照明が一挙に体育館後方の扉に向かられる。その光の先には1人の人影が映る。

その人は青神とはまったく違つタイプで、後ろでしつかりと結ばれた黒髪をなびかせ、凜と立つ姿は大和撫子と呼ぶのに相応しい人物だつた。

「入学生代表の陽炎灯莉です」

会場が湧いた。あれだけの美人だ。目立つのも当然だろう。入学の挨拶とやらを済ませて、ペコリとお辞儀をする。

「大空、鼻の下が伸びてる。だらしない」

「え？ ありがとうよ」

お辞儀をして自分の席に座るうとしているのか、こじらへ向かってぐる。さりに言えばほとんど俺に向かって。

「おとなり、失礼します」

「ああ…」

そう俺の席は一番後ろ。一番席が空いていて尚且つ直ぐに座れる場所。

生徒代表は何を思ったのか、俺の隣に座ったのだ。何はともあれ会場中の男子にブーリングの嵐。ああ、俺に友達は出来るだろうか？ 入学早々にいじめられるのが田に見えてきた。さよなら、夢の高校生活。

「あの、大丈夫ですか？ なんだか視線がとても遠い場所になっちゃつてます」

「す、すまん。変な心配をかけたな。今は大丈夫だ」  
未来がどうであるかは知らぬところだが。

「隣に座つたらまずかつたですか？」

「そういう意味じゃない。座つてくれて寧ろ嬉しいというかなんと  
いうか」

「それなら良かつた！ そつだ、出来たら名前を教えてくださいよ」  
「俺は天月大空。隣でもう寝息をたてているのが青神龍美。よろしくな」

「オッス！ 高校初めての友達です。クラスも同じなら良いですね」  
オッス？ 急に飛び出したその言葉は彼女が使うなんて思つてもみなかつた。しかしこうしてみると意外といいものかもしれない。

「あと、メアド交換しましょうよ！」

「分かつた。ただ少し待つてくれ。入学早々先生に目を付けられて  
も困る」

既に男子生徒には目を付けられてしまつてゐるしな。

「そうですね。くすつ」

最初に受けた印象。それは少し違っていたのかもしない。最初に見た大和撫子。近くで見るだけで友達が出来てはしゃぐ子どものように見えて。俺はその一面に惹かれていた。いや、きっと彼女に魅せられていいんだろう。

俺は恋をしていた。

誰が何を言おうと恋である。一目惚れ。

「どうかしましたか？」

「いや！なんでも！なんでもないから！」

「ものすごい大空君の視線を感じたからビクビクしてたんですよ？」

「す、すまん」

俺は今そんな灯莉を見ていたのか？

「そうなか…ふふふ。面白いことになりそうね？お・お・ぞ・らっ？」

「な、なんだよ。急に起きて何を言い出すんだよ」

「バレてないと思つてるなら大空はうつけ者。そうね、前見たがき大将みたいな時期将軍並みよ」

それはきっと織田信長だろ？と勝手に結論づけた。

「それにしても…ふーん。最近の子には無い雰囲気の子」

「もういいだろ？お前の言いたいことは分かったから」

「大空が願うなら私が叶えてあげるわよ。最初に言つたでしょ？恋愛なら大丈夫って」

そんなことも言つてたような気がするが…って

「本当か？」

「私が神だつてこと忘れてたりしない？」

「いえいえ、そんな滅相な。あなた様こそ神です。キングオブ神です。とまでは決して言わないが。

「本当に神様なんだな」

「じゃあ、やるわよ？」この式が終わつたらきっと運命は変わ……る

…わ

両手を合わせて祈りのようなものを始めていた青神が急に俺の方に倒れる。

「大丈夫か！？」

「力を…使いすぎ…た」

「力？」

「神の力…神通力だ。今日は時間を止め…たから…な  
「いつだよ？」

「大空には瞬間移動のように感じただろう…が朝の学校へ…来ると  
きに使つた…」

時間を止めていたのかよ。そんな大それた事しなくてもよかつた  
のに。

「それでお前は大丈夫なのかよ？」

「大丈…夫。すまない。願いを叶えると言つたのは私なのに…な

「青…神さんでしたつけ？大丈夫なんですか？」

「ああ、本人がそう言うんだから大丈夫だろう

「どうしよう…保険室ですか？説明会のことは私に任せてくれ下さい。

後でまた説明します」

「ありがとう。頼んだ」

「はい。任せてください」

突然倒れた青神を担ぎ上げ、保険室を探して歩き出す。

学校は思つていたよりは広くて保険室を探すのに手間取てしまつ  
た。

流石にこの説明会の最中には誰もおらず。とにかく青神をベッド  
の上に寝かせる。

「おい、大丈夫か？」

「心配しないで。神通力も時間で回復するの

「つたく、心配させんな」

「で…一つお知らせがあるんだけど、聞く?」

「そりゃあ聞くが…」

「願いを叶えるのは後半年待たないと無理です」「ははは、つまりは…？」

「だから、灯莉と結ばれるのは半年後ね」

「神通力の回復ってそんなに時間がかかるのか？」

「いい？人と人を結び合わせるのは少なくとも2人、本当に結ばれるはずだった人を含めたらもっと人の運命を変えるの。力の量は莫大ね」

「そうかい。まあ、元々期待してなかつたからいいけど。それより問題だが…お前はいつになつたら帰るんだ？」

「知らない。飽きたら帰るわよ。それまで楽しませなさい」「なんだよコイツは。

「元気になつたなら行くぞ」

「分かつた。少し待て。今降り、る？」

あらうことか青神はドジつこ属性だったのか、ベッドから降りるところ行為だけでコケた。コケやがつた。

コケた青神はもちろん倒れてくるわけで。俺はそれを男らしく受け止めようとするが、受験シーズンになまつた体が勢いに堪えられずに2人で倒れてしまう。

「いてて…コケるなよな」

「大空もしつかりと受け止めないか！」

よく考えるとかなり際どい体制だつたりする。

仰向けに倒れた俺に覆い被さる青神。人が来たらあたかもいけないことをしてゐる2人に見えてこないこともない。しかもここは保険室。

「入りますよ？オッス！大空君説明会終わりましたよ。えっと…失礼しまし…」「失礼しなくていいから」

「ええつ！？つまりは私にも入つてこいと？大空君はき、鬼畜だつたんですか？」

「ややこしくするな！これはこいつがコケて偶然こうなつたわけで、アクシデント！事故！2人の了承もなければどちらが襲つたわけで

もない！」

「事故に見せかけて」「ないからな？」

「アクシデントに」「いい加減にせい」

「それなら良かつたです。そういう、説明会の話、重要なところだけメモしといたので渡しちゃいます。では、これで本当に失礼しますね」

「何から何までありがとうな。助かつたよ」

「いえいえ。学校生活が始まつたらよろしくお願ひしますよ？」

「ああ、俺は友達が出来なさうだから頼むよ」

「え？」

「いや、こっちの話だ。気にしないでくれ」

「真相を打ち明けたら凹むんだろうな、と心に思いながら部屋を去つていく灯莉を見送る。

「さて、俺達も帰るか？ほら、肩貸してやるから」

「そ、そんなのこりない！」

「そう言つなつて。さつきもふらふらして倒れたじやねえかよ」

「それは…」

「というわけで行くぞ」

「は、離せ！」

「気になんない。スーパーに寄つて行かないとな。その前に昼飯か」

「離せと言つてるの！」

「ラーメンでいいか？」

「大空、人の話を聞いているのか？」

「いや、聞いてない。とりあえずラーメンだな

「もういい。好きにすればいい」

「本当か？じゃあラーメン食いに行くぞ」

本当に話を聞いてないんだなと青神は呟く。無理やりじゃないとコイツは無茶しかねないからな。

俺は青神を担いだままラーメン屋に向かう。その道中、あいつ生徒代表と…と囁かれたり、あいつが肩を貸しているのは誰だ？など

と呴かれ、終いにはいつ襲う？などを謀られたりしていったよつた気がするのはきっと俺の気のせいだらう。

でも友達は出来ないんだろうな。

そんな意味珍道中をでラーメン屋にたどり着く。俺が気に入っているラーメン屋、雷神亭。ここの大将がまた良い人なんだ。

「こんちわー。大将ラーメン2つ」

「らつしゃい！お？ 大空もとうとう女を見つけたかーめでてえ！ 今日はタダだ！」

否定をしようと思った矢先にタダの二文字。なかなか断れない状況になってしまい何故か天月、青神カツブル誕生。

つて普通ならこの辺で青神がキレるのでは？ と思いもしたが、まだ来ぬラーメンに期待を膨らませてボーッとしている。

「へい！ お待ち！」

流石は速い安い美味しいを掲げるラーメン屋。美味くて安いラーメンが速く出てくる。

その瞬間に青神は箸を取り、ものすごい勢いでラーメンをすすり出す。

そういえばカツブヌードルの時もこんなだったような…

「う、美味いか？」

「美味しい、がカツブヌードルとやらの方が良かつたわね」「バカつ…」

大将にこのことが聞かれたら…と思つたが、この大将はかなりの大物。自分の都合が悪いことは聞こえないといつ。

「そういうことは本人の前で言わないようにしろよ」

「ふむ、そういうものなのか？ ならそうするが」

その時、視界の隅に映る人物がいた。それはマウンテンと言わんばかりのラーメンと対峙する少女だった。

「制限時間30分。始め！」

その姿は莊厳だった。ラーメンを食べているだけのはずが、ついつい見とれてしまう。というかまるまるうちに減っていく。それが

ものす」に面白い。山がどんどん削られていくようで。そして少女がラーメンを食べるうちにスープ、メンマ、麺を顔にトッピングしていく様。

見とれてるうちに食べ終わってしまつ。時間は裕に20分は残つている。

「いひやつさま！」

流石の大物大将でも言葉が出なによつて少女は賞品の商品券を持つて店を出て行く。

「すゞいもん見たな。あんな小さい子なのに」

「私も驚きだ」

2人で驚きの意を伝えながら店を出るとそこにはラーメン少女が立つていた。

「そこの蒼髪！」

「何か用事でも？」

「さつき店でカツブヌードルのほうが美味いって言わなかつたか？」「確かに言つたが、それがどうかしたのかしら？」

「ふざけるな！私はラーメンが大つゝ好きだ！しかし！カツブヌードルは邪道！それとこの店のラーメンを比べるとほ…有り得ない！謝れ！ラーメンの神様に謝れ！」

「ふむ、ラーメンの神か…そんな神はいたかしら」

真面目に考えるなよ。ヒツツコミは抑える。ツツコムだらラーメン少女から怒涛のツツコミが来そうだ。

「ともかく謝れ！」

「嫌よ」

「謝れ！」

「嫌よ」

「謝れ！」

「謝りなさい」

「『めんなさい…』ってあれ？」

「さあ、大空行きましょ。カツブヌードルが分からぬ子どもと

喋つても楽しくないわ」

カツプヌードルの味が分かる青神が大人なのかどうか、素直に謝つたラーメン少女がアホなのかはさておき。

「青神も謝つとけよ」

「嫌よ」

「つたぐ。『ごめんな?』こいつ変な所意地つ張りなんだ」

「謝るなら許す。でも尻に敷かれてるのは情けないね!」

「…謝つたのがバカだつた。」

「じゃあ、私は帰るから。また会えたらラーメンの良さを伝えてあげるから」

そう捨て台詞（？）を吐いて去つていいくのだった。出来れば一度と会いたくないものだ。

「俺達も帰るぞ。最後にひとつ疲れた。そういうえば青神は料理とか出来るか？」

「……………帰るのだろ?…あ、行こ!」

出来ないのね。まあ、不味い料理食つて、倒れるという定番オチを免れただけでよしとしよう。

## 青龍の生態観察記（サムシング）

入学式までの一週間。これは異様に長く感じ、また忙しい期間だった。というのも青神はこの時代のことを何も知らない。1人じや生活が出来ない状況を打破しようなんて考えたのがバカだつたのだと気付いたのはほんの一時間前だ。

そんなに大変かつて？なら振り返つていこうか。この地獄の一週間を…

入学説明会の次の日だ。ラーメン少女に感化されたことか朝からカツブヌードルを食いたいと言う始末。俺はめんどくさくなつて自分で買つてこいと言つてしまつた。この後分かつたのが、青神を1人外に出してはいけないことだ。

テレビを見ながら帰りの遅い青神を心配しつつ、何とかなるだろう、と楽観視していた。今なら直ぐに殴つてやりたい。ロボット青狸、タイムマシンを。なんてのは置いといて。

そろそろ時間が正午をまわる時だ。

家の電話が鳴る。家の電話と言えば携帯が普及した後うちで一切使われなくなつた代物。それが鳴るといつことは恐る恐る受話器を取る。

「天月ですが…」

「ああ、こちら近所の交番のお巡りさん」と大護だいごです。大空君かな？」

「大護さん？」

大護さんはいろいろな訳があつて知り合いになつたお巡りさんだ。いろいろってなにか？まあ、今は青神だ。

「君の知り合いつて人がカツブヌードルを…」

「お店で盗んだんですか！？」

最悪の事態始動。

「いや、ちょっと違うんだ

停止。

「僕が丁度お昼を食べようとカツプヌードルを準備していたときになんだけど。交番に綺麗な外国の方が来たと思つてあたふたしそうとしてたら日本語がペラペラでさ！ふふ、笑っちゃうよね」

大護さんは話が脱線することで有名だ。道なんて聞いたらいつの間にか宇宙がどうとか、遺伝子がどうとか、何をしたらそうなるのか分からぬような脱線をする。

「で、その外国の方はなにをしたんですか？」

「そろそろ！僕のカツプヌードルが半分欲しいってさ」

「すみません。そいつって蒼髪に蒼眼ですか？」

「そうだよ。とても可愛らしい子だね」

「すみません。人違いです」

「人違いとはなに？私のこと忘れたなんて言つたら天罰が下るわよ

「お前が言うと洒落にならんだろうが」

「ともかく迎えに来てちょうだい。いいね？ふ　ふ　」

誰かあいつに神罰を。本気でそう思つた。

その後あと迎えに行つたのだが、大護さんにカツプヌードルをもら

い、お腹いっぱいになり、寝ていた。

「大護さん、こいつ置いていいっていいかな？」

「お巡りさんでも結構こまるからね？やめて欲しい」

しぶしぶ承諾。その後起きるまで待ち、いつの間にか日は暮れ始めて夕暮れ時。もちろん昼飯は食べていなかつた。帰つて残りのカレーを温めて食べる。青神に振り回されて貴重な春休みの1日を消費した。そうしみじみ思う1日だった。

これで1日目が終わりだ。

こいつに家事をやらせてはいけないと知つた2日目。

朝、幼なじみ風では無いにしろ女の子が起こしてくれるのは嬉しいことだ。起こしてくれるのが”美”がつく”少女”なら尚更だ。例え起こす言葉が”お腹空いた”でもだ。

まあ、そんな朝の話は置いておいて。

カレーならではの三食連続という（食べてない所を気にしないなら四食）所行を成し遂げたため、カレーも底を突いた。

仕方なく、夕飯を作ろうとした時に思いついてしまった。

青神に作らせようと。

天才是時に異常と呼ばれるという。ならばこれも実は無謀に見てかなりいけるのではないか？

多少の味は田を瞑るうではないか。毎日やればなんとか食べられる物になるだろう。

これを天才と言うのは愚かでしかなかつた。といつよりも青神の料理の腕前をかなり甘く見ていた。

実際に作らせてみれば手つきは器用だし、指を切るなんてドジはない。ましてや塩と砂糖を間違えました。なんてオチもないまま料理は進んでいた。途中までは。

そう、手順は一見、肉じゃが、完成品も見た目は肉じゃがのはず。なのに完成目前にして、肉じゃがが肉じゃが？になつていた。

言葉に表せない。ただ、俺の第六感か何かが忠告をしてきたのだ。禍々しいオーラを放つていると。

その時の俺が青神に1つ言つた言葉がある。それは

「悪かった」

そう謝罪の言葉。次に続いた言葉は人には向き不向きがあるんだ。だから気にすんなよ。ほら、洗濯とかはどうだ？という慰めの気持ち120%の言葉だ。

それに洗濯の時に青神の下着を洗うのはやはり気が引ける。俺の知り合いにはむしろ喜ぶ奴もいそうな気がしたが気にしないことに。そのあと洗濯をしたが、洗剤の量を間違えたわけでもないのに洗濯機から泡が溢れるという怪奇現象。

掃除機を使えば吸い込みが悪くなり急に吸えなくなる。

きつと運命だ。そう感じた。つてか有利得ねえ。何やつたらそうなるのか分かる奴、もしくは同じ現象が起きる奴がいたら教えて欲

しい。

ついでだが肉じゃがを少し味見したが気が付いたら朝で青神に起  
こされていた。

そんなこんなで2日目は終わっていた。

肉じゃが騒動？いやどうでもいいけど。とにかく目を覚ましたのはいいが、既に時間は1時を過ぎていた。

ふと気が付いてキッチンに行くと何かが爆発でもしたのではなかと疑う惨事。

青神曰わくカツプヌードルのためお湯を沸かそうと鍋に水を入れたらなつたらしい。

その後青神にはキッチン入室禁止令が出ることになる。あ、ここテスト出ません。

そんなことはさておき、三日目ともなり、青神が惨事を起こさないようにキッチン入室禁止にしたことは有効だった。だつた。

確かに三日目にはこの後何もなかつたさ。問題は四日目。食材が尽きようとしていたため、スーパーへ。

そこには蒼髪の大きい子供がいたのだつた。

カートを押して走り回り、試食品を食べ漁つたりとまあそんな感じ。正直いい加減に大人しくして欲くなつた時にガチャガチャの機械に手を突つ込む。

すいません。この人は知らない人です。信じてください。ああ、そここの青い方。僕に手を降らないで。

とまあものすごい勢いで恥をかいた四日目。

五日目。この負の連鎖を食い止めるべく俺は家から出ないことに。そんなものは意味がなかつた。青神は自分からハプニングとかそんなのを集めているような気がするよ。

青神がいきなりテレビに怒り出したと思つたら、外から犬が入り込んできた。多分青神関係ないです。

六日目。そろそろネタも切れてくる頃、だらうと踏んでいたが間違

いでした。

庭で何かをしてると思えば蜂をつづけていた。するどどりだらう？家中に入り、俺を襲つてくるではないか。青神はどうした。なんて文句も言えないまま蜂が家からでるまで走り続けた俺だった。

7日目。家のインター ホンが鳴り、訪問販売だと分かり、無視：だつたはず。しかし、若干一名がものすごい興味を示し、販売員の方を家に迎え入れるという事態。

こんな一週間だった。一週間を青神に費やしてしまった。そんな俺から一言。

春休みはどこへ行つた？

さて、何故青神に時間を費やしたこと後悔しているのかといえば。明日は入学式。そう思い支度をしてると封筒から面白い冊子が幾つか。

春休みの課題という面白いタイトルで、なんと自分で文章を書いたりするというのだから尚更面白い。

「やつてられるかー！」

「いきなりどうしたの？騒いだら神罰よ。神罰」

「前も言つたがシャレになんねえって。それどひろじやねえ！春休みの課題なんてもんがああ！」

大空落胆。もう僕は死にましよう。冗談はさておき、いきなり課題を忘れたら先生に目をつけられ、俺の学校生活はいろんな意味で落ち着いたものに…

「青神、手伝え！国語ならやれるはずだ！」

「仕方のない奴だ。どれ、見せて？…」この程度なら…漢字なら

…

「それだけでいいからやつてくれ

こうして俺の春休み課題大騒動は始まった。

次々とやつてくる数学の文字式、関数という弾幕をさけながら英語の長文に赤ペン攻撃。戦いは過酷を極め、そして長期に渡つて行

われた。

終わったのは深夜3時。これだと学校で寝て、最終的に先生に田をつけられることは変わらないような気がしないでもないがもういい。寝よ。

そして俺の春休みは不幸やら参事やらのみで構成されていったのだった。

## 右往左往の夢生活（スクールライフ）

そして入学式。私立方応高校までの道のりには幾つもの桜が咲き乱れ、まるで俺の初登校を迎えているように見え、また登校初日に遅刻しそうな俺をあざ笑うかのようにも見える。そう、まさしく、今、現在、ナウ、今マジピンチ。

説明会の時は見れなかつた通学路を見ながら登校なんでものをしてる場合ではないのだが、この状況で同じ高校の制服のはずの女子が何故か座つて花見中。よつて声をかけた。かけようとしたのではなく、"かけた"だ。

既に過去形、つい、さつき、前、最近、近々。最後のは違うが。同じ学年カラーの縁。間違いなく同じ学年。先輩を見ていたなんていうミスは犯してないはずだ。

「あの……？」

めげずにリトライ。俺のチャレンジ精神に火が灯る。

「すみません！：寝てるよこの人！」

意氣消沈。俺に灯つた火も見事に消えてしまった。

そうこうしている間に明らかに入学式の始まりを示してくる鐘が鳴る。

「ごめん、置いていきます」

そう言い残して体育館へとダッシュをかける。

行間

大空がいなくなつた家には青神が1人寝ていた。  
ふと目が覚め、お腹が空いてることに気付く。

「大空はどこに行つたの？私はいつたい？朝ご飯はどうしたらいのかしら？」

悩んだ末に思いついた青神は家の外に飛び出す。飛び出してから

気付き、鍵をかける。そして昼間のおばちゃんがつづく街中へと消えていく。といつよりその姿を現していく。

やつとの思いでたどり着いた体育館。例のとおり、列の一番後ろの席へと座る。実際この席が誰の席かは不明だ。

「そこは先生の席ですよ？ 体育館にギリギリ入場の新入生君？」

「ええっと先生さんっていうの？ 珍しい名前だね」

「素敵な『冗談』ですことで。あなたのお名前は？」

「大空です…」

「大空…私のクラスね。あなたも珍しい名前だから覚えてるわよ。ついでに私の名前は芳川咲子よしかわさくよろしく、ね」

「素敵な笑顔で…ははは」

初日から目をつけられましたが…なにか？ もういやだ。それだけ言わせて欲しい。

芳川先生に促されるまま俺は一番前へ。天月はあから始まる名字だ。小中学校から俺は名簿番号1番という宿命みたいなものを背負つてきたのだからもう慣れっこだ。

舞台の上では校長らしき人物が立ち、長々と話を続ける。なんというか、とても恰幅がいい体をしていて、いかにも校長といった風貌で、いつかカツラ疑惑が浮き出るのではないかというぐらい黒毛がふさふさである。

まあ、それは後々分かるだろうことだ。さてそろそろ上まぶたが重くなってきた。理由なら分かつている。睡眠不足に先ほどのダッシュ。受験の運動不足も祟つて本格的に疲れているようだ。

頭が前後にガクンと揺れる。眠気がピークに来るとなるそれだ。再び頭がガクンと揺れる。横に揺れる。…横？

「オッス、寝坊助君。起きてなきやだめだよ」

「ああ、すまん」

横の席の人気が俺を起こそうと揺らしていたらしい。この口癖のようなオッス。どこかで聞いた気がする。はて、どこかで聞いたのか。

「灯莉か？」

「正解！同じクラスだと思つたらいいからビックリしてたんだよ」「ちょっと寝坊してな…」

灯莉は軽くすみ笑いをしてから言つ。この仕草を見ていると何となく落ち着く。

「確か、説明会の日もそつだつたよね」

「まあな。一応そうだな」

「一応？まあいいや。同じクラスよろしくね」

「いらっしゃ」

この瞬間俺は自分の脳を覚醒させる。背後からただならぬ殺氣が送られてくるのである。

「ま、また後でな…」

そう言つて視線を校長に戻し、式の続きをやはり、友達が出来るか…不安になってきた。

そんな俺の不安はそっちのけで式は終わりを告げ、教室へと移動。そこには中学で見なかつた顔ぶりばかり。それもそのはず。同じ中学生の奴は海斗しかいないのだから。

なかなか話かけられないのは誰もが同じで自分の席に座つて大人しくしている状態だ。

式の灯莉の席からして隣なのではと期待もしたが、窓側に男子、廊下側に女子とぱっくり割れているため都合よくはいかなかつた。

そんな誰もが沈黙を築く中、教室のドアを開けたのは、芳川咲子。推定30才の眼鏡女教師。こうしてみると意外に美人かもしれないと思ったのは俺だけではないようで。周りの男子生徒から聞こえない歓喜の声が聞こえてくる。この歓喜の声は男子にしか聞こえない周波数のはずである。

とまあ、自分の年齢以外の自己紹介をあらかた終え、一つだけ、

と芳川咲子（約30才）は言い放つ。

「この学校の行事の優秀成績クラスには毎回素敵な贈り物がある。お前達に学力成績は期待しない。だから私は…行事のみに力を入れる…」

よく分かんないが景品が出るらしい。それが欲しいらしい。つまりは勉強しなくてもいいということ?

クラスではよく分からぬまま芳川咲子（30才でいいや）に拍手が送られる。きっと30才にしか聞こえない周波数で歓喜の声も聞こえるはずだ。俺は若いから推測の域を脱しないんだけど。

その後芳川咲子（三十路）はなにかアクションを起こすこともないまま、役員決めへと入り、俺は文化委員という、やること不明な職業を選んだ。というよりは選ばされた。じゃんけんに負け続けた結果だ。ダマ神殿に行つても転職は出来なさそうだ。ちなみに灯莉は説明会の時に目立ちまくったのでクラス委員に推薦。そのままクラス委員に一直線であった。

そんな感じで12時には放課後となり、灯莉が俺の方に飛んでくる。

「同じクラスだよ！これって運命とかかもね」

運命…ね。その台詞が嬉しいはずなのに周りの視線が痛いため、素直に喜ぶことが出来ない。

「ああ！今日は早く帰つてきてって言われてたんだった！そういうことだからまたね」

そう言って手を振りながら走つていってしまった。

残つた俺は3人の男子生徒に囲まれていた。もちろん俺は覚悟決めた。

「どうやって仲良くなつたんだ！」

「俺達にも紹介してくれ」

「メアド！メアド！」

「もう師匠と呼ばせてくれ」

「それじゃおかしいだろ？」「はもつ…」

「 「 「 番長で 」 」

「 なんですか？」

理解出来なかつた。したくなかったのかもしれない。

「 いや… もう番長でしょ 」

「 そうに決まつてる 」

というわけで俺はこのクラスの番長となりました。別に強いわけではない。ただ灯莉と仲良くなつた、それだけ。

「 あのさ、出来れば止めてほしいんだが 」

「 止めません！ 」

「 番長 」

「 分かつた。分かつたから。とりあえず帰らしてくれ 」

「 番長のお帰りだ 」

「 道を開ける！ 」

「 「 「 お勤めお疲れ様です！ 」 」

俺の高校生活はどこかで足を踏み外し、階段の一一番下まで転がり落ちていつた。

多分子分になつた、もしくはなつてしまつた3人に見送られ帰宅。疲れがどつと出てソファの上で一段落。しかし、大切なことを忘れているのではないか。それとも、忘れていたかつたことかもしれない。

「 青神がいねえ… 」

悲劇再来の予感。

そして電話が鳴る。

予感的中。

恐る恐る受話器を取る。

「 もしもし？ 大空君？ 青神ちゃんがまた来てるんだけじ引き取りに来てくれないかな？ 」

「 あーはい。出来れば始末してください 」

「 ま、とにかく取りに来て。じゃあ 」

俺は1つの予想を立てつつ交番に向かう。その予想。それは…

「青神！また大護さんのカツプヌードル食つたろ！」

「美味しくいだい」

「大護さんも何か言つてやつてください」

「そつだね。そもそもカツプヌードルといつのは宇宙食でね？それが市販されるまでの道のりと言つたら万里の長城ほどで。そつそつ、万里の長城は北方の人から守る一つの城塞で…」

「ストップ！止めて！もういいです」

「そつかい？とにかく僕が言いたいのは青神ちゃんを連れて行つてくれるかなつてこと。ちなみに青神ちゃんていつのは名字の青神と蒼い髪を掛けたんだ。これは古文における掛詞といつ技法で…」

「連れて行いきます！今すぐ行きます」

「もう行くの？もう少しゆつくり寝ていつても…」

「習慣になつてる！？いいから行くぞ」

「また来るから。カツプヌードルを用意してなさい」

「またね～」

その後寄り道もせずに帰宅。そして青神反省会開始。

「なんで家から出た？」

「朝ご飯がなかつた。私はお腹が空いていたの。だから食べ物を探しに行つた」

「それに関してだが朝ご飯はトーストを焼けと言つたはずなんだが」「そもそもトーストとはなんなの？」

そこから青神朝ご飯レクチャーが始まつた。爆発癖（？）がある青神でもこれはなんとかなり、はれて青神は朝食当番に認定されたのだった。

「それで、学校はどうだつたの？楽しかつた？」

「そつだな、つまらなかつたつて言つたら嘘になるけど、とりあえずは大変だつたかな。特に…」

今日学校で起きたことあつたことを青神に話していく。青神は一切口を挟まず、ただ俺の話に会釈をしていた。

「…とまあこんな感じだな」

「学校の話をする大空はなんか楽しそうね。決めた、私も明日から学校に行くわ」

「そんなこと出来るわけねえだろ」

「出来るわよ？私は神様。出来ないことは無いのよ」

「考えてみる。新学年早々に転校なんてのは違和感ありまくりだろ」

「留学生とでもしどけばなんとかなるわよ。幸い私はこの蒼髪。外国人に見えるわよ」

「じゃあ、英語は分かるのか？そもそも元から蒼髪の人間なんてもんはいねえ」

「なんとかなるわよ。話は聞いてた？私に不可能はないの」

「じゃあ見せてもおうか？その力を」

「いいわよ。待ってなさい」

そう言つと青神は家の外へ飛び出していった。

普通に考えたら無理だろう。新学年始まつたばかりというのもあるが、あいつが留学生というのにも無理がある。つか、入学説明会の時、俺の親戚として来てなかつたか？

灯莉とかにはなんと言つつもりだ。

それ以前にあいつの入学を許可するはずがない。金もない、学もない。そんなやつが入学出来てたまるか。

俺が青神の入学を嫌がっているのかつて？分かるだろ？間違いなく面倒くさいことになるに決まってる。断定の意味を重複させる程に確信を持たせる。先週だけでもう懲りた。出来れば出て行つてもらいたいくらいなのに。

そんな俺の苦悩を嘲笑うかのように青神は二二二で帰ってきた。満面の笑みを見ていたら分かるのだが一応聞いてみることにする。この笑みを可愛いとか思ったのは間違いである。しかし、帰つてきた返事は本当らしい。いや、間違いであつて欲しい。

「明日、一緒に登校するわ」

「面倒くさいことになっちまつた。どうやつたら入学出来たんだ？」

「私は神様よ？その存在の力は周りの人達に影響を与える程のもの。」

その存在の力を使えばすぐだつたの

「ソレハドウイウ「トデスカ？」

「大空に分かるように言つなら… そうね、例えば今の時代の大統領。近くにいるだけですごい何かを感じるでしょ？」

「会つたことないのに知つてゐわけねえだろ」

「とにかく大空の周りに一人偉い人がいます。この人がこれをやれ

つて言つたらその人の言つことを聞いちゃう。そんな感じのこと」

「ということはお前が入学したい！ って言うだけで入学許可？」

「そう。あの校長、結構、気が滅入つてるわね。こんな私の存在の力に負けちやつて」

「どういうことだ？」

「あ…えと、校長はね？ きっと上の人とかに気を削られてるのねつてこと」

俺が聞きたいのは校長の気が滅入つて、その後だつたのだが正直そんなことはいい。

「本当に明日から学校に来るつもりか？」

「もちろん」

俺は床に頭を押し付ける。やつてられるか。明日から面倒事が増える。ただでさえ平凡という名の日常に見放されてきているに、追い討ちをかけられているらしい。俺つて奴はつづく運の無い奴だな。

「設定は昨日まで風邪をひいていた留学生。日本人がぶれの両親に育てられたので日本人学校に通わされ日本語しか話せずに今までを生活。高校生にもなるのだから自分一人で生きろ、と言う両親に愛想を尽かして留学してきた、だからね？」

「だからね？ ジャネエ！ しかも自分一人で生きろと言つ親に愛想尽かしてホームステイ？ 本末転倒も甚だしいじゃねえかこんなにやうう！」

「何をキレてるの？ とにかく制服とかも貰つてきたし抜かりは無いわね。明日から学校に行くわよ！」

はしゃいで踊る青神の姿を見ていたら、まんざら一緒に学校生活もいいのかもと、思ったのは気の迷いなんだろう。

そして問題の翌日の朝。

朝食当番の仕事をしつかりと果たした青神はトーストとサラダ、ハムエッグという“料理”を完成させていた。トーストの成功確率は1／10。サラダなのに1／5。ハムエッグに至っては卵を2パック使って一つの完成率。それを成功させたのだから驚きを隠せない。神様だけに神業。きっと座布団を一枚持ってきてもらえるだろう。

「青神、これを全部お前がやつたのか？」

「ええ、そうよ」

その時俺は氣付いてしまったのだ。奥のキッチンから見える失敗の痕跡に。

「つたく、意地張ってる場合かよ？片付けはしつかりしとけよ？」

「な、なんの話だか、さつさつぱり分からぬわね」

「そつかい。だったら早く食べよう。冷めちまつ」

「そうしましょ」

この日の朝食は俺の記憶に強く深く刻まれた。

明らかに調味料を間違えたハムエッグを食べたこと。それを無理して上手いと言つ俺に自分の分も差し出して俺の食べるところを子供のように笑つてる青神の顔。

出発の時、説明会の時とでは明らかに違つこと。青神が制服を着ている。

「どう？この制服は私に似合つている？」

「お前中心かよ！でも、似合つてると思つ」

「そ、そう？」

「つていうかいつも青のドレスみたいなのだからな。新鮮つていいの？」

「はあ、大空はれでえに対する接し方を知らないのね」

「レディだ。れ、で、い」

「そうレディに対する接し方を知らないの」「そりか？」

「そりゃ。だから灯莉にも嫌われること間違いな」「はうわっ！？」「はうわっ！？」

「それどこのか同じクラスにいる」とすら煙たがられるに決まつて

るの。可愛そうな大空

「ぐおっ！」「ぐおっ！？」

次々と言葉のナイフが突き刺さる。これが素直に褒めて欲しかつたのに褒められなかつた青神の怒りと氣付くことはなかつた。

「レディに対する接し方を知らないのが悪いのよ」

そういうしてけ棘どころか鋼のナイフのような言葉を浴びせられ、ピクピクしてける俺を見て充分楽しんだ青神は学校に行きたくて仕方ないらしい。

まだ弱つている心と体をなんとか立ち直して学校へと向かう」とにした。

登校風景。それは桜舞う坂をたくさんの生徒が歩いている風景。一年生らしき人はまだ友達もいないせいか、一人で歩いている様子が目立ち、上級生は笑いながら話をしている。それが登校風景。もう一度言つ。それが”普通”的の登校風景。

決して後ろから「番長～」とか「今日はど～」を攻めるんですか？」とか言われるのは”普通”ではない。そしてこんな”異常”を俺は求めた記憶はない。

「大空はなかなか面白い友達がいるみたいね」

青神はクスクスと笑う。この際可愛いとかは本当にど～でもいい。

「なんとかならないのか？」

「知らないわよ。大空が何かやつたんじゃないの？」

「そりやそんなんだろつけどさ。別になにかやつたわけじゃないからな？」

「番長！新しい女つすか？くそつ！流石番長！痺れる憧れるうー！」

「いい加減止めてくれないか？番長て呼ばれたらあからさまな勘違いを招くだろ」

「でも番長は」

「どこまで行つても」

「俺達の」

「「「番長ですー。」「」」

ああ、もう、諦めた。

こんな奴らにかまつていると間違いなく遅刻になる。そう確信した俺は登校風景に混じりつと必死に登校してみる。

「オッス！」

「またか？いい加減にしろ……って」

そう灯莉だつた。

「…嫌だつたんだ。うつとうしことか思つてた？そつだよね。もう近付かないから。青神ちゃんと幸せになるんだよ？」

「ちょ、待つて…」

灯莉はそのまま走つて校舎に入つていぐ。

「あらら。私の言つたことが本当になつちやつたわね

「はあつ。なんて言えば良いんだ？」

「レディに対する接し方を学ぶには良い機会ね。まあ、頑張りなさい」

「お前は手伝つては…くれませんね」

青神のあからさまに嫌そうな顔を見て心が折れました。ていうかそんな顔しなくとも。

朝つぱらから精神的に大ダメージを受けながら登校する俺であった。

教室に入った俺は本格的に凹んでいた。

一日惚れの女の子と勘違いのすれ違い。

視界の隅に映る灯莉は近くの女の子としゃべつている。なんだか男側と女側の間にはバリアといつかマジックミラー的なものが張つてあるのだろう。こちから見えても向こうから見えない。そんな

感じ。

いつのこと、このまま学校をバツクレたい。むしろ転校を考える。

そんな鬱モード突入中の番長に話しかけてくる勇者は存在した。「ねえねえ大空だけ？ 昨日とはまた違う凹み方をしてるね。今日は何があつたんだい？」

一つ感じたことを言つておこひ。この男は人の不幸を楽しむような奴だ。俺に不幸を尋ねながらにっこにこして居る奴はそういう奴に決まっている。

「今日は何があつた？ もしかして陽炎さん？」

訂正。こいつは人の不幸を分かつていじぐるのが生きがいのような奴だ。

「ご名答？ 当たつた？ その顔が全てを物語つている。ああ、何が！ 何がそうしたんだい？」

「ちょっととした行き違いだ。それ以外のなんでもねえ」「本当？ 例えば番長、番長としつこく言つてくれる三人だと思つて何かを言つたら陽炎さんだつたとか」

「お前性格悪いだろ」

「そんなことはないよ。ちなみにお前ではなく寺屋守和だからよろしく」

「守和とか。早く自分の席に座らないと三十路がキレる」

「三十路…なるほどね」

「あなた達は変わったジョークが好きなのかしら？ それとも廊下に出てるのか？ 職員室か？ ああ？」

「先生口調が変わってる…」

「知つたことか！ さつさと廊下に立て！ その後職員室だ！」

正直恐ろしい。それはこの現場を目撃した人達全員が頷くだろう。感想だつた。

またこの時クラスの中に一つ掟が定められた。

「、担任を怒らせるべからず

」の担任教師芳川咲子の豹変ぶりは語り継がれることとなる。

ちなみに職員室に呼び出された俺と守和は先生の年齢について1時間語られた。芳川咲子は未だ25歳。先生になつてまだ日が浅いらしかつた。まあ、それを素直に信じるようなバカではないのが俺。守和も分かっているらしく、何を考えているのか分からぬ笑みを続いている。きっと面白いとかなんとか思つてゐるんだろう。

朝っぱらから踏んだり蹴つたりなのはこの際気にしないことにした。

「どうよつそうせざるを得なかつた。よくよく考えれば青神は教室にいる。なにも起こさないわけがない。」

職員室を出た後、俺は急いで教室に駆けつける。

「青神！」

「どうしたの？ そんなに険しい顔をして」

「あ、いや、別に」

予想に反した行動に俺の立場はなくなつた。ていうかクラスの女子の名前をいきなり叫んだりしたら明らかに怪しい。「もしかして龍美ちゃんと大空君がデキてるつて本当？」

「当たり前ッスよ」

「我らが番長なんですよ？」

「女の1人や2人造作もないんだからな！」

またこの3人。俺のスクールライフを乱すのはこの3人。

「よし、そろそろお前らの名前を聞こう」

「小林ッス。番長に名前を覚えてもらえるなんて…く～光栄ッス」

「中林ですよ。以後お見知りおきを」

「大林だからな。よろしくだからな」

自己紹介の順から、チビ、眼鏡、デブというなんともズッコケそうな組み合わせではあると思ひ。

「その林達。いい加減番長呼ばわりは止めないか？」

「嫌ッス」

「嫌ですよ」

「嫌だからな」

「もう嫌だ…」

「ねえねえ！龍美ちゃん。大空君とは『テキてるの？』

「『テキてる？一緒に住んではいるけれどそういうことかしら？』

「本当だつたんだ！信じなくつて悪かったわ。林一ズ」

「てめえらしい加減にしやがれ！俺に恨みとかあんのか！林一同！

次、番長呼ばわりしたら分かつてんな？」

「はいッス！」

「はいですよ」

「はいだからな」

「で、何を分かつてるんッスか？番ちょ…」「オイ、殺すぞ…？」

「分かりましたッス」

「青神」

「なにかしら？」

「順を追つて説明しろ。一緒に住んでる。それだけじゃ誤解以外に生まれるとしたら

「子供？きやー！」

「目を不等号にする女子、少し黙つてくれ。とにかく説明をしつてか、してください」

「仕方ないわね…」

「これであらぬ誤解が少し解けると思った時だ。

「まず私は神…」

「オイコラ、青神。土下座の用意してこひがいこ

「嫌」

「土下座するから来てください」

「仕方ないわね」

「俺はそつと耳打ちをする。

「いいか？学校で神はなし。変人としか思われないからな

「へんじん？そんな神はいたかしら？」

「…分かつた。言い直す。変な人にしか見られない。ていうか人の格好をしてるんだから人間として振る舞え」

「分かつたわ。で、土下座はどうしたの？」

「…家でな。とにかく今は人として説明してこい」

「きちんと説明はするわよ？でも絶対服従だからね？」

なぜ土下座から服従になつたのかが不思議でたまらない俺であつたが今は説明が優先、ということで青神をみんなのもとに行かせる。マニュアルを読むかのように淡々と台詞を述べていく青神。その様子を見ているクラスメイト。

「…というわけなの」

「ぐおー！感動したッス！やつぱり番長に着いてくッス！」

「番長言つな」

「番長ですよ」

「番長だからな」

「番長よね？天月君」

「番長なんかだつたの？哀れね、大空」

「哀れみを受けるとは思わなかつた。つーか林一同じい加減にしやがれ。でないと視界に入ることも許さねえ」

「はいッス！」

「はいですよ」

「はいだからな」

「そもそもどこが感動だ？言つてみる」

「全部ツス！ばんち…じゃなく天月さんの全部ツス！」

「ホームステイを無期で行うなんてすごいですよ」

「そもそも青神さんの境遇から涙もんだからな」

「ここからよね？愛のストーリーが始まるのは」

「よね〜」

頭が痛い。とりあえず殴つていいか？あのとつてつけたような話に騙されるのか？それでいいのか、お前ら？

「そういうわけ。とにかく私は普通の人だからよろしく」

「で、だ。貴様ら。いつになつたらホームルームを始めればいいんだ?」

「えと…優しい先生はいづこへ?」

「悪い生徒が更正したらかな?さあて、誰からじばかれたいんだあ?」

「…いつ元ヤンか?などとピンチの中悠長な考えをばびこらせる時。

「先生、ホームルームを始めましょう。時間が無駄になつています」「そうね。陽炎さんが言つならそつしましよう。さあ、ホームルームを始めましょう!」

こうしてみると灯莉はやつぱり優等生なんだと実感する。あんなに軽いノリの灯莉が嘘のように思われてくる。

ともかく、灯莉の手助け?により九死に一生を得た林一同、目が不等号になる女子(今も半泣きのため不等号)2人、青神と俺、なぜか途中でこそそと入ってきた守和だった。

その時灯莉と目が合つ。朝の事があつてから今日は一回も会話はしていない。そんな彼女が俺にアイコンタクトを送つてくる。俺は必死に受け止める。

所詮はアイコンタクト。いくら必死に受け止めても所詮はアイコンタクト。

意味は一切伝わつてこないのだった。

「もう!アイコンタクトしつかり拾つてよ!」

「そんなこと言われましてもね…」

そして1日の授業…といつても新学期早々なので1日中ホームルームなのだが。そのホームルームが全て終わりみんなが帰宅に精を出そうとしている中、自分もその流れに乗つてみるかな?などと思つた時だった。

灯莉が声を。かけてきた。

「…言。ヤツホイ。」

「…言。怒つてる?ヤバい?」

三言。「ごめんなさい。すみません。もうしません。  
とまあ、三言だけ声を出してい自分に笑っている灯莉にほつと  
した。

そして今に至る。

「普通は拾えるよ！ね？龍美！」

「そうね。灯莉、少し試してみて良いわよ」

灯莉が青神にアイコンタクトを送り。そして返事をするかのよう  
に青神もアイコンタクトをする。

「で、内容は？」

「今から遊びに行く」「

「聞いていいか？」

「「なに？」

「いつからそんなに親しくなったんだ？」

「今日よ？ほとんど初対面よ？今日に決まってるじゃない。大空は  
アホ？アホなのね」

「アホ言うな。で、2人仲良く遊びに行く、と。青神、金無いだろ  
？ちょっと待て二千なら今持つて…」

「待つのは大空君です。今から行くのは街でもなんでもありません。  
強いて言うなら住宅街です」

「簡単に言うなら私は家に帰るわよ

家に来ると？

「待つのはそっちだ。どうしたらそんな話になつたんだ？間違つて  
いる。間違いなく間違つている」

「ややこしいですね…。とにかく行けばわかりますよ。わた、行き  
ましょ、行きましょ」

「ノーと言えない日本人。そして俺は日本人。しかし！俺は言つ！  
ノーと言つてみせる。

「の…」「行きたいの」

黒く澄んだ瞳を潤ませる。

日本人関係なし。俺は男です。これは反則。レッドカードです。

「僕も行つてみたいの」

俺を正気に戻したのは海斗の気持ちの悪い一言だった。

「去ね」

一言放ち、海斗を沈める。

「とにかく今日はダメ。また今度にしよう」

「仕方ないわね。灯莉、それじゃ待たね」

「龍美、青神君と…誰かな？待たねえー」

例によつてあつという間に教室から姿を消す。

「さて俺らも帰るか」

「そうね」

「じゃな海斗」

「出番短つ。ぐすん、バイバイ」

各自帰宅へと精を出すのであつた。

## 発進無機物生命体（ロボット）

それは入学して一週間が経つといふところだらうか。  
クラスに知り合いもなく、少し寂しかつたりしてナーバスになるけれどそんなことで凹んでる場合じゃない。

今の状況を整理しなくては

僕、水沢海斗の歩く道の前に美少女が倒れている。  
何のフラグだ？これはもしかし結構ムフフなフラグでは？この後の展開を妄想していると少女が言葉を発する。

「あ、あ、ああああ！」

「ひえええっ！」

「なんだ！なんだ？なんなんだ！？」

「機能停止します」

「はい？」

何がなんだか分からぬ。

ともかくこんな場所でおどおどしていくても怪しいだけなので自分の家に少女を連れて行くことに。

腕を肩にまわし、彼女の体を持ち上げる。その時。

「重つ…。何キロあるんだ？男子でもこんなに重くないぞ」「ふとある場所に目がいく。男になくて女にある場所。

大きくて丸くて白くて柔らかそうな場所。そう胸である。確かにこの少女の胸は何をしたらそうなるのか不思議なくらいに成長している。スイカでも入つてゐるのではないか？と疑いたくなるレベルだ。

勝手な解釈で納得し、彼女を持ち上げる。

家に着くまで30分もかかつてしまつた。

自分の非力をひしひしと感じながら少女を見つめる。

翠の髪に透き通るような色の碧眼。服装は見たことのないピチッとしたボディースーツ。しかし、胸やら腹やらなどを露出しており、

肝心な部分が隠れておらず、大事な部分だけが隠れている。

正直な所、怪しい。

180。怪しい。

つまり半信半疑。

彼女が目覚めたら聞かなくては、と思いながら再び顔を覗き込む。その顔を見ているとなんだか怪しくても良いんじゃないのかと思つてしまつ自分がいた。

なんて思つていた矢先。

「機能再開。安眠モードから日常モードに移行」

「えっと、や、その、あのね？大丈夫？」

これぐらいのことしか言えなかつた自分が悔しい。もつとなかつたのか自分。

「大丈夫とは？至つて正常です。そちらの名前を伺いたいのですがよろしいですか？」

「あ、名前、水沢海斗。それが僕の名前。君は？」「名前？私は無機物生命初号機・玄型です」

「えつと…無機物？」

「はい。私は神によつて作られた対神無機物生命体初号機・玄型」

「さつきより一言何か増えてない？」

「気にしないでください。それより私はなぜここに？」

「ああ、道で寝てたから拾つてきたんだ」

「あなたはここから南の神社でお祈りをしましたか？」

「さつきから話が飛び過ぎじゃない？」

「そんなことはありません。もしあなたがお祈りをしていないと言つならば、私がここにいる意味も、私があなたに話をする意味も、私がここにいる意味もありません」

「ここにいる意味がないって一回も言ったね？ははは…」

「すみません。まだ言語機能に不具合が生じているようですが…」

「京都弁！？」

「京都弁ちゃんといます」

京都弁だよね？もういいか。いいのか自分？

「それより南の神社には行きはりますか？」

「え～っと、受験の時くらいかな？合格しますようひつて「すると田の前の無機物生命体（まだ信じてないで仮）はペペペツと機械音を発する。

「確認完了しました。これより登録を開始します」

「登録つて？え？ちよつ！」

氣付くと僕の両肩は無機物生命体（機械音出したよ？本当にロボット！？）にがつしりと掴まれていた。

「□先約束開始」

するとおもむろに唇と唇を重ねようとしてくる。

「ちよつ！□先の意味が違つ、んつ！」

奪われた。

ファーストキッス。

いや、別に悪い事ではないだろ？ナビ、わっしとシチューニューションとか大事だと思つよ？

ってか長い。

「□先約束完了」。これにて海斗をマスターとして登録。今後は常に一緒に行動しますので、よろしくお願ひ致します、マスター

「ああ、よろしくおね… つてなるか！なれるか！」

目の前の無機物生命体（ファーストキッスの相手）は不思議そうに首を傾げる。

「なぜでしょうか？」

「なんで当たり前のようなになるのが聞きたいんですね？」

「望んだのはマスターでしょう？冬の寒い日、あなたは祈りを捧げました。その祈りを叶えるのが神の僕たる私の仕事」

「でも、高校も無事入学したから別にいいんじゃない？」

「あなたは他に彼女が欲しいと申しましたのでそれが叶えられるまでになります」

…調子に乗つて願い事を増やしたのが問題だったのか。そんな自

分を反省。

「あなたに彼女が出来るかは正直怪しいですが精一杯、頑張りませう」

「また言葉がおかしくなつてゐるよ」

「これは失礼」

この無機物生命体（でいじよ、もつ）はどうやら僕の部屋に住み着くらしい。

それがこれからどう動くのだろうか。こんなフラグは立つたこともなければ、考えたこともない。

ただ一つ。

「マスター、早速彼女を作るために考えたんじゃが…」

「ふつ、また言葉が」

毎日に飽きることはなくなりそうだ。それから僕の忙しい毎日が始まった。まず初日。

無理にでも学校に着いて「よつとする無玄を止めるのに苦労する。あ、無玄つていうのは無機物生命体・玄型の略でこの無機物生命体の名前。本人はいらないなんて言つけど、それでは呼び方はどうするの?と尋ねてみたら

「ハニーもしくはお前」

というバカげた返事が返ってきたのだつた。

「もちろん冗談です。マスターにそんな呼び方をされるなんて汚らわしい」

あれ?まだ言語機能に障害があるのかな?ていうか「冗談を言つ機能も付いてるのか。どんな無機物生命体(やつぱり人じやねえ?)」

だ。

とまあ(?)なんとか学校に来るのは控えてもらつたけど、家に帰つたらそれはもう大変なことに。

もちろん僕には家族がいるわけで。両親と2つ年の離れた姉がいるわけで。そんな家に不思議な無機物生命体少女がいるわけで。もちろんいらぬ誤解を生むわけです。

両親に説明をすること一時間30分。やつとの思いで説得し、外国人の行き倒れということになった。確かに行き倒れていたので嘘などではない。

問題は姉。両親と違いこの状況を面白がっているためか、なかなか説得出来ず、結果的に姉の中では出会い系の女の子ということになってしまった。

どちらにせよこの無玄はこの家の居住権を手に入れたことで食卓にはイスが一つ追加され、5人で食卓を囲むことにしてか無機物生命体よ。有機物を摂取するんか。無機物生命体に対してツツコミを入れたい自分を必死に押さえ込む。

その後の日々は日本の一般常識を教え、片っ端から僕の彼女候補を探し、ナンパすることを止めさせた。

さすがは無機物生命体、記憶能力がかなり高いと見える。言われたことはきちんとする。しかしだな。応用力が無いにもほどがある。ナンパを止めさせたら問答無用に連れてくるわ、それを止めさせたら、明らかに詐欺な口調で変な契約をさせようとするわで大変なのだ。目的を達成するにはどんな手段もいとわないとかなんとか。他にこんな話がある。

その日俺はいつも通りに風呂に入っていたんだ。そしたら急にドアが空くその先にはタオル一枚の無玄が立っていた。

「お背中流しましょうか？」

「…………え？ と、む？」

正直に言おう。出てけというか悩んでいた。だってそうだろう？ 目の前にあんなブツを持つてこられたら悩む。男ならみんなが悩む。だってデカいんだもん。そのせいか僕は誤ちを犯した。

「じゃ、じゃあ、お願ひしようかな……」

自分で間違っているとは分かつていた。しかし、据え膳食わねどと言ひではないか。

最終的に期待を膨らませて妄想が危ない妄想まで飛んでいった時「するわけないやろ。汚らわしい。腐れマスターのくせに」

言葉が出ない。今の僕はきっと餌を待つ金魚のようになっているだろう。

「なら、そんな格好で入ってくるなよ…」

やつと出た言葉。「この言葉の意味をよく理解したらしい。

「この格好に問題が？」

それ以前にセリフに問題があつたのだが確かにタオル一枚で入ってくるのも問題だ。

「状況把握」

そう一言呟くと無玄は出て行く。やつとゆつくり風呂に入れると喜んだ矢先。

再びドアが開いた。把握してねえ！とツツコミを入れようとした時だ。僕は見た。幻の果実、おっぱいを。

「格好を変えてみた」

「出て行ってくれ！」

僕の鼻血が吹き出す前に！

渋々無玄は出て行き、平和な風呂場が帰ってきた。

外から一シシ、と黒い魔王と一緒にいる顔つきの悪い犬のような笑い方をするのを僕は聞いた。間違いなく姉の差し金である。無玄の思考回路はこんな感じだ。

姉にかけられる やつてみる つまらないので八つ当たり 僕の言葉で風呂場でタオル一枚の格好が可笑しいと判断 脱いだ。こんなところだろう。

という話。

人に言われるがままの人形のような無玄。それを少し可愛くも悲しくも思える。

僕は正座しながら湯飲みをする無玄の頭を軽く撫でてやつた。

「なんですか？急に。汚らわしいでしかないです」

どうやらこの言葉はお気に入りなのか時々意味もなく使いたくなららしい。そう勝手に解釈した。それに蔑む言葉が少し心地よくなつてきた頃だ。

まあ、そこまで言われたら流石の僕も手をどかす。

「む？ 続けてください。マスターに拒否権はありません

意味が分からぬ上に理不尽過ぎる。僕、一応マスターだよね？

と分からぬまま頭を撫でる。

「なんだかあつたかいでござんす」

「そうですか

もうどの言葉を信じればいいのか分からなくなつた僕はとつあえず無ぶの頭を撫でてこることにした。

そして思つ。ロイドはぱり有機物じゃない？

## 球技を統べる大会（ファーストイベント）

入学式から1ヶ月だろうか。今や日差しは暖かく、冷たかつた風は心地よいものになつていた。

青髪蒼眼も馴染んで：馴染んでいいのか？ともかく、美人な外国人さんがこの方応高校にはいたのだった。

そしてその美人な外国人さんは俺の家に住んでいるわけで。おかげでいらぬ誤解は飛躍に飛躍を繰り返し、いわゆる噂というものになる。それはとても恐ろしい化け物で、一緒に歩けば口笛が聞こえ、喧嘩をすれば痴話喧嘩と囁かれ…

「何をボーッとしてるの？私の話を聞かないなんていうのは… そ、神罰がくだるわよ」

ちなみにこいつは神様。神罰というのはつまり。

「ごふつ！」

青神が殴る蹴るの仕打ちをするだけだつたりする。

「で、善良な一般市民に神罰を与える神様は何の話を？」

「おーつとーボーッとしてる大空君が悪いよ。痴話喧嘩もいいけど球技大会の話し合いもしてよ？」

そしてこの痴話喧嘩と言い放った少女こそが俺の… そのアレで。今、俺の心は非常にショッキングなことになつてている。

その心情を察して1人で笑っているのが守和。人の不幸をとても楽しそうに笑う奴。

「なんで大空はフラグが…」

ぶつぶつ呟いている変な奴は海斗。保育園からの知り合い。それ以上でも、それ以下でもない。というか変人なので近寄らないで欲しい。

「ていうか海斗。お前のクラス違うだろ」「いいじゃないか！美少女のいる所に僕はいたいんだ！分かるか？この気持ち」「分からないから出てけ」

「ああん。殺生な」

「私をあがめなさい。そうすれば同じ次元にいる」とへりこは許してあげる

「有り難き幸せ」

「話し合ひは…どこの…つていうか話し合つてよ」

「いいか?話し合ひをするためにこのメンバーを集めた灯莉がまず間違っていたんだ」

「なんていう…。私が全部間違つていたの?つて協力する気ないの?」

でた。必殺(有効範囲俺のみ)いわゆる瞳。これをやられたら最後。俺に対抗手段はない。

「仕方ない。で、何を話し合つんだ?」

「そこからなの?えつと…人数の割り振り

「他には?」

「それだけ。みんなは何でも良いって言つたから仲良しでチームを作っちゃおうかなー?なんて」つまり、ということは、きっと、いや、確かに、灯莉と同じチーム?

「そ、そんなことをしてもいいのか?」

「良いの良いの。みんなくじでも良いって言つてたしね

「良いわけないだろ?陽炎までそんなことを…」

「げ、三十路」

「そうか、陽炎はこいつの毒牙にかかる…。よし、お前を殺して私は生きる」

「なら刑務所に行け」

「冗談はさておいて」

「冗談に聞こえないのが三十路の凄いところもある。」

「私は勉強をしなくて良いと言つた。しかし、行事を襲ひにするようなら勉強をさせてもいいぞ?そうだな、朝7時から学習会。夜7時までも学習会だな。なんとも楽しそうだ」

「…先生の要望は？」

「勝て」

「（）」で一つ説明をするが球技大会には上級生や先生チームも参加する。そこで勝てと？いやいや、無理だろ？

「いいか？私が考えたチームなら絶対に勝てる。1人1人の中学の体育の記録、性格、相性、全てを考慮した結果…眞面目にやればソフトボール以外は勝てる」

「え？ソフトボールは？」

「化け物がいる。だから使えない奴は全員ソフトボールに叩きこんでおいた。大丈夫。ピッチャーだけは野球部だ。そいつが抑えればそこそこいける。これがメンバー一票だ」

そこには1人1人に助言やらコメントやらが書き込まれ、敵の各チームに合わせた作戦までがあった。

「敵チームの情報は一体どこから？」

「くすねてきた」

全員の頭にハテナが浮かぶ。きっと三十路は頭が可笑しい。間違いない。

「とにかく、これで提出してくるんだ」

ハテナを浮かべたまま灯莉は頷いてそれを受け取る。

きつとこの球技大会は…荒れる。そう思つた。

ところで最初つから最後までクスクス笑い続ける守和はなんなんだ？

結果三十路は朝7時から練習、夜7時まで練習を行わせ、チームワークをつくり俺たちは大会を迎えた。

俺と灯莉はバスケ。青神はソフトボール。守和はドッジボール。灯莉と同じだ、と喜んだのは一瞬で、バスケは男女別らしい。

青髪がソフトボールなのは中学の情報が皆無なためぶち込んだらしい。後から後悔したのは三十路だった。

とまあ、長つたらしい校長の天氣の話がやつと終わり、選手宣誓。そして花火の音と共に大会が始まった。

第1試合バスケは隣の2組と当たった。1組こと俺達は試合前のミーティングで円陣を組み、気合を入れる。

試合開始のホイッスルが鳴らされる。よく見れば敵の中には海斗の姿が確認出来た。あいつはオタクで変態。そして運動が出来ない。出来る時は女子があいつを応援した時。その時の力はこの世の全てを上回る。しかし、一回戦というのはどこも試合をやつてるため、応援などいない。つまり、叩くなら今。

俺達はチームワークを生かしたバス回しで確実にボールをゴール前に運んでいく。そしてショート。

三十路ことみそちゃん先生はバスケのメンバーにドリブルは求めていない。バスのみだ。それだけでチーム編成をした。確かに即席チームじゃ、バスケ部員が走り回って他が着いてく密集状態になる。そこにバスが回せたら敵は前半から走りっぱなしになる。

そして前半終了時には14:38という結果だった。

来る後半、敵の走りっぱなしのメンバーが疲れ始め、足がもつれ始める。その中に1人、ゴール前に立っている男がいた。海斗だ。後ろには翠髪碧眼の少女が立っていた。一言言いうなら誰?だが、たくさん言うならその服装はなんだ?ボディースーツか?その割りには露出が高いだろ。海斗の趣味か?それなら彼女なのか?ていうか日本人?

頭の中が疑問でいっぱいの中チームメイトは確実にバスを回し、ショート。リングを確実に捉えたはずのそのボールがネットを揺らすことはなかつた。

ボールはいつの間にか海斗の手に。あいつ…跳んで取りやがつた。そしてホイッスルが鳴る。

そう、放物線の頂点に達し、一度落ち始めたショートに触るのは反則なのである。

しかし、目覚めた奴を止めるのは至難の技だ。

その時、後ろのよく分からん少女が呟いた。

「…汚らわしい」

その後に海斗が目覚まし活躍を見せることはなかつた。

こうして、無事に勝利することができた俺達は、試合がまだ続いているドッジボールへと向かう。ソフトボールはまだ始まつたばかりらしい。

ドッジボールでは守和が素晴らしい活躍をしていた。

いつも通りクスクス笑いながら、敵のボールを吸い込むように掴んでいく。バスのボールも、他の人物を狙つたボールも。そして敵に少し耳打ちをすると敵は簡単にボールに当たられ、アウトになる。ボールを取る技術もすごいが、何を耳打ちしてるんだ？ あいつの情報網の恐ろしさをひしひしと感じながら試合は1組の圧勝で終わつた。

そしてソフトボール。なんか青髪がホームランを打つたらしい。

その打球の弾道はまるで龍が昇るようだつたという。

野球部が無難に抑え、5対2で勝ち、俺達は無難に駒を進めていた。

その後、どのチームからも勝利の報告が入り、クラスの雰囲気は最高潮に達していた。

そしていつの間にか決勝戦まで進んでいた。恐るべし三十路パワーア。

決勝戦の前に昼休憩が入る。決勝戦は全員が見れるようになつてるらしく、一試合ずつやつてくれる。ちなみに俺達のクラスは既に総合優勝は決まっており、後は各競技のみとなつている。

総合優勝が決まったことでクラスの士気が更に高まる。

入学式の時の男女の壁などは存在しなかつたように思えてくる。昼食は円の状態で食べる。俺や青神、灯莉はもちろん近くに座り、自分達の結果や雑談を楽しんでいた。

「それにしてもみんなが勝つてるなんて本当に信じられないよね。

あ、その卵焼き頂きつ

「俺もびびってる。あ、卵焼き！」

「そうね、あの先生はいつたい何者なのかしら。そのカツよこしなさい」

「三十路なのにな。ああ！俺のカツ！ってかお前同じだろうが！」

「私は肉が欲しいの。分かる？大空には分からぬわよね～。乙女心

心

「肉が欲しい乙女心なんてしるか！」

「ふふふ」

「笑いながら梅干し持つていくなあああ！」

そして俺の弁当は米だけとなつたのだつた。

「よつ！大空！」

その時後ろから肩を叩くアホ（海斗）が。  
もちろん凹んでた俺はギリギリまで気付かなくつて。  
急に後ろから声をかけられてしまつて。

で、弁当から手を放してしまつて。

「うわあああああ！飯がああああ！」

「あれ？今、なんかした？」

「海斗…さつさと俺に弁当かなんかを買つてこい…」「えつと…怖いオーラが出てるのはどういうこと？」

「さつさとしろお！」

多分、きっと、今、俺の心の叫びがこだました。

なんとか昼食を終えた俺達はサッカーの試合を見ているのだが…

「林一ズすげえな…」

林達は超次元サッカーを行つていた。ボールから火が出たり、フエニックスが出たりと、既にデタラメにも程がある。

相手のキーパーが諦めてゴールの外にいるのは誰も責めることは出来ない。

だが、もつと恐ろしいのはドッジボール。守和は試合前の挨拶の時に何かを呟いていた。試合開始直後、敵チームの足が止まる。一步も動くことはなかつた。ただあるのは絶望に凹む人達だけ。

その光景は圧勝という言葉では済まない。そう、言うなれば地獄。中にはドッジボールにトラウマを持つたという人もいたとか。

そんなある意味の伝説を生んだドッジボールが終わり、とうとう俺の試合が訪れた。

一つ。敵の外国人は反則じゃね？

身長190センチにあのヒゲは高校生じゃない。明らかに助つ人とかだろ。

そんな文句を聞いてくれるわけでもなく試合開始。

今までどおり、バス回しで戦う俺達だが…

「手が長すぎだ！」

長い腕でバスカットをされ、思うように攻撃出来ないまま23：14で前半が終わる。

バスが回らないことで、今までよりもたくさん走らなければならなかつた。疲労困憊。

誰一人として口を開かずに体を休めてる。

「なあ、三十路。よく、あの怪物に勝てると思つたな？」

「貴様が三十路と言つたこと以外は大丈夫だ。今、秘密兵器を投入した」

「このクラスにあいつに勝てる奴なんて…って守和？」

そう、守和はいつものにこやかな笑顔でマイケル君に近づいていく。ちなみにマイケルは今命名。

その時俺は確かに見た。あいつの笑顔が一瞬だけ悪魔になつたことを。その瞬間マイケル君の膝が落ちたことを。

こいつとは仲間で良かつた。そう本気で思う。

無力と化したマイケル君は敵にはならず逆転優勝という輝かしい結果となつた。

同時に隣のコートの女子バスケも勝利が決まつたらしい。

残すはソフトボール。あの三十路が唯一勝てないと言つた種目だ。マイケル君以上の怪物がいるとなると…何が出るんだ？想像もつかない。

百聞は一見にしかず、とにかくソフトボールの試合を見守ることに。しかし、いくら見渡しても怪物なんていなければ、大リーガーなんてのもいない。ただ言えることは…青神にも対抗出来るのではないか?という美人なナイスバディがいる。ある意味怪物みたいだが。

「そこの君ー今ジロジロと見たでしょ?」

一瞬俺のことかと焦つたが、叱られていたのは海斗だったのをまあいい。

よく見ると尻はつり上がっていて、どちらかといえば強面美人という感じ。

と、怪物が誰か分からぬままプレイボール。

1組の守備から始まった。ピッチャーはもちろん野球部の中山君。えげつない球を投げ、他のソフトボールに出ていた野球部員を三振に抑えてきた、野球部期待のエース。中山君がいなかつたらここまで来ることはなかつただろう。

立ち上がりの良い中山君は初回を三者凡退で抑える。

期待のかかる1組の攻撃。

先頭バッターは中山君。打てる人をたくさん打たせる方針らしい。

中山君に対するピッチャーは…さつきの強面美人?

「はつ!」

かけ声と共に誰もが呆氣をとられる豪速球を投げる強面美人がマウンドには居た。

中山君も負けてはいられず、バットを短く握り直す。

豪速球にタイミングをしつかり合わせてバットを振った。しかし、ボールがバットに当たることはなかつた。

さつきと変わらないスピードだつたにも関わらず、球は落ちたのだ。

何がなんだか分からぬまま中山君は三者。続く一一番、二番も三振で終わる。

「なあ、三十路、あの強面美人が怪物か?」

「ええ、守和にもどうにも出来ないようなね…」

「どうしたことだ？」

守和が勝てないというのはとても気になる。

「あの子は男が近づくことを嫌うのよ。だから守和が近づいたら口を開く前に蹴り飛ばされるわ」

「危ねえやつだな…」

攻守交代が終わり、打順は四番、強面美人。

中山君は後に語る。自分にとつて渾身のストレートでした、と。打球はフェンスを軽々と越えていき、ホームラン。このままいくと1人で抑えて、1人で打つて勝つちまうだろ。

そんなことを思つている時、中山君が膝から崩れ落ちた。精神的ショックが大きすぎたらしい。

エースの不在、強面美人の最強っぷりで俺達のクラスはバラバラに。もみくちゃになり結果、何故か青神がマウンドに立つていた。「あいつは負けるために出てきたのか？」

聞こえていたのか青神がこちらを睨んでくる。なんて地獄耳だ。期待のかかる第一球。青神の手からボールが離れた瞬間。グラウンドが静寂に包まれ、時が止まつたようになる。

青神の放った球はいつの間にかホームベースを通過していたのである。

強面美人と良い勝負、いやそれ以上かもしれない。チームに希望が見えた、そんな瞬間だった。

当たり前のように三者三振。攻守交代となり四番、バッター青神。まさに怪物対決となつていた。いや、片方は神様だけさ。

両者睨み合い。強面美人がモーションに入ると青神をゆっくりと息を吐く。

ボールが放たれる。

かなりの速さのボールが青神を横切る。

「ふーん」

強がらなくてもいいんだぞ？大体ソフトボールに負けても他は勝

つてゐるんだ。問題はない。人生諦めが肝心つてな？お前みたいな神様にとつちや、ちょっとしたお戯れだろ？別に負けても誰もお前を責めねえよ。

とまあ、心で御託を並べていたら青神に睨まれた。  
お前は心まで読めるのか。

とまあ、そんなのは気にせず第一球。

先ほどと急速は変わらない。しかし、恐ろしいのはそこから落ちるた…あれー？落ちた後どんぐりだー。打ったの？あれを打ったの？

青神はあの球を打つた。

それも軽々と柵を越えて。

会場からは溢れんばかりの歓喜の声が挙がる。

この勝負の行方はどうやらこの一人が握ってるらしい。

というかもう、二人の直接対決だけでよくね？

まあ、そういうわけにもいかず、迎えた最終回。七回終わって2対2。打順はどちらも四番に回つてくる。勝負の決め手はそこだ。先頭バッターを当たり前のようすに青神は三振をとり、1アウト。次のバッターは強面美人。

会場が揺れる。ここで青神が抑えたら事実上の勝利が確定する。初球は見送つてストライク。タイミングをしつかりと合わせている。

皆が唾を飲み込み見つめる中、第二球。

ボールは快音と共に綺麗な放物線を描き飛んでいく。

打球は柵を越えたものの、レフト方向にきれでファールとなる。

タイミングは合つてゐる。つまり、次の球が打たれる可能性は高い。

打たれたら…多分青神のプライドはズタズタだらうな。まあ、いい気味だ。さつさと打たれちまえ。

つてそういうわけにもいかないか。後でとばっちりを受けるのは全部俺じゃねえか。

「行け！青神！」

いつの間にか声を出して応援をしていた。

青神は何か分かつたかのように頷きモーションに入る。

青神の手から離れたボールミット目掛けて飛んでいく。

強面美人はこれにしっかりと合わせてきている。

打たれる。誰もがそう思った時。

球が一瞬浮いた。

ライズボール。

奴は、青神は、最後の最後でどんな球を投げてみせたのだ。バットは空を切り、ボールはミットに收まり、審判がバッター三振を告げる。

その瞬間に勝負が決まった。次のバッターを三振に終わらせゲームセット。

この日の球技大会は一年生のクラスが完全優勝を果たすといふんでもない大会となつたのだった。

クラス代表の灯莉が表彰台へと上がり、トロフィーを受け取る。トロフィーを上に掲げ、全校生徒の拍手を受けながら灯莉が降壇する。

閉会式も終わりに近づき、教頭先生のありがたい言葉を右から左、左から右と受け流し、球技大会は完璧に幕を閉じた。

しかし、俺達のクラスはこれでは終わらない。

教室に戻り、祝勝会が待つている。

三十路が必死に校長に掛け合って話をつけたらしい。

買い出しに行っていたメンバーがお菓子やらジュースやらを持って帰ってきたのを見計らつて祝勝会が始まる。

「球技大会の勝利を祝つて

「「「かんぱーい！」」」

合図と共にジュースやお菓子の袋が開けられていぐ。

ちなみに負担は三十路。なあ、もう本名も三十路で良くないか？

「おや？ 大空から何か聞こえたような気がするんだが？」

「大丈夫です、先生。何にも言ってません」

「言つてないだけだ。 そつだろ？ 大空」

「さすが守和。 よく分かつてゐるな。 あ…」

「つまりは何か思つていたんだな？ よし、 球技大会とは別に鬼ごつこがしたいと言つんだな？ 良いだろ？ 10秒なら待とうじやないか。 いち、 にい…」

「ちょ、 たんまー！」 と守和！ 笑つてないでなんとかしろ！」

「「「お、 ろおく…」」

「死のカウントダウンがあ！ くそつ木を隠すなら森の中だ」

俺は必死に人混みの中へと入つていつた。

「なあな、 はあち、 きゅう… ジゅう。 さて、 行くか… って青神に陽炎。 二人揃つて何を探してゐるんだ？」

「大空の大バカ者はどこへ行つたの？」

「ああ、 大空ね～。 さつきまでここに居たけど、 逃げられちゃつた」

「そうですか。 なら先生も一緒に探してくれませんか？」

「いや～、 今の私を見たら逃げ出すからパスね」

逃げ出す意味が分からぬ二人だがなんとなく納得して、 二手に別れて大空を探し出す。

そんな大空といえば。

「くそつ。 7だ。 7来い」

ビンゴに必死だつた。

「ええー。 8番です。 さあ、 ビンゴの方はいらっしゃいますでしょうか？」

「一番違ひ…」

「おおつとー同時に3人がビンゴです！ しかし、 残す景品は後一つ。 どうなるこの展開！」

同時にビンゴの3人は林達だつた。

「あいつらはそななところまで仲良しかよ、 つて思つたら喧嘩してるし」

仲が良いのか、 悪いのか分からん連中だな。

景品もなくなつたところでビンゴに価値などは存在しないので場

所を移す。

といつても教室の端から端程度の距離。移動をしたのはいいが、そこは女子の溜まり場。俺はそのまま素通りで教室の外へと出る。春先の暖かい風が廊下を吹き抜ける。風の去った時、俺の前には灯莉がいた。

「オッス！ やつと見つけたよ。龍美と結構探したんだから」

「ああ、すまん」

こんな教室で一人で見つからないというのはどういうトロックだ？ まあ、隠れてたから見つからないのは仕方ないか。

「で、何かあつたのか？」

「うん。今日は球技大会だつたでしょ？ バスケは同じ時にやつてたから横目でしか見てないけどね？」

「まあ、そうだろうな」

「その……かつこよかつたよ？ ってそれだけ」

ちょっとと照れながら言つ台詞に正直ドキドキしてゐる自分。 ていう

か…かつこよかつた？ 俺がか？ まさか…脈ありますか？

「じゃ、じゃあ！ そういうことだから」

そのまま、ててて~と走り去つていく。

残された俺は記憶を手繰り寄せて繰り返しさつきの台詞を聞き直す。

仮にも好きな女の子にかつこよかつたなんて言われたら裸踊りをするくらいに嬉しい。絶対にしないが。

ていうか、脈ありだよな？ これって告白したら上手くいったり…

「大空君一人で何してるの？ かなり怪しいよ…」

教室のドアが明き、いつぞやの目が不等号の女子がいた。

確かに一人で記憶を反芻する度に悶えている男がいたら怪しいとかそういう問題じゃなく、変態だらう。

しかしだな？ その場面をクラスのえつと… 誰だっけ？ とにかく見られたわけだ。

つまり俺は変態だらう。事の元凶は分かっている。あそこで笑つ

ている守和。あいつに決まってる。ここの最近の俺の不幸には大抵あいつが関わっている。最早、歩ける不幸と言つても過言では…ちょっと言い過ぎか?と、とにかくあいつはひどい奴なんだ。

「とりあえず言い訳はさせてもらえるか?」

「少しなら」

「嬉しいことがあったときに『だぞ?』のことと思いだしたりするだろ?」

「うん」

「その嬉しいことが悶えるくらいに嬉しいことだつたら何度も悶えてしまうだろ?それが今俺だ」

「その話を信じるのは良いけど…やつぱり怪しいよ?」

「ですよね~。今あつたことはここだけの秘密で」

「変態さんは思われたくないんだ?」

「当たり前だろ!?」

「ははっそうだね。じゃあ、2人だけの秘密ね」

「頼んだぞ。なあ、守和。楽しいか?」

「ええ、とつても」

「そうですか」

「そういえば青神さんが捜していただけど

「あ?帰つてからでも良いだろ?きっとだけどな。さて盛り上がる

うぜ」

「もうお開きだけどね」

…「そうですか。

後片付けは翌日の朝といつになると、未成年はさつと帰れ!

と言われ帰路につく。

しかし、青神はどうに行つたんだ?あいつ、一人で帰れるのか?と、少しほは心配してみるが…

「まあ、いつか」

と先に帰るのが俺である。

家でゆっくりテレビを見ながらくつろいでいると。

後ろからドロップキックが飛んできた。

「ぐぼはつ！」

「何で先に帰るのよー！」

「だつて、お前、見当たらなかつた…ぐふおつ…」

「それはこつちのセリフよ。人がせつかく灯莉とくつづけてあげようとしてたのに見つからないし」

俺は思わず口をあけて唾然としてしまつた。青神が親切なんていふのは珍しいを通り越しておかしい。なんて本人に言つたらドロップキックじや済まないだろう。

「なによ。そんなに驚くことでもないでしょ？恋愛なら手助けするつて最初にも言つた」

「そういえば言つてたような気がしないでも」

「で、何でいなかつたのよ」

「先生から逃げるの必死でして…」

「なに？私より三十路のほうが大切だつていうの！？人が一生懸命にやつているつていうのに…うぐつ、えつぐ  
おいおい、まさか泣いてないよな？こんなんで泣いてないよな？  
いい加減にひるー」

「……」

「こいつ、酔つてやがる。

「なあ、酒でも飲んだか？」

「飲んでない」

ブスツと頬を膨らませて首を振る。こいつ時だとやっぱり可愛いいなと思つ。

「今、変なこと考えたでひよ？いや！犯しゃれるー。」

「はいはい、酔いどれは寝る。早くベッドに行け」

「うにゅ、分かった。おやすみなさい」

青神は千鳥足のまま自室へと戻つていぐ。  
無駄に疲れた。

俺も今日は寝よう。

もう思つて布団に入る。

## 試験と青き龍の神（グレイス）

球技大会から1ヶ月。あれから俺には無いと思っていたはずの平凡な日常が待っていた。

いや、青神がいる時点で平凡じゃないか。そんなのが平凡になつてる自分が恐ろしい。

灯莉との進展？ないない。

あの思わせぶりの発言が青神の差し金と知つて凹んでいたのはつい最近のこと。

もう告白するか！と青神に状況を作るのを手伝つてもうおつと思つた俺はあの夜の出来事を一部始終を説明した。

それで返ってきた返事に凹むわけです。

最近はまあ、青神が後でなんとかしてくれるだろ？、くらうに思つて生活をしている。

そんな日常も束の間。とうとうやつて来てしまったのだ。  
悪魔<sup>テスト</sup>が…

先生が授業でやつた内容を中心に問題を出す。これが悪魔の正体。やつて来る前になると生徒を睡眠不足や、部活動停止などをし、モチベーションを下げた後襲つてくる嫌な奴だ。

恐ろしいのはその後だ。去つた後には点数化されて返つて…いや、帰つてくる。その点數次第でその後の運命が変わる。再び悪魔の恐怖を味わされたり、成績を下げられたりする。それが…

「テストだ」

「つまりはテストで良い点数をとれば問題はないのね？」

「そういうことだ。しかし、古典しか出来ないお前に良い点数が取れるのか？」

「ふふん、今に見てなさい。大空に吠え面をかかせてあげるわよ」

「まあ、頑張れ」

とまあ、青神にテストの説明をしてたわけだが、実際この2人で

は対策などは立てようもない。確かに青神は古典が得意だが教えるとなつては全く別の話だ。

俺に至つてはこの学校に青神の力で合格したんだぞ？元から駄目のようなものだ。

「つて青神の力でなんとかならないのか？」

「いいけど…神通力使つたら灯莉との関係は先延ばしよ？」

「だよなー。テストなんてなくなればいいのに」

「諦めることね。大空には最下位がお似合いね」

「はい、そうですか。さつさとパン食つちゃえよ。先に学校行くぞ？」

「それは許されないわ」

「許さないのではなく、許されないの違いが痛い。」

「お前はどれだけ上から目線なんだよ」

「神が人に上からものを言つて文句があるのかしら？」

「つ…！ 何も言えねえ」

「分かつたら待ちなさい」

「でも早くしろよ。遅刻しちまう」

いつも通りの朝の風景。これが当たり前なのは他の人からしたら羨ましいのかもしれないが、こちらとしては迷惑極まりない。

美人は3日で飽きるとはこのことだろう。そもそも家事は出来ない、それどころか部屋は散らかし、挙げ句の果てに命令口調どきたものだから居候としては最悪の部類に入るだろう。

そんな彼女の要望通りに限界前で待つこと5分。一向に来る気配がない。

「おい、青神？ 急げよー」

返事もないでドアを開け、家に入ろうとした時、

「置いていくわよ？」

後ろから声をかけられた。神様といつのは運動神経も良いらしく二階から飛び降りるなんてのは造作もないらしい。今まで何回引っかかったことか。それでまた引っかかる自分は純粹な心の持ち主な

んだろう。そう解釈しないとやつてられねえよ！こんちくしょう！「ねえ、急ぐ気はないのかしら？私は早く学校に行きたいの。そして崇められるの」

「今までお前を崇めた奴なんていねえよ！」

「くつ、いいから行くわよ」

そう言つと俺の手を引き、走り出す。

こんな朝も悪くはないかな、なんて思つ俺はきっと感覚が麻痺してきたんだと思う。

球技大会からいくらか時は過ぎ、いつの間にか夏の暑さを感じ始め、制服も冬服から夏服へと変わり始めていた。

そう、薄着になりつつあつたのだ。

そりや、健全な男子高校生としては制服から透ける下着などには興味を持つし、ブレザー越しでは分からなかつた胸に興味を持ったりする。

しかしだ。俺はひと味違うのだ。恋する男子高校生。その目的はただ1人。

陽炎灯莉。

と思つた端から風で一瞬浮かんだスカートに目を奪われる自分がいることは嘆くべきなんだろうな。

恋する健全な男子高校生だから仕方ないだろうね。と、いつの間にか長い名前になつてないか？と疑問を持つてみたが、まあ何でもいいだろ。スカートに視線を向ける顔がにやけていたのだろう。俺の顔は変態という一言と共ににはたかれた。

例えばこれが彼女とかで、他の女の子を見るなんて！みたいな嫉妬だったら可愛いものなのに、こいつの場合は…俺の顔が気に入らなかつたんだろうね。もしくは全女生徒代表か。

はたかれた右頬がじんじんと痛む中やつと校舎に辿り着く。しかし、青神さん？もうそろそろ手を離してくれやしないかい？このままだとまたいらぬ誤解を生むハメになるのですが。

と思った矢先、目が不等号になることで定評のある女子2人がす

れ違う。

俺達を見て目が丸からくの字に変わるまで。それは一瞬、というより刹那と言つたほうが正しいスピードだった。ひそひそ話ながら歩くスピードが速くなる。そして廊下の角に差し当たつたその時。女子2人組は歩くということを捨て走り出す。まるでとても嬉しいことがあつた無邪気な子供のような姿だった。

俺は正直な話、教室に入りたくなかつた。もう分かるだろ？手を離しませんか？

そんな俺の氣も知らず、そのまま教室の扉を開く。一番に見えたのは守和。

「会場は温めておいた。今ならみんな快く受け入れてくれるだろ？」  
守和はいつも不気味な笑いを浮かべその場を去る。その後ろに見えたのは涙ぐむ男子の姿や何か文句があるような女子の姿だった。  
俺の予想ではこの状況を勘違いした男子が青神に彼氏が出来たと嘆き、女子が俺に腹を立たせているのだろう。普通はそうだろう。  
俺の横で未だに手を握り続ける奴は俺なんかとは全く違う考え方の持ち主らしい。

「クラスの人はやつと気が付いたのね？」

「ここでまた誤解は深まるんだろ？」

その後片付けは俺がするんだろ？

さあここで青神の発言によつて、俺たちは少し前から付き合つてることになつちまつたよこんちくしょう。

ていうか認めたことになつちまつたよ。諦めるか？

その時に視界に入つたのは灯莉。俺は彼女が好きだ。今この現状を認めてしまつたら接し方も変わつてしまつ。それだけは避けなければ。と思考をフル回転させる。…させたよな？何も浮かばねえよ。

クラスの一部男子がとうとう耐えきれなくなつたのか俺に向かつてくる。

そして1人、また1人と向かつてくる男子は増え、俺はいつの間

にか男の海に溺れていた。正直嫌なんだけど。

青神は元々使えないのに何かに浸つてゐし、守和は笑つている。  
くや、全部お前らのせいだよ！灯莉に頼るか？ていつか近づけねえ  
よ。

時間が解決を…つて時と共にヒートアップ！？

そろそろ来いよ担任！と思つたが担任は普通に教卓の前で笑つて  
いた。ああ、楽しいだろうよ。三十路には人の不幸が楽しいだろう  
よ。

あれ？海斗？お前か？一番近くで俺を殴つてるのはお前なのか？  
自分の教室帰れや。

くそ、何かないか？何か…

「お、俺が好きなのは青神なんかじゃない！」

思つていた以上に教室が静かになる。

「じゃあ、誰なの？」

やめろ不等号。ふざけたことを言つんじゃない。

周りから次々と声が挙がる。誰だと聞く声の中一つおかしながら  
あつたような？少しピックアップしてみよう。

「なんかはどういう言い草かしぃ？」

…無かつたことにしよう。

しかし、この状況はなんなんだ？言わなきやいけないのか？そう  
なのか？

「さあ、みんな！大空をいじめるのはここまで。ホームルームを始  
める」

「み、三十路…」「やつぱり言つとくか？」

「滅相もない」

まさか担任が助け舟を出してくれるとは思わなかつた。少し担任  
を見直すべきなのかもしれないな。

「…あんな状況で告白してカツブル成立なんて許さない…」

「今なんて？」

「氣にするな。さあ、ホームルームだ。陽炎、挨拶」

「じつしていつもじおりの朝が訪れ…

「どうこう言い草かしらと聞いているの…！」

「よおよおっ！！

「すまん、あなた様はとても素敵です」

周りの田が再び変わる。

ひそひそと聞こえる声に、俺がドMだとか、尻に敷かれてるとかが聞こえたがもういい。これで終わってくれ。

「いい？ あなたは私に灯莉と付き合えるよう『願ったのだからそれなりの態度で示しなさい！』いいわね！」

教室が未だかつてない静寂に包まる。

さつきまで俺があれだけ隠し、三十路が潰したそれをお前が言うのか。

視線は青神でも俺でもない灯莉に移される。

「え？ 私？ えっと…願い事…叶うといいねっ

今ね？ 多分だけどね？ 遠まわしにね？ 振られたの…

気付けば俺は廊下に走り出していた。

「大空、どこに行くの？ まったく自由なんだから

ここにいた全員が青神より自由な奴はいないと思ったとか、思つてないとか。

傷ついた俺は階段を昇つていた。きつと屋上を目指して。そこで思いつき凹もう。そう思つた。しかし、屋上の鍵は閉まっていたことでものすごく凹んだ。

「はあ、振られたのか…」

勝手に告白で勝手に振られ… 一体どんな田だよ。

「オッス！ 大空君。さつきはその…なんかごめんなさい」

「いいよ、いいよ。悪いのは青神だし」

「でも… その… 振っちゃったわけだし…」

「いいんだって。俺の片思いだって分かつてたし」

「そう… か。ならいいんだ。私は大空君になんて思われようが今までどおりでいくからね」

「ああ、そつちのほうが気が楽だ」

「じゃあ。一時間目が始まるまでに帰ってきてね」

灯莉はスタスターと去っていく。きっと俺は灯莉のああいつ所に惹かれたんだと思う。気遣う所、明るい所。

そして…振られたんだな…

「青神ならなんとか出来るのか?」

もし出来るのならきちんと責任をとつてもらわなければ。 そう

思うと少し気が楽になつた。教室に戻ろうとした時、

青神が立っていた。

「どうしたんだ? そんな所に立つて。話なら家に帰つた後にきつちりするから」

青神が囁くように言葉を発する。

「私は…手伝わな…わよ…」

「今、なんて言った?」

「私は一切、手伝つたりはしないと言つたの」

「待てよー。」 うなつたのはお前の所為だろ? だつたら責任くらい持てよ! 「

「もしよ?」 これが私ではない普通の人ならどうしたの?」

「それは…」「あなたは私のことを単なる便利屋くらいで思つてる。なら私は何もしない」

何も言えなかつた。

心の中で何かあつても青神がなんとかしてくれるだらうと思つて  
いる部分があつた。

「すまん…」

「謝らないでいい。それがあなた。あなたという人格だったのだか

ら」

少し心に引っかかることがあつた。それを今口に出すべきか出さないべきかどうかと言つたら出すべきなんだと思つ。

「お前も説教みたいにしてるけど家事に専念したら俺のことと便利屋かなんかと勘違いしてないか?」

「… わて、授業が始まるわね。教室に入らなければ」

「口元、待て」

「な、何かしら?..」

「お相子ならなんとかしてくれるよな?..」

「考えておくわ」

そのまますたすたと歩く青神を引き止めようとは思わなかつた。

だつて…三十路が睨んでるんだ。

そして青神がなんとかすることなくこの最悪の一日は幕を閉じた。しかしだ。この日までの最悪は今日。次の日また、最悪の日が訪れるのは日に見えていた。といつのも学校に行けば男子から慰められ、女子からは追求される。

そんな中氣にするなと言う方が無理なのであつて、灯莉とは話すことが出来ないどころか田を合わすことすらなかつた。

青神は青神で昨日のことを気にしてるのか帰ればカップ麺を食べ、朝は菓子パン。洗濯物はコインランドリーに持つていつてるようだ。どうやら自分が頼らないから頼るな、ということらしい。

いひして悪夢のような一日は終わり、俺は朝から行動に出る」とにした。

「…朝からどうこいつとかしら?..」

「頼む…。元に戻してくれ。灯莉と付き合いつとかはもうこいつ。だから元に…」

「つむれーーじゃあ、聞くわよ?私は大空に言われてから頼らないようにした。努力をしたのよ?その点何かしたの?いえ、何もしない。なのに朝から土下座で乞うを得ようだつて?笑わせないでくれる?..」

「お前が言つ」とはもつともだと思つ。だけどな、俺だつて考えたんだ。でもどれも上手くいきそうもない。灯莉と付き合いつとかは本当にいいんだ。元に戻してくれよ…」

俺は土下座で下げていた頭を上げる。

「全く、朝から嫌な朝ね。そこまで言つなら…」

俺は土下座で下げていた頭を上げる。

「全く、朝から嫌な朝ね。そこまで言つなら…」

「やつてくれるのか？」

「いえ、眞実を話すの」

「はい？」

「よく聞いてね？私は神様。と言つてもまだ力は全然弱いの。無に等しいくらいにね」

「でも時間を止めたよな？」

「あれは神個人の特技みたいなのだし、人の運命や未来までを止めるわけではないの。時間が止まる一瞬は誰も感じることはない。だから力も私だけに働くから弱くて使って当然」

「いや、待てよ。なら…」

「灯莉と付き合つてのはもしかして…」

「ええ、無理とまでは言わなくとも、待つとしても一回力を使つたら半年なんかじゃなく数百年後かしら？まあ、私が神の社から出でこなければだけど」

「じゃあ、今回のことはなんとかしないんじゃなくて…」

「出来ないの」

「うわあああああああ！終わりだ…」

「いいじやない。灯莉と大空では元々釣り合つてないし。死期が早まつたと思ひなさい」

「死期が早まつて嬉しいやつはいねえよ！」

「そうなの？早く死にたくて社から出でくる神もたくさんいるのに」

「神様事情なんて知るか！」

「なんだかやけくそになつてている自分がそこにはいたような気がする。」

こうして俺の計画（？）は失敗に終わり、灯莉との関係に回復なんてのはないと思っていた。

今日、学校に行くまでは。

教室に行けば人が群がっていた昨日とは打つて変わつて誰も寄つ

てこない。

「どうした？朝から元気がないな。麗しの青神嬢と喧嘩でもしたのか？」

ふらふら近付いてきた守和の一言で俺は2つの可能性を感じた。

1つ目。本当は青神は力を使えて、元に戻した。

2つ目。クラス単位でのドッキリ作戦。

…ドッキリの可能性しかねえよ。バカやろつ！

なんて、心でツツノミを入れてた俺に有利得ないことが起きた。

「オッス！」

明るい声。元気な声。いつもの挨拶。その声を聞くだけで心が晴れた。

この人からドッキリはないだろ？ 青神に後で礼を言わなければ。「おはよづ」

朝の挨拶の一言が今の自分にとって、輝かしいものに思われた。朝の挨拶だけで俺の世界は変わつて見えた。

先生の授業はヒップポップのように聞こえたし、黒板の文字は光って見える。

…訂正。やはり授業はつまらなく黒板の文字はミミズのようです。そんなつまらない授業。その間にも灯莉が普通に接してくれている。これがクラスぐるみでの優しさだとしたらそれに甘えたい。そのまま無かつたことにしたい。

俺の1日はいつの間にかいつもの日常へと帰つていつていたのだった。

そんな楽しい日常のせいで大切なことを忘れ、そのことを思い出したのはギリギリになつてからだつた。

週が明けた月曜日。担任が週の予定を次々と言つてくれて中に大変なのが混じっていた。それは悪魔を呼び出す呪文と言つたら過言である。

「明後日から4日間テストな。しつかり勉強しといてな」

あー。何も聞こえません。

それで通る世の中ではない。ということです

「第1回悪魔攻略会議を開催したいと思います」

「突然で何のことかさっぱりだよ…」

「ていうより、悪魔つてなんだよ。僕は美少女攻略で忙しいんだよ？」

「悪魔…なんと素晴らしい響きだらうか！」

「いや、悪魔は守和だろ？ って違う…テストは明後日からだぞ…」

「そりやそうよ。担任も言つてたじやない」

「みんなは勉強したのか？」

「私はしたに決まってるでしょ？ 私にこの程度の内容を理解するなんて容易いこと

くそ、腐つても神様。どれだけ理不尽でも神様。才能は人では測れないか。

「灯莉は…」

「私は予習復習でやつてたからそこまでじゃないけど、それなりにやつてるよ」

真面目だなとつづく思ひう自分と、彼女との差をひしひしと感じる自分がいた。

「守和…はやつてそうだな」

「待て。言つておくがこれでも入試トップの成績だ」

なんとなく、なんとなくなんだが…

「なんでだよ…！」

逆ギレしたくなつた。

「海斗はこっちの…」

「僕？ 天才だから勉強しなくても大丈夫だし」

忘れていた。こいつは受験シーズンは中、一日を美少女攻略に費やした奴だった。

「つまり…危ないのは俺だけなのか？」

そこにいた全員がそれを理解した。

「手伝つたりは…？」

全員が仕方ないという面持ちで口を開く。

「私は古典なら」

「社会を教えてやる。もちろん裏のな…」

「じゃあ、私は数学ね」

「僕は主教科以外」

「あ、ありがとう…って主教科以外ってなんだよ！」

こうして次々と俺にテスト対策が授けられていった。特に男2人から教わったのはテストに関係ない所だらけだったのはなぜだろう。

まあ、なんだかんだでワイワイやりながら勉強をするのも悪くはないと思う。

分からぬ所は家で青神に教わることにじよつ。今はこの楽しい時を味わうことにする。

来るべき悪魔戦に備えて。

翌朝。教室では生徒が教科書を開き勉強。職員室で先生に聞いて勉強。ともかく授業時間でもなんでもないのに勉強尽くしなつている。

そんな中俺はといえば…

「眠い…」

一夜漬けで伸びていた。

一夜漬けというのは有効期限は1日。しかも使用するにも連續で使えないという、なんとも使い勝手の悪い必殺技なのである。

運が悪ければテスト中に寝てしまい、気付けば白紙で提出なんてことになりかねないハイリスクキーな必殺技だ。

とにかくテストまで寝よう。それでなんとか持ちこたえるんだ、自分。

かくしてテストは始まった。方應学園ではテストは3日に分けられて行われる。1日4教科ずつ。この1日のテストの数は間違いなく多い。しかし、短期決戦になんかの意味があるらしく、この数で

通しきるらしい。つて青神が言つてたな。

ちなみに今は理科のテスト中だ。テスト中で分からぬ問題があると別のこと思い出すのを絶賛実践中。

元素記号?なんですか?こんちくしょう。

一つ一つの問題に逆ギレをしながら解いていきやつと一日目が終わる。

俺は一つ伸びをし、立ち上がる。

「テストが終わつたー」

「大空、それは上手いわね。あなたのテストの内容が残念だつたのと、時間的に終わったのを掛けているのね?」

「掛けてねーよ」

「大空の言う通りだ。テストは明日もある。つまり、大空のテストが残念だつたというわけだな。うんうん

「そうでもねーよ。今日の分が終わつただろうが

「なら、これからまた勉強するの?」

「いや、とりあえず寝たい…。一夜漬けで寝不足なんだ」

「そつか…なら大空君以外で何か食べに行こうか?」

「いいわね。特に大空抜きという所が。さすが灯莉ね」

「そ、そ…?」

「ならば膳は急げだ。一応海斗に声をかけてみよう  
わいわいと教室を出て行く3人。

「お、おいちょっと待てよ。俺も行くつて!」

俺はその後ろを追いかけるが誰も振り向かねえよ。一いつ、青神。  
分かつてやつてるだろ。てめえだけ笑いすぎだ。

海斗が介入した辺りからボロが出始める。あいつがちょこちよこ後ろを見てくれる。意外にいい奴だな。よし、今度奢つてやろう。つい。  
そう呟いた時

「奢り?」

海斗が距離を詰めてきた。

「あ…いや…」

「大空の奢りだー！」

「待て」「「オーバー！」」

俺の叫びは3人のかけ声に見事にかき消され、状況は一変。俺の望んでいた飯を一緒に行くというのは叶つたが、一方で払う犠牲は大きすぎた。

たどり着いた先は学校の近くのラーメン屋。ていうかいつぞやに来た気がするのは気のせいか？くそつ、幟が雷神亭に見える。

「ここはねー私の知つてる子のオススメの店なの！」

その子とは気が合いそうだ。青神は合わないだろ？けど。

「この店の主人のおっさん良い人なんだよな」

「そうなの？」

「とにかく入る？ではないか。店の前で立つていては閑古鳥になつてしまふ」

「それもそうだな」

嫌な予感はした。ただそれを回避は出来ないわけで。なぜかつて既に的中していたら回避は出来るわけ無いだろう？

店に入つて最初に目に飛び込んできたのは見たことがあるような気がする少女が大盛ラーメンを豪快に食べてた姿だった。あそこまで豪快に食べられると清々しい。

「あ、すーちゃん！ オーッス。元氣？」

「私は至つて元氣だ。灯莉は…聞かなくとも分かる」

俺の前で繰り広げられていたのは何とも普通の会話。しかしだ。問題は内容ではない。相手だ。

ちびっ子と灯莉が今まで会つたことのあるような口振りで話をしている。

「よし、1つ聞くけど知り合いか？」

「うーん…まあ知り合いなのかな？すーちゃんだよー。」

「へえ…。これがすーちゃんねえ…」

「むつ？お前はいつかの尻しかれ！そして…青いの…」

「尻しかれってないだろ？また会つてしまつたな」

「大空の知り合いなのかしら？私にはこんなちんあくいんの赤い知り合いはいないわよ？」

確かにすーちゃんはちつちやくて髪が赤い。

「俺も青い知り合いはいないんだけどな」

「そう？私は青じやなくて蒼だけど」

「そんなもん伝わるか！」

「なんか僕らは入れない雰囲気になつてゐるよ～」

「面白ければよしだ」

「まあ、すーちゃん？」でまた会つたのも何かの縁だ。仲良くなつせ？」

と手を差し出したら

「触るな！」

はたかれた。

「さらにお前なんかにすーちゃんと呼ばれる筋合は無い！私の名前は朱々（しゅしゅ）だ！覚えろ！」

「朱々ですかーちゃん？おかしくないか？」

「そ、そんなことはいい！ラーメンを食べに来たのだら？さつさと食べろ！次のお客様さんが入つてこれないだろ」

「ああ、そうかい」

それならすーちゃんでいいよ別に。そう思しながら席について、ラーメンを注文する。店主は注文を元気よく厨房に伝えると作業に取り掛かる。

そんな様子をただ見ていたのだけど…

「こらお前！作業は見てはいけないんだ！ラーメン屋の常識だぞー！何故か殴られた。

「そうね。常識」

そして青神もついでに殴ってきた。

「そんな常識は知るか！ってか殴るなよー！」

「つぬさいーそもそもラーメンとはだな…」

「ここからラーメン魂に火が着いたのかラーメン講座が始まった。

ラーメンがいかにラーメンで、ラーメンであるが由縁をラーメンの歴史から成り立ち、現代におけるラーメン地位、ラーメン市場のラーメン物価からなんやらまで、まあラーメンを連呼しすぎてなにがなんだか分からぬ状態になつていた。

そんな講座の間にラーメンは来ているわけなんだが、少女のラーメン談義は終わりが全くと言つていいほど見えず、みんなが食べ終えても俺だけがお預け状態でいた。

そんな時に痺れを切らした青神が立ち上がり

「私は先に帰るわ。まだ勉強もしなくちゃいけないし」

「じゃあ、私もー」

「なら僕も」

「さらばだ、大空」

みんな愉快に手を振つて店を出て行く。あー置いてけぼりだねこりや。

「待て、お前。まだ話は終わつてないぞ」

あらそこの？みんなが帰つたら俺たちも帰らないか？普通は。彼女にそんな普通は無いみたいでいつまでもラーメン談義は続き、気付けば閉店の時間になつっていた。

「お客様。もう一〇時になるから店を閉めたいんですけどまだ話は終わつてない」

「いい加減止めないか？バイトの人も困つてるぞ？」

「ラーメンというのはな…」

「いい加減に…」「コラ朱々！閉店だ。帰りやがれ！」

人の良い主人が怒鳴り声を擧げるのを初めて見た。

「仕方ない。お前の家で続きをするぞ。さつと連れてけ

「連れてけ」

「嫌です」

「嫌です」

「連れていけ」

「連れていけ」

「連れていけ」

「嫌です。つてあれ！？」

「そういうことならもう帰れ。親も心配するだろ」

「親はない。家もない。だから誰も心配はしない」

…もしかして俺は聞いてはいけないことを聞いたか？

「すまない…」

「なら連れてけ」

「しようがないな…。お会計お願ひします

「しめて4000円になります」

あーそういうえば俺の奢りだつたな。あいつら遠慮なしに食いやがつた。うわっアイスクリームとかも頼んでやがる。くつ、リアルに嫌な値段だな。

とか思つてもお金は払わないといけないので渋々出す。

その後、朱々にラーメンについて語つてもらいながら家に帰つた。帰ると勉強をすると語つっていたはずの青神がテレビを当たり前のように見ている。カツブヌードルを待つてているらしい。

「あらお帰りなさい。大空が遅いからこれしかなかつたの」  
これしかなかつたと言つ割には顔が嫌そ�ではない。といつか素敵スマイル120%だ。

「なぜお前がここにいるんだ？あ、尻に敷かれてたな」

「敷かれてない」

「なら何故？」

「いろいろあるんだよ。いろいろとな」

「そうか。じゃあラーメンについての話をまた始めよう」

「まだやるのか？」

「いいじやないか。それに最後まで聞いてくれたら願いを叶えてやつてもいい」

「なんだよ、願いつて」

「もう隠さないけど、実は私は神様なんだ」

…壮絶に吹いた。

神様つて結構その辺にいたりするものなのかな？

こんな状況に青神さんは不満を抱いたのかつかつかと朱々に詰め寄る。

「あなた…種は？」

「朱雀」

おお、わけの分からぬ名前がくると思つたら俺でも知つてゐる名前だ。こういうところに喜びを感じるなー。

あれ？じゃあ、青神の親類？みたいなものか。

「残念ながら先客がいるの。諦めなさい」

「先客？つてお前も神様？」

「私は青龍。このアホをある女とくつつける約束をしたの」

「女とくつつける？それ以前に青龍は…」

「ちょっとこっちに来なさい。話があるの。神様だけの」

そう言つて青神は朱々を連れて、自分の部屋の方へと歩いていく。残つたのは俺とカップヌードル。のびるのは申し訳ないので食べて待つことにした。

俺が1人でカップヌードルをすすつている頃青神の部屋では話が行われていた。

「お願い！ここは身を引いてくれないかしら」

「なんで？私だって今のさつきまで宿無しの憑き無し。そもそもお前は縁結びの神様じゃないだろ？」

「そ、それは…。でも、今はこの生活を楽しんでいるの。簡単に手放すなんて…」

「それは自分勝手な考えだろ！そんな理由で騙していいのか？あの男を騙してまですることなのかな？違うだろ！」

「そうだ。今まで大空に迷惑をかけ続けた。なのに私は何も返すことが出来ない。それなら

「…身を引くのは私」

「そのとおりだ」

「なら少しだけ待つて。やりかけたテスト。それが全て終わつたら別れを言うわ

「それでいい」

話を終えて青神が帰ってきた頃、ちょうどカツプヌードルが食べ終わつた。どんな話をしていたかは分からぬ。でも…青神が悲しんでいるのは馬鹿な俺でも分かつた。

「なあ、青神？ いつたいどんな話を」

次の言葉を言おうとすると青神が被せて話す。

「カツプヌードルは？」

「あ、いや」

「私のカツプヌードルは？」

「私の胃袋に」やります」

「極刑を言い渡すわ。あなたは今ここで息絶えなさい」

「ちょ、待てよ！人が心配をしてやつてるのにその言ごべではないだろ？」

「心配？」

「だつて…なんか悲しそうな顔をしていたから」

「その理由が自分にあるとは思わなかつたのかしら？ カツプヌードルを食べたことだと気付かないのかしら？」

あー。しまつた。

「…どうしたら許して貰える？ 出来たら死なない方向性がいいんだけど」

「まあいいわ」

「え？」

「え、とはなによ。極刑が欲しかつたの？」

「いや、許されるとは…」

「私は神様なの。お慈悲の心くらい持つていて当然よ」

そう言つてまた部屋に戻つていく。その入れ違いで朱々改め朱雀のすーちゃんがリビングに戻つてきた。

「なあ、朱々。いったいどんな話をしたんだ？」

「んーまあそのうち分かる。だからいいだろ？」

そんなんあやふやな返事で返されてしまった。結局この日に2人の

会話の内容を知ることはなかつた。

会話の内容が気になりつつもテスト勉強に打ち込む。そしてテストは着実と終わつていき、とうとう最終日。

俺は会話の内容とテスト勉強で心身共に疲れきつていた。  
あの日から青神が特別なにかしたわけでもなければ朱々が何かを  
したわけでもない。勝手に居座つてるけど。だから余計に気になる。  
なにかが不自然に感じる。不自然の理由を知つたのはテストが全て  
終わつてからだつた。

テストも終わり、気分爽快に遊びに行こうという計画を立ててい  
たときだ。青神の姿がそこにはなかつた。青神は何も言わずどこか  
へ行つていた。

いつもの気まぐれ、みんながそう思つてゐた。それは違つ、その  
ことは誰も気付かない。

結局青神は家にも帰つてこなかつた。

「朱々、もしかしてなにか知らないか？」

「知つてゐる」

「教えろ！早く！」

「焦らなくて教える。青龍は境内に帰つた」

「なんで帰る必要があるんだ？神様は定期的に戻らなくちゃいけな  
いのか？」

「そんなことはない。境内では式神達が働いてくれる。青龍は自分  
のしていたことに気づいたんだ。間違つてるつて」

「気づいた？間違つてる？何のことだよ」

「お前はどうして青龍と出会つたんだ？」

「高校の合格祈願に行つたからだ。特に何があるのか？」

「じゃあ、何の神様に合格祈願をするんだ？まさか縁結びの神様に  
はしないだろ？」

朱々はさつきまでとは表情を帰る。喜びか…怒りか…哀しみか…  
楽しんでいるのか…そんな読み取れないようでどんな表情にも見え  
る顔で続ける。

「青龍は学問運動の神様。お前を女とくつづけるなんてのは端から無理だつたんだよ」

「だったらなんであんなことを言つたんだ…」

「楽しいんだつてさ。この生活が」

「あいつは出会つて最初に言つたんだ。恋愛限定で願いを叶えるつて」

「ふーん。まあ、私なら恋愛成就も難しくない。私は縁結び、仲違いの神様だしな。」

「とりあえずいい。そう言つなら青神を連れ戻してくれ」

「あれ？別に仲違いじゃなくから叶えるなら恋愛限定」

「あいつが帰つてくるなら…」

「それでもいい」

「まったくお前つて奴は変な奴だな。恋愛成就の為に一緒にいた青龍を連れ戻す為に運命を変えるなんて。まぬけだ」

「いいんだよ。あいつが樂しいって言つたなら」

「そう、あいつは最初暇潰しがてらやつてきたんだろう。神様として今までの長い間何をしてたのかは分からぬ。でもそんな長い時間1人だつたんだろうな。そんな奴が樂しいって言つたなら」

「さあ、頼むよ。朱々」

「……？い、いいの？なんなら忘れさせてもいいんだぞ？灯莉の時みたいに」

「灯莉とのことは朱々のおかげか？ありがとな。かなり助かつたよ」

「…やーめた。自分で神社からよんできたら？」

「なんだよ、それは」

「気が向かないというか…とにかく！絶対にお前には願いを叶えてやんない！」

意味が分かんねえ。

「それに私の力に頼つてばっかりじゃだめだろ。自分の力を少しあは使え」

「それも…そうだな」

俺はその場に朱々を残して神社に向かう。家から東に行つたところの小さな神社。

「…なんだ？この感情は。私は今あんな奴に…」

1人で悩み苦しむ朱々はその場でうずくまって大空が神社に行くのを見送つた。

「…大空」

虚空に咳かれた言葉。その言葉は…青神は…何を思う。ひとつ、またひとつと積み重ねられるため息。彼女は今、元に戻ったのだ。周りには誰もいない。ただただ社の中の祠で眠り続ける生活に。昔から同じ暮らし、同じ環境。懐かしさなどは微塵も感じられない。感じるのは虚無感。一度知つた外の世界。今までの生活が霞んで見える。

そんな中で思い出されるのは大空と過ごした日々。他の仲間達と楽しく話した日々。その中心には大空がいた。青龍という1人の神様の心の中に感情が生まれた。

その感情が何かなんてことはその神様には分からない。今まで長く生きてきた。それでも分からぬ感情。

分かるのことは大空とまだ一緒にいたかった。その感情が関係していること。

「…私はもう眠ろう」

また長い年月が経てば大空はあつという間に死んでしまうだろう。そうすれば会いたいなんて思わない。時間が忘れさせてくれる。そう、だから眠る。

「…もう外に出ることもないわね」

青い目は次第に閉じていく。次日覚めるのはいつだらうか。溜まつた力はどう使おう？

いつでもいい。どうだつていいい。

その時には大空はいないからいい。

閉じたはずの瞳から涙がこぼれ落ちる。それはとてもしょっぱく、

1人の神様が初めて落とした涙だつた。

大空はいろいろな初めてをくれた。それだけで十分。ありがとうございます。

「青神！いるのか！」

外から声が聞こえる。聞き慣れた声。その声を聞くだけで胸の奥がひどく痛む。

「どうしていなくなるんだよ。誰が帰れって言った？」

一番最初に大空が言った。

「あちや、最初に言つたような気がするな。なら少し変える。帰つてこいよ。このままじゃ俺は家で1人だ」

朱々がいる。朱雀の神様が。あの子なら大丈夫。あなたの望みを叶えてくれる。

「今は朱々もいるか。でも寂しいじゃねえか。今まで楽しかつたんだろう？俺だつて毎日が楽しかつた。それはお前がいたからだろ」  
楽しかつた。毎日が輝いて見えた。生まれて初めて心から笑つていたかもしれない。でも私に…大空のそばにいる権利はない…。

「大体灯莉のことなら気にするなよ。お前がいなきや俺と灯莉は出会うことすらなかつた。だつたら半分は叶えてもらつた。後は俺が頑張る。それで問題ないだろ」

それでも…私は騙して…側にいて…。

「あーもう！面倒くせえ！さつさと帰つてこい。これは俺からの願いだ。俺はお前に、青き龍に願いを込める。帰つてこいつてな。叶えるかどうかは青神が決める」

神社の祠の戸が開ぐ。そこから覗く青神の顔。ゆっくりと、その祠から出てくる。

「…ずるいわよ。言いたいこと全部言つて。私が悩んでたこと全部を取り去つて。私の中に変なものまで作つて…」

「はい？」

「これじゃいつまでも…」 そう、ずっと…。

「大空から離れられないじゃない…」

「あーえと…。デレ期突入の確変モードが今来ちゃいます?つて嬉

しきような困るよつたな、この後なかなかに面倒くさいことになりそうな気がするのは俺だけなのか？」

「つるさいつ！私は帰る。何があつてもあなたの下に帰る。だから

あなたは私の願いを叶えなさ……つうん。叶えてほしい」

「いきなりその態度はなんだかややこしい誤解を招きますよーって聞いてるか？」

「大きな空に願いを込めます。私から…ずっと…離れないでください」

…正直ずるいのは青神の方だと思つ。こんな状況でそんなこと言われたら断れるわけないだろうが。

「分かつた。離れないし離さない」

「私の願い…通じたのね」

その時、青神が見せた笑顔は俺が今まで見たどんな笑顔よりも輝いていて…綺麗な笑顔だった。

## 悩める蒼と朱の神（ホリテー）

青神の告白まがいから時が過ぎるのは早くて気付けば夏真っ盛り。授業中は団扇や下敷きを扇いでいる人が目立つ。

あの後、次の日からテストがあつたのだけど青神が一日中くつついて離れないという日々が続いて、寝れない、勉強出来ない。の一段コンボでボロボロ。赤点は免れたものの、それはもう悲惨な点数という名の悪魔だった。

今ので分かってもらえたかとは思うが、只今青神さんは絶贊『レ期突入中。青神はツンデレなのか?』と海斗に尋ねてみたものの、リア充爆発しろ!の一言で返された。

前みたいに命令口調ではなくなくった。しかし今では「大空」。今日の夕飯はカツプヌードルがいいんだけど…ダメ…かな?」

猫なで声の可愛らしさ1000%でお願いされる。ある意味命令である。さらに前よりも断りづらい。もし断つてみたとする。以前なら、私は神だーなど言つていただろう。しかし、今となつては目を潤ませてジッと見つめるのみ。これは一種の暴力です。

灯莉とのことなんていうのは眼中はない。まさにアウトオブ眼中。

「何の為にいるんだ?」

と尋ねれば、そこは絶贊『レ期中の青神さん』。

「わ、私に言わせるの?そんのは私と大空の…バカッ!」

とまあ、青神の中では相思相愛。かなり自己中なところは変わつていながら、可愛らしくてツツコツツくらいられない。

家に帰ると面倒くささ一倍…で済むならない。

ハグは当たり前。胸の押し付けは確信犯。鍋の爆発は摩訶不思議。と面倒くささはこの時点までは一倍。ていうか1つは嬉しいような。面倒くささが数十倍になるのはラーメン珍道中から朱々が帰つて

きたとき。

今日食べてきたラーメンの報告を全て俺に話さければ気が済まないらしく、麺に使われてる小麦粉の産地から店主のこだわりまでを逐一と教えてくれる。これだけでも十二分に面倒くさい。

青神は自分が構つてもらえないのにかくアピール。今では日課のようなハグや、爆発、さらには家の固定電話から俺の携帯に電話を入れる。それで青神に構つてしまつと朱々に噛みつかれる。だからといって青神を放つておくと着信履歴は軽く三ヶタ越え。

どちらを選ぼうが何かが起きる。どちらも選ばなくとも喧嘩が始まると、結果俺が出動でやつと収まる。

一番落ち着ける空間と言えばトイレオンリーだ。

風呂は危ない。下手すると青神もしくは朱々が侵入してくる羽目に。青神は当たり前と言つて入り、朱々は幼女に反応するような変態なのか?と痛い台詞を吐く。当たり前などでは決してないだろうし、幼女ではなく妖女だろ、とツツコミたくなるのだが、ここまでくると疲労が溜まつて何も言えない。

結果トイレが一番落ち着ける場所となつた。将来はトイレに住もう。

2人が一番静かになるのはテレビを見る時間。それがドラマなんかならば完璧だ。ただし俺を挟む形で座りさえすれば。そうでなければ喧嘩が始まり、ドラマどころではなくなつてしまふ。

やつとの思いで解放されたとき、体は休みを求めて眠りにつく。朝起きたら2人が布団に入つてゐなんてのは日常。

よくよく考えると厄介な恋人が出来てしまつた男の妹と厄介な恋人の対立のように思える。いや、妹じゃないし。恋人じゃないし。

すべてが疑問に思われるこの状況でアクション起こせばそれはそれは面倒くさいことに。それを分かつてアクション起こしてみた。一回の苦労で済むならそのほうが断然良い。ていうか最近耐えられません。

というわけでテイクワン。

ちなみにテイクツーもある。やれる」とはすべて試そう。それが  
チャレンジ精神。

レッツネバーギブアップ。

「青神」

「どうしたの？」

「お前は何がしたいん？」

何故か似非関西弁。

「何がしたいって別に… 大空のそばにいれば何がってことは… な  
いわよ？」

くそっ。待て。もじもじしながら言つんじゃない。その仕草は可  
愛い。それは認めてテイクツー。

「そもそも何で側にいるんだ？ 恋人でもないのに」

「何を言つてるの？ 恋… 人よ… ね？」

やはり青神ブレインでは相思相愛。青神の妄想を妄想してみよう。

「あははは～待て～こいつ～。捕まえた～」

「捕まつた～。もう… 離さないでね？」

「ああ、離さないよ」

「… というわけで相思相愛？ いや待て、こんなんじゃなかつたと思つ  
んだが。まあ、妄想なんだけど」

そんな今の状況を理解した上でのテイクスリー。

「いや恋人なんかじや 「いやあああ…！」

青神さんシャウト。

「そんなわけ… そんな… わけ… 恋人… そう恋人。相思相愛つて言葉  
が…」

突然のシャウト後の独り言。ああ、ツンデレでなくヤンデレの方  
でしたかつてなんかヤバいヤバい！

青神からまるでスロットの期待の薄い予告のような青いオーラが  
滲み出している。

「恋人…？ 片思い…？ 相思… 相愛…？ まあ… いいわよね」

「そうだ。全部思い…」

全部思い込み。そう言いたかった。

「全部思いつきつ壊せば」

「病んでる！病んでる！ちよ、たんまー青神さん！そもそも僕はつてがはああつつー！」

れていた。

俺が吹き飛んだ理由はしき物質かふかふかと宙に浮かんでる  
というか…

「なんだあの黄色く光る玉は。氣ですか？氣なんですか？」  
まさか青神に気が使えるとは…ってそんな場合じゃない。

「闇黒ニシテアリ」  
モロカニタニヤアシガルノ

「朱々!? なんとか出来ないのかよ?」

「教えてくれ！」——一帯が吹き飛ぶ前に！

から和の言葉をつかうがに聞く子供から教えてやるのもい

「ああ、聞く！ 聞くから教えてくれ！」

二十一

「出来るが！」

一 なら、ひじら一帯と一緒に吹き飛ばしい。じやあなた ママは因縁、わたくしは因縁。阿波うどん因縁の二三

飛んでいく。それで飛べるんかい。

朱々が俺の耳元で教えてくれたこと。

青神に今から抱きついて愛を告げる。

……いや、無理だろ？。愛を告げる時点で厳しいが、そもそも近づけねえ。何だよあれ。地球上にいやいけねえだろ。あれだ、文明の崩壊はこうやって起きてるんだ、と実感する。

いや崩壊させたら駄目だろ。やつぱりやらなきゃ？

「こうなつたら自棄だ。青神！大事な話だ。心して聞け！」

「ここからが本番だ。本番の…はずなんだが…青神の怒りは何故か収まつた。

察するにまた青神の妄想が爆発。多分こんな感じ。

「大事な話って何？」

「結婚しよう」

「…はい！」

みたいな。

つて結婚してるし。いや、あくまでも推測だが。しかし、あれだけふにゃふにゃになつていたらそれほどのことでなければ駄目じや？と思つんだが。

目がハの字。口が波線。そんなもんはふぬけた人間改めふぬけた神様だろ。

「朱々一。いるのか？」

「もちろんお前の真後ろにいるぞ」

なにをもつてももちろんか教えて欲しい所だな。

「あれはいつもこうなるのか？ そうなら俺は地球を壊させる自信がある

「なら地球は滅亡だ」

「まじ？」

「冗談だ。あいつが勘違いを大きくしてるだけ。さつさと誤解を解いてこい」

「それをしようとしたからこうなつたんだけど」

「仕方ないな。いつそのこと死ぬといい。後を追つて青龍も死ぬ

だろ」

「お前…幼い顔してそんなこと言つのかよ」

「幼い顔は好みか？」

「そういうことじやなくてだなー」

「わかった。青龍のことはなんとかしよう。だが、さつきの約束は

覚えているな？」

忘れてると言いたいのだけど…幼い顔で目を潤ませるのは駄目だろ。幼女虐待みたいで俺の中の良心が許してくれない。

「出来る範囲で頼む」

「なら…今度の仏滅は予定を空けておく」と

「次の仏滅つていつだよ?」

「今から3日後」

「日曜日つて言えよ…」

「し、仕方ないだろ！お前たち人間とは違うんだ！」

「あれ？青神は普通に知ってたぞ？」

「うるさいな！別にいいだろ！私だつて知ってるよ…」

「ならなんで…」

「もう！いい加減にしてくれ！とにかく今度の日曜日…予定を空けておけばいいんだ！」

「はいはい」

神様つて奴はみんな勝手なのな。まあ、ラーメン屋にでも行くんだろう。

この時の俺はそんなくらいに考えていた。

そして来る日曜日。いつも鳴るはずの日覚まし時計。それよりも早く、うるさいのが2人騒いでいた。

「青龍！いい加減にしろ！」

「朱々こそ何なの？私の大空のベッドに潜り込むなんて！」

うん、まだ青神の誤解は解けてません。早いとこ何とかしてくださいよ。

「だいたい何で青龍の物になってるんだ！」

そうだ、そうだ。人を物扱いするのはどうかとは思うが。

「世の中には相思相愛つて言葉があるの。もしかして知らないのかしら？」

「知ってる！」

「嘘ね」

「知ってるー」

「嘘」

「知ってるー」

「知ってるわ」

「嘘です！つてあれ？」

「間抜けね。さあ出て行きなさい」

「青龍だつて意味を知らないだろ。2人が愛し合つから相思相愛だ  
る。今は青龍の一方通行じゃん」

「… そうなの？ 大空」

寝てます。

「寝たふりなんていう猿芝居を続けるなら…死ぬわよ。そして私も  
死ぬ」

「起きてますうー！」

「で、私の一方通行なの？」

「そう… だらうなあー」

「あ、そう。見たかしら？ 大空は恥ずかしくて素直になれないの今  
日は勘弁してあげて」

「ぶふおつー！」

壮絶に吹いた。

「どんな自己防衛機能だ！？ 思考回路がずれてるぞ」

「現実をいつまでも受け止められないようなら成長も進歩もない。  
さあ、大空。支度を。出掛けるぞ」

「あ、ああ、そうだな」

突然のことでの慌てながら着替えを取り出す。

「あの…」

「何？」

「出て行つてくれない？」

何故か青神に蹴られ、朱々には程よい高さの頭突きがみぞおちこ  
けた。決まった。どうやら俺が間違っていたようです。

とぶつぶつと言いつつも着替えを済ませ、居間に向かう。

向かおうとしたのだが、途中で服の裾を掴まれた。

「今、向こうに行けば青龍も着いてくる。それは出来るだけ避けた

い」

「そうなのか？なんなら3人でも……」

「馬鹿！いいわけないだろ！何の為に誘つたと思つてるんだ…まつたく

「なら行くか。で、どこのラーメン屋だ？」

「ラーメン？なんの話だ？今田行くのは動物園だ」

「動物園？それじゃまるでデー…」

「それ以上言つたら殺されると思ひべき」

「だつたら何だよ

「そうだな…幼女拉致？」

「さり気なく恐ろしいこと言つなー？」

しかもまだ幼女言ひつか。

「冗談だ。妹とお出かけ程度でいいんじやないのか？」

「んじや行くか

青神が少し氣になるが、まあなんとかなるだろ。

電車、バスと乗り継いでやつてきたのは昔家族で何度も来た記憶のある動物園。

小さい頃の記憶なんてみんなそうなんだろうがほとんど覚えていない。

「行くぞ！パンダにコアラが待つてている」

パンダもコアラもこの動物園にはいないのだが今それを言つのは自殺行為だろう。

先を走つてはしゃぐ朱々。こつして見ると本当の妹のよひに見える。

「大空！急いで！一人で見てても意味がないだろ！」

前言撤回：命令口調の妹なんていません！

「やう思つながらもつ少しゆづくつ行けよ。時間もまだまだたくさんある

時間はまだ9時。電車とバスを考えても時間は余るくらい余裕がある。

「……ならゆつくり行く」

「それでいい」

その後はなかなかに楽しかった。まず大きな動物ゾーン。ゾウやキリン、ゴリラなどがいるエリアだ。

小さな朱々と比べると大分差がある。朱々はそれをまじまじと見つめ上げる。体を伸びさせながら見上げる姿は本当に小動物みたいで。

次に小動物、小動物ゾーンに行く。リスやモルモット、ワラビーもいた。

自分よりも小さな生き物。その姿には親近がでるのか抱っこをして離そうとせず、係員に怒られる始末。ぶすっとした顔でふてくされる小動物。

水辺の動物ゾーンに昆虫ゾーン、鳥ゾーンと周ったところで1時を過ぎていた。

「そろそろお腹が空かないか？朝から何も食つてないのに朱々は元気だな」

「も、もうそんな時間？大空の馬鹿」

「なんで俺？」

「いいの！それより言われたらお腹が空いた。ラーメンだ。ラーメンを食べたい！」

「ラーメンがあるかどうかは分からぬけどとりあえず食べるところ探すか」

探してみると意外に早く見つかった。というより今まで園内を歩き周つて、あらかた日星を付けておいたんだが。

「この食堂でいいだろ？」

「ラーメンがあるなら」

「ははっ、そうだな」

ラーメンを「えておかげばなんどでもなりそうな奴だ。そう思つと

笑えてしまつた。

入つてみると中は殺風景で昔に来たのを少し思い出す。

「おばちゃん、ラーメンを2つお願ひします」

「はいよ、あれ？天月さんの大空君かい？」

「あ、はい。もしかして覚えてるんですか？」

「覚えてるもなにも忘れるわけないでしょう。蛇を首からかけてもらつて園内を走り回つていたのを覚えてのよ～。あの時は走つていつた君をみんなで探してね～」

おばちゃんらしい身ぶり手ぶりで話してくれる所悪いんだが。  
蛇？記憶にないんだが。

「そんなことありましたつけ？どうにも動物園のことが思い出せなくて」

「あら、その時のことがトラウマにでもなったのかね？それより、横の子は恋人かい？妹はいなかつたと思うけど…従姉なら家族で来るしね～。ラーメン一杯サービスにしどくよ」

俺の周りの人はどうにも、俺が女の子とラーメンを食べるとサービスしてくれるらしき。

ていうかトラウマ？知らんがな。

「大空。ラーメンが冷める。早く受け取つて食べよう」

「そ、そうだな」

ラーメンを受け取つてテーブルに座るが、箸が進まない。  
「ど、どうした？ラーメンが不味いのか？それとも私と恋人扱いされたのが…。はあ…」

「朱々もいつもより量が少ないのに食べてないな」

女の子の食が減る。それにはいくつか理由がある、と母から教わらなかつたか？確かダイエットに用のものと…恋煩いだけか？  
「なんだ、ダイエットでもしてるのか？」

「誰がするか！」

だつたらなんだよ。ああ、そういえば…こんなことも教わつたな。  
ダイエットのことを男の子が口出しするのはマナー違反だと。

「悪かった」

「まったく。それにしても大空も早く食べろ。私はそろそろなくな  
る」

「そうだな……」

と無理やりラーメンをかきこむ。

ただ俺は蛇のトラウマに引っかかっているのではなかつた。またトラウマに間接的に……何か大事なことがあつたような気がした。朱々も疲れたのか昼食の後は元気もなく、ただ園内を見渡しては感嘆の声を挙げるだけになつていた。

4時を回つた頃に園内を出ることにした。

そして帰りの電車の途中。

「私は今日、いろいろ物を見た気がする。動物達は大きかつたり、小さかつたり……たくさん特徴を持つてた。私は……青龍みたいに大きくなれ。小さいのだつて魅力がある。なら……少しは大空もこっちを見てくれるかと自信がついた」

「……今もこうして見てるじゃねえか。違うのか？」

「違う。でも少なくとも大空は私を見つめている。で、ででも、ここのこ、ここりよがつて噛んだ！？」

何が言いたいんだコイツは。噛みすぎだ。伝わるものも何一つ伝わらないだろうに。

「ええい！笑うな！もういい！帰る！」

「おい、何を言おうとしてたくらい言えぱいいじゃねえか」「知るか！」

電車の扉が開くと同時にいつぞやの団扇を取り出し、早々に電車から降りると上空へと飛び上がつていいく朱々。いやいやいやいやいや。帰るつてひとりでかい。

「頑張つて帰つてくるんだなー！じゃあ」「じゃあつて……」

俺の最後の問いかけも虚しく終わり、残るのは周りの人からの奇異の視線。

そりゃあ、目の前で人が団扇で飛んでいったらびびる。しかし、落ち着くんだ自分。この場はとにかく…逃げろ！

急いで電車を飛び出す。現代の日本人の良いところはこうサバサバとして、おかしいとは思つても引き止めてまで追求しようとはしない。だけど俺は走つていた。

なぜか？

慌てて電車から降ります。

するとあら不思議。家の近くの駅の一つ前で降りてるではありますせんか。

というわけで走つていた。

走りながらもいろいろなことを思つていた。と言つても全部朱々のことだが。

出会つた当時は笑つてる姿をあまり見なかつた。喜怒哀楽を混ぜ合わせたような表情をしてることが多かつた。近頃は青神とケンカすれば怒りを露わにするし、ラーメンを食つてる時は笑つていた。そして今日。朱々はたくさん表情を見せた。笑つてる顔に怒つてる顔、困つた顔にすねた顔。

ひとつひとつ増えていく表情に俺は安心していた。神様だつて人と変わらないと。

そして思う。彼女達は何のために永遠を過ごしているのだろうか。自分を犠牲にして他の人の為に願いを叶えるだけの永遠。なら自分はそんな彼女達の為に出来ることは極力しよう。そう思つた。

のに…

「なんで家が荒れてんだよ！青神！朱々！出てこい！」

「…ああ、大空ね。お帰りなさい。あなたがいなくて…いなくて…私…」

その時の青神は一番恐ろしかつた。怖いとかではない。背筋が凍りつく感じ。

青神は何かがお腹の奥から突き上げてくるよつた…そんな声を出して笑つた…。

「こわれそう」

え？俺の人生の中でこの状況の回避方法は習つてない。ていうかあるのか？いや待てよ…

「あー、習つたかも」

朱々から習つた氣がする。

恥ずかしいがやるしかないのか。と渋々向かう。大丈夫、大丈夫と自分に言い聞かせて青龍に近寄つていく。

「なんで朱々がそこに立ちはだかるのかな？」

「嫌だ」

「あの、なんで立ちはだかるのかな？」

「嫌だ」

言葉のキヤツチボールをしてほしいところだな。

「つたく。朱々はいつたいどうしたいんだ？」

「嫌だ」

「嫌だ」

「嫌だ」

なに…！？いつもならここでひっくり返るパターンなのに。

「嫌なんだ。このまま大空が青龍のところへ行つて…嘘でも好意を示すのは…嫌なんだ！」

「お前…」

人を困らせて楽しいかい？

「大空…私…こわれて…ない？大丈夫…かな？」

「知るかー！ていうか2人ともそこに正座しろや！」

もう駄目だ。我慢の限界だ。これ以上は体力も精神力も保たない。「いいか？よく聞け！まずお前達はなんでそこまでわがまになれるんだ？自分のことだけじゃなく周りのことも考えやがれやこんちくしょう！」

「私と大空は相思相あ…」

「違う」

「私と大空はそ…」

「いい加減にしろ」

「それならなんだって言つの！？ 答えなさい！」

「お前がなんなんだよ…。いい加減目を覚ませ！」

「そつ…ね。いい加減諦めなきや いけないのかもしれないわね…」

「やつと分かつたか」

「もし良かつたら…体だけの関係でも」

「やめい！」

一瞬考えた自分がいたことがとてもやるせなかつた。だつて…あの体だぞ？男なら…仕方ないだろ？

「スカートの裾をチラチラさせんな！」

それでも見る自分。男なら…な？

「ど、とにかく、青神は一回頭を冷やせ。それで朱々。嫌がらせがひどすぎる」

「そ、それは…嫌だつたり、嬉しかつたりで…べ、別に少しふりはいいじゃないか！」

「ああ、今日の動物園くらいう何度でも。ただ青神の件はどうだ？なんとかする約束はどうだ！」

「何言つても通じないんだ！分かるだろ！」

「ああ、分かる。でもやるつて言つたんだ。責任持て」

とまあ、説教は夜9時までもつれ込み、青神にはテスト前と同じように過ごすことを約束させ、朱々には約束を守ることを覚えさせた。こいつらは小学生か？

こいつらがこの先この約束を守るかどうかは全くを持つて信用ならんがここのこれでいいんだろ。

次の日の朝。

俺はとても清々しい一日の始まりを迎えた。

両隣に女の子と寝ながら。

「てめえら反省というものを知らんのか！ええい朱々、しがみつくな！青神も目覚めのキスを求めるな！」

「昨日はあんなに求め合つたのに。私とは一夜の関係だつたのね」

「貴様の頭では説教がそつたのか？」

「…大空の浮氣者。私というものがありながら青龍まで手を出すとは」

「出してないし浮氣でもありません! てか話をややこしくするなー。」

「そんな…私は2人目だったというの…?」

「ああ…もう!」

「ふつ…」

「あ? 今の笑いはなんだ?」

「大空程いじめて楽しい人はいないわね」

「こんな遊びに朝から必死になるなんて…バカだな!」

「待てよ。どこからが遊びなんだ?」

「テストが終わってからよ」

「ふざけんなあああつ! -!」

「嘘よ。今日の朝だけ」

「どつちだあああつ! -!」

「ああ…最近思います。こいつらは疫病神だと。」

「うして慌ただしく忙しい1日が始まっていく。」

## 願うは蒼と朱の神（バケーション）

「一つ言つておひい。気安く「神様お願い」なんて言葉は言つてはいけないということを。

おかげで俺の家は朝っぱらから騒がしいです。  
せつかくの休みなのにだ。

なぜ火曜日のこの日が休みなのか。そう、昨日は終業式。つまり今は夏休みということになる。本来ならなんとも嬉しい夏休み。しかし。俺が気安く神様にお願いしたことから連日騒がしくなる。さらに灯莉に会えない。多分夏休みに俺は死ぬだろう。

そして今朝騒がしいのは目玉焼きにはソースか醤油かというなんともどうでもいいことで朝から頭が痛くなる。

どうやら料理長朱々としてはソース。グルメ青神としては醤油とのことだ。

どっちもかける、塩胡椒だけという妥協案は言いだけで却下された。

毎日の朝が騒がしい分にはいいんだ。賑やかだろ？問題は工ス力

レートしていくと…日本が消える恐れがあります。

「2人ともいい加減にし…ふふおつ！？殴つたな？親父にもふふおつ！？」

まさか2発も殴られるとは。燃え尽きた…真っ白にな…なんてやつてる場合じゃねえ！日本が消えるって！

「今日一日なんでもするからやめてくれ！」

時間が止まる。さつきまで争っていた2人がゆっくりと席に座る。

「まあ、いいわ

「一日なんでもするんだな」

「あ、ああ…出来ることない…や…る」

なんて軽はずみな事を言つてしまつたのだろうか。翌日に俺は今日といつ日をなかつたことにしたくなる。

真っ先に願いを言つてきたのは朱々。

「動物園だ。動物園に連れていく」

「動物園？ 次は水族館とかにしないか？」

「水族館…ならそつちにする。早く準備しろ…」

「はいはい。青神はどうするんだ？」

「待て！ 私の願いだぞ。青龍は着いてこなくていい…」

「でも青神の願いはどうするんだよ」

「私なら大丈夫よ。この大きな器で田中大空を自由にすることを許してあげる」

「青龍に許してもらわなくともいいだろ…」

「デレ期を強制終了させてからは今までのこの調子。少しもつたいない気もする。うん、月1でいいからなつて欲しい。」

「まあいいじやねえか。水族館だろ？」

「ああ！ 早く行こう！ お魚がたくさんだぞ！」

「こうしてみるとやっぱり妹なら大歓迎する。こんだけ素直な妹なら。」

「早くしろ大空」

「この口がしゃべらないならもつとだ。一度お兄ちゃんと呼ばせようか。うん、これも月1でやろ？ 毎月スペシャルティーがある日常。いいじやないか。」

と、妄想をかきたてるうちに着いたのはこの夏休みシーズンになつてから何度もテレビで取り上げられている浜の崎水族館。なんでもペンギンとイルカのコンビネーションショーをやるらしい。ぜひとも見たいものだ。

観光案内を自分に自分でしてのうちに朱々はガラスの水槽にへばりついていた。

「美味しそう…じゅるつ」

楽しそうでなによりだ。うん…楽しんでるよな？ 横浜中華街を歩いてるだけでお腹が膨れるような感じでは決してないはずだよな？ 食べれないことをしつかりと告げた後朱々はがつかりしていたが、

それでも大きなサメや小さな貝類を見ていた。それはそれなりに楽しそうだった。

こんなで願いを消化出来るならなんとも安いものだ。

そして館内の水槽をこれでもかという程見終わり、やっと帰宅。「イルカの上にペンギンが乗っているのには驚いたぞ！仲良しなんだな！」

「まあ…仲良しなのか？」

「なら私も大空に乗る！」

「意味が分からんだけって乗るな！」

「いいじゃないか。こうしてみると大きくなつたみたいだ」

まつたく、それで喜んでもらえてるならいいか。

笑っている。朱々が笑っているならそれで。

そんな感じで自分を納得させて肩に朱々を乗せる。

家に着く頃には辺りは暗くなつていた。

青神が心配だが、この後散々付き合つんだ。文句ないだろ。そう思つてドアを開ける。

中には誰もいない。

「なあ、朱々。青神はどうに行つたと思ひ？」

「…宇宙…」

「あつ…？」

まさか…いやあいつなら…

「…は広い」

「…寝言かよ…」

気付けば俺の肩でぐつすりと寝ていたのだ。こうすると本当に神様か心配になつてくる。もしかしたらただの子供じゃないか？

朱々が実際子供かどうかは今は置いておいて、とにかく青神の方だ。

そう思つた時携帯が鳴る。まさかとは思つが青神が…とにかく電話に出てみることに。俺は恐る恐る携帯の通話ボタンを押す。

「もしもし？」

「あ、大空君？また青神ちゃん来てるんだよね。迎えに来て欲しいんだけど」

「あー、はい。もしかしてまた昼飯を？」

「そりなんだよ。僕は警察官だし、行き倒れを作るわけにはいかないからいいんだけどね？僕が行き倒れになるのは困るのかなって。行き倒れっていうとお腹空いているイメージがあるけど実際は病気とかで屋外で死んだりする人のことだから微妙に違うのかな？病気と言えばインフルエンザがね…」

「とにかく行きますんで」

「ああ、そう？急いでね」

「またか…。大護さんには迷惑をかけるなっての。

交番で着ぐと寝ている青神を早速起こす。

「こり、起きろ」

「私は機嫌を損ねているの。だから大空のことは聞かないことにしたの」

「お前が起きてなんらかのと帰るぞ。朱々も心配してる」「いや寝てるけどさ。

「私はあなたのことは聞かないの」

「なら一度と帰つてくるな」

「…そう言つなら帰るわ。大護もありがとう」

「また来てねー」

いいのか大護さん。

もう空には月が昇り、電灯に明かりが点つていて。

「なんで機嫌を損ねたんだ？出かけるのはお前も了承済みだろ？」「そうじゃないの。1人になつて考えてみたの。大空は灯莉が好き」

「…まあ… そうだが」

「私は大空が好き」

目の前で言わると正直に恥ずかしい。

「大空、灯莉を好きになるのやめなさい」

「は？」

「灯莉を好きになるのをやめるのよ。出来ないの？」

「出来る出来ない以前に気持ちを変えるのは難しいだろ」

「そつ。でも大空はそれを私に強要する。私は神様。あなたの願いを叶えるとも言つた。でもそれは出来ない。それは知つてゐるわよね? ただ私が楽しみたかつただけ」

「ああ、知つてゐる」

「なら私と大空の今の関係はなに?」

「居候か?」

「そう。けれどそれは今私の首を絞めている。私はあなたが好き。その気持ちを抑えて同じ屋根の下。毎日痛いの。ねえ? これ以上気持ちを抑えなきゃダメなのかしら?...」

確かに感情を抑えろつていうのは酷なのかもしれない。俺だつてそんなことは出来ない。神様だつて俺達と変わらない普通の感情を持つてゐるんだ。それはよく分かつてゐる。

「...応えられないぞ。その気持ちには」

「それでもいいの。なら早速私をおんぶしなさい」

「...なぜ」

「分からぬの? 朱々には肩車をしたじやない。だから私はおんぶ。あ、お姫様抱っこでも構わないわよ? むしろそつちにしたほうが」

「お前と朱々じゃ大きさが違うだろ?...」

「あら? 私の願いをひとつ聞くんでしょ? 早くしなさい」

「え? こんなでいいのか? 僕はもつと過酷な試練が待つてゐるのか」と

「私がおんぶと言つてるんだからそれでいいの」

それならいい。勝手にかぐや姫ぱりの無理難題を持つてくるかと思つていた。

俺は腰を低く下げる。

「さあ、お姫様お乗りくださいませ」

「あら? 分かつてゐじやない。ずっとその口調でいたらいじと思つわ

「それは無理

「ぶうつ」

「ふつ！なんだ？そのぶうつてのはは？」

「な、なによ！ただ少し腹が立つたといつか別にいいじゃないとか思つたら勝手に出たの！文句があるのかしらー。」

「いや、なにも」

なんだかんだでこいつだつて可愛い所があつたりする。

青神がいて朱々がいる。そんな生活は海斗の言うとおり幸せなかもしれない。

でも認めない。俺の肩や背中で眠るようなのは神様ではないと。

## 炎天下の長距離走（マラソン）

季節は夏になつたばかり。といつて炎天下を度々超えてくる。これも地球温暖化が原因かと思うとエコを心がけたいところだが暑さのあまりにクーラーをガンガンに入れる悪循環のこの時期。春と比べて学校にはすっかり慣れて暇を持て余し、暑さも助けてかだらけているのが田に見える。

そんな自分もだらけているうちの一人だ。だからといって怠慢といふわけではないが。

暑さにはどこぞのわがまま神様も適わないようだ。ふぬけている。授業だつて実際に聞いているのかどうか分からぬ。しかし咎める先生はいない。別に青神の溢れるオーラ…といふわけではなく、優等生が授業をいい加減に聞いても成績は下がらないのだ。

むしろ俺みたいな馬鹿は眞面目に聞いても叱られる。なんて不条理な。

なにはともあれこのだらけた雰囲気は何か一つ行事でもあれば違うのだろうが、この先の行事と言えば夏休みくらいなのである。ちなみにテストは行事というより地獄なのでカウントしない。ああ、独断だ。

そんなことを考えていた時だった。

帰りのホームルームの際とうとう年齢不詳が…と睨まれたので担任が口を開く。

「そのふぬけた態度はなんだ!」といつことで次のロングホームルームの時間はマラソンをしようと思つ

担任は馬鹿か?こんな暑い日でマラソンなんてしそうもないながら熱中症続出だらう。

もちろんクラスからも反対の声が挙がる。

誰がそんなもんやるか。やるなら豪華景品をよこせ。

「もちろん豪華景品を用意している」「

その一言は教室に大きな波紋を生んだ。人というのは現金な生き物である。しかし、中には豪華景品が何かという疑いを持つ奴もいる。現に守和が俺に囁いてくる。鬱陶しい。

「ちなみに景品はトップから順に3万円分商品券、最新型音楽プレーヤー、焼肉亭燃える肉の食べ放題ペアチケット、購買の優先権、シャワー室使用権、教室のコンセント使用権、スポーツ店の4万円商品券7人までだ！」

教室が歓喜の声で溢れる。さっきまでの暑さなんてものはなかつたかのような盛り上りを見せていく。

「ちなみに…後ろから3位には福袋だ！」

福袋？って正月に配るやつだよな？お店が正月前に余った物を詰めてある物が入っているやつだ。余り物には福があるとかなんとか。「時期こそ違えど趣旨は大体同じだ。余分に刷つておいたプリントやらがたっぷり入ってる。次の期末テストには役に立つてくれるだろうな。範囲外だけども」

つまりは課題を詰めてあるということか？

「なあ、守和。これはどういう風の吹き回しだ？」

「どうやらお見合いが駄目になつたらしいな」

三十路じゃあきついだろうなと思つたその時三十路がこちらを見る。見るといつよるは睨みつけるだが。

そういえばさつきから俺の心読まれてないか？考えてることが簡単抜けになつてるような気がする。

しかし、よく考えてみると三十路も抜け目がない。一位の商品が一番ではないのだ。というのも運動部にとつてのみだ。スポーツ店に行く運動部にとつては4万円の方が魅力的。つまり運動部は7位を狙う。よつて一位の商品は必然的に運動部ではない奴が手に入れることが出来る。商品の中には女子にとつては必要なシャワー室。そして適当にやれば福袋もとい課題。まさにこの雰囲気打開のための策と言える。

しかし…お見合いの話はどこまで本当なのか。つまり結婚資金をここに使つたのか？そななのか？と担任を見つめてみる。返事はない。やっぱり心は読まれていみたいだ。

しかし…あの商品券は魅力的だな。

ただあれを手に入れるにはマラソンでトップにならなくてはならぬ。ここはひとつ本気というのを見せてやるつじやないか。

というわけでなんの前置きも無いままマラソン大会当日。

それぞれ欲望やら野望やらにまみれて運動場に集まる。

担任が拡声器を使って集まつたクラスメイト達に説明を始めていきる。

「ルートは至つて簡単だ。まずは校舎を一周。次に今は緑の葉一色の桜並木道を通る。その道を真っ直ぐ。すると住宅街の一角に出る」

なんか知つた場所…って俺の家の前じゃねえか。

「そうしたら給水所がある。でつかい看板をつけといたから分かるはずだ。ちなみにチェックポイントも兼ねてるからな。

このチェックポイントだけは民家を借りている。天月さんにしつかり迷惑をかけるように。ここで少し迂回して学校へ戻つて終わりだ。いちおう地図も配るから」

おいおいどこまで行くんだ？ていうか俺と同じ名字が給水所になつてなかつたか？なあ、おかしくね？しかも迷惑つて嫌がらせじゃねえかああ！！

「さあ！青春を駆け抜ける！野郎どもーーいか？一度きりの人生楽しみやがれ！」

なんだか一瞬、青春を無駄にした三十路の叫びにも聞こえたような気がする。

よく考えてみると暴走族かなんかの掛け声っぽかったような気もする。

「そして…天月大空の家を荒らしてきやがれ！」

「やめろおおおおーーー！」

俺の悲痛の叫びがスタートの合図になり出発。当然出遅れる俺。

「三十路いい！！！」

自分を奮い立たせるかの」とく叫んで俺もスタート。

スタート直後はやはり運動部がトップに出る。多分ゴール前で乱闘が起ころう。もちろん俺はびりつけつだがな。

しかし、このコースを選んだ三十路が悪いんだ。俺はこの道を網羅している。もちろん近道だって全て理解している。

「…三十路はなぜ車で俺の後ろを着いて来てるんだ？」

「先頭に伝令を出そう。天月家の食い物は食つてよし」

「嫌がらせか？俺がなにかしたのか？」

「その口調を改めてから話をしろ」

「嫌がらせなのでしょうか？私めがなにかをしたと申すのですか？」

「途中から変な敬語になつてゐる。小学生からやり直せ」

「くそやう！」

「さあ、走れ！最終走者。最後まで走ればゴールテープは張り直されてみんなが出迎えてくれるはずだ！」

「そんなゴールの瞬間なんかいるか！なんで俺に着いてくるんだよ！」

「！」

「最終走者を励まさないとな。それに一人で走つてるのはお前だけだ。そんなことは教師としては見逃せない」

「…教師？」

「そうか。一変この車にひかれてみたいのか」

「それが世の中の教師がすることなのか！？」

「そうだったら聖職なんて呼ばれないだろ？！」。天月はバカなのか

?…頑張れよ」

「やるつて言つたのはそつちだろ？がー血口完結して哀れむんじゃねえ！」

「そんな風に話をしながら走つていたら途中でばつて倒れてしまつ

ぞ？」

「分かつてゐよ！だつたら話かけるんじゃない！」

「面倒くさい男だな。そんなんじやモテないぞ」

「そつちもモテないだらうよ！お見合いでも失敗しろ…」

「なつ…………！なぜそれを知つている」

「本当だつたんかい。ていうか失敗しろって言つたのになんで自爆してるんですか？」

「とにかく走れ！青春は逃げていぐぞ…」

「…先生の分も頑張ります」

「哀れむなあ！ひぐぞ…」

慌ててスピードを上げてみたが…ヤバい。息が切れてきた。三十路と喋りすぎた。

そんなのも束の間。

いつの間にかチェックポイントであり給水所である自分の家に着いていた。三十路と喋つている間に大分進んでいたんだな。

しかし疲れた。早く水が欲しいところだ。

「おっす！大空君。ここは給水所だよ。水を受け取つたらまた頑張つてね」

そんな時に癒やしの天使かなんかが舞い降りた。

「頑張る！」

「う、うん。頑張つて」

「そういえば灯莉は何をしてるんだ？」

「私は運営係。公平な立ち位置つてことで先生がね」

「その通りだ。しかしだな。天月はただでさえ遅れてるのに急がなくてもいいのか？」

「あ、しまつた。早いかなくちゃな。水はどこだ？」

「はい！」

と灯莉が水の入つたボトルをくれる。

「ありがとうな」

それを受け取つてまた走りだす。一旦止まつてしまつたから足が

重く感じる。

それを振り切つて一度スピードを上げる。だんだんと体が慣れ始める。

それにしても一向に前の走者が見えてこないのは何故だ?みんな速すぎんだよ。

と思った矢先に、それはもう田立ちまくの青髪の女子が見えた。いや青神だろ。あの青い髪はあいつしかいねー。

少し頑張つてスピードを上げて近付く。

それに気が付いたのか、青神もスピードを上げる。

って、逃げるよう走らなくてもよくなっていますか?なんてことはこいつには全くをもって無駄だろう。

あんな運動神経抜群な奴に逃げられたら追いつくわけが

追いつくわけが…?

追いついた。

「な、んで…、逃げ、る」

「こ、これは、きょ、競争」

まあそれもそうだ。逃げるのは当たり前か。

「も、もう、一つ…はあ。なんでこ、んな、後、ろに?」

「い、一度止まりなさい!」

そう叫ぶと青神は勝手に止まる。仕方ないので止まつてやることにする。

「はあ、はあ…」

「早く言えよ!前に追いつかないだろ!」

「ま、全く…大空を待っていたあげたといふのになんて態度なの?」

「競争じゃなかつたのか?」

「う、つ。それは…そう…面白いじゃないじやない!」

「だったらよ…この水がたくさん余ってるボトルもいらしないな?」  
さつきから俺の顔を見ながらちゅろちゅろと見ているのを大空さ

んは知つてます。

「くつ…人の弱みにつけこんで…卑怯極まりないわね  
で、実際どうなんだ？」

「だからさつき言つた…」

「ボトル」

「のは違つて、本当はもう走れないの」  
案外軽い女だなお前。

「あんな運動神経良かつたのにか？」

「いい？私が今までどれだけ引きこもつていたと思つ？なのにも関わらずこんな暑い日に外にいたら死ぬわよ」

「死んでないけどな」

「私はもう走れないの」

「そうか。だつたら歩いてゴールするんだな。そしたら最後にみんなが拍手で迎えてくれるだろ？よ。じゃあな」

「そう。言い残して去るつもりだつた。いや、去りたかつた。なのに…」

ガシツ

ガシツつてなんだよ。

「も、もう動けない」

その言葉を言つてから口を開く気配はない。そして…そのまま崩れ落ちた。

「青神！しつかりしろ！熱中症かなんか？ボトルだ！水を飲め！」  
ボトルの先を青神の唇に無理やり押し当てる。なんとか飲んでいるようだが状態はよくなる気配はない。

「こんなときに限つてあの教師はなにしてやがる」

「つるさいな。ここで青神の様子を見るだろ」

「いつたいどこから出てきやがったんだ…」

「今はそんな場合じゃないだろ？車に乗せる。手伝え」

「最近思つんだけどこの教師最初とキャラ違つよな。なんて今言つてる場合じゃないけど」

青神を車の後部座席に座らせる。

「それでどうするんだよ」

「（）からは儂がやる」

ん？病院の先生かなんかが乗り込んでるのか？三十路もなかなかやるな、なんて思えたのはほんの一瞬。田の前にいたのは白い髪に黄色の瞳の女性。その格好は何か嫌な記憶を思いだせる白いドレスに身を包んでいた。

「せ、先生…こいつは…」

「白虎」

「つまり、青神の親戚かなんかか？」

「まあそんなところかのう。さて処置を始めよつ」

「なあ、神様つてこんなに周りに居るものなのかな？」

「ん？青いのと私以外にもあるのか？」

「ああ、あと朱々がいる。えつと朱雀だ」

「朱いのか。時を同じにして集まるというのは珍しいことではある。しかし、これまで一度もなかつたということではないのう。…まあ青いのや朱いのは知らないだろうがな。まあ、処置に集中させてくれ

「そんなもんなのか？」

俺の問いかけに答える様子はない。どうやら本当に集中しているようだ。

「なあ、三十路」

「死ね。担任様と呼べ」

わお。こいついちおう教師だよな？

「で、担任様。いつから白虎と一緒になんだ？」

「タメ口かよ。担任様と呼べ大体春だな。担任が決まった日に少しお参りしたんだが…」

「白虎が来たと？」

「その通り」

「で、担任様はいつたい何の願いをしたんだ？」

「もちろん結婚だ」

「そしたら白虎が…」

いや、待てよ…お見合いに失敗してるんじゃ？

「もしかすると白虎は縁結びの神様じゃなかつたりしなかつたか？」  
「よく分かつたな」

担任がきょとんとした顔で答える。なんかムカつく。なんでだ  
うつ。きっとあれだ。そもそも神様が当たり前のようになつて成立してい  
る会話に苛立つているんだ。

「白虎は金運の神様で恋愛には疎いというか…なんだ、嫌つていて  
な」

「そんな神様事情知らねえよ。ていうか担任様よ。いつからそんな  
口調だつた？」

「あ？天月ごときに今更猫を被る必要もないだうつ」  
…喜んでいいのか？反応に困る回答だなオイ。

「さて、こんなもんかのう」

タイミング良く治療が終わつたらしい。青神の心地良さそうな表  
情を見て安心する。

「青神は何があつたんだ？わざわざ他の神様に治療してもううんじ  
や神様特有な何かなんだろう？」

「察しがいいな。青いのは今や命の危険に瀕している

「なつ…！」

「まあ落ち着くがいい。今すぐとこうわけではない。だが今から一  
年がもつてことこの」「

「そんな…」

いや、待てよ。こういう時には何かしらの対応策があるはずだ。

「なあ、俺は何をすればいいんだ？どうしたら青神は助かるんだ？」  
「仮の御石の鉢、蓬萊の玉の枝、火鼠の裘、龍の首の珠、燕の産ん  
だ子安貝の五つだな」

なんだそれは？どこかで聞いたことがあるような名前だが、一切  
分からない。

「それはどこにあるんだ？」

「ああ、あと天の羽衣だ」

天の羽衣…？

……つ！

「つて竹取物語かよつ！」

「さあ取つてこい天月！そして青神を助けるんだ！」

「咲子よ。そこまでにしておこつ」

「言い出したのは白虎のほうなんだが」

「すまんのう。全部冗談だ」

「ふつざけんなあああああつ…………！」

「うるさいわね！」

「いたつ！」

急に起きた青神に殴られた。いや俺は悪くなくね？不可抗力じゃね？

「大体白虎に向かつてふざけんなとは何よ。「いい？」この人はね神様の中でも特に長生きをしていつもうつた！？」

ルター？宗教改革がどうかしたのか？

とまあ冗談は置いといて。青神が盛大にハリセンで殴られてた。

「青いの。呼び捨てにした掛け句、遠まわしに儂を年寄りと言い寄つたな？」

「そうよ…文句があるのかしら？」

開き直つた！？

「…つ」

多分白虎の中で何かがはじけた。

「青いの、今すぐ社に帰るがいい

「なつ…」

「そもそもこやつには朱いのもいるのだから、だったら青いのはいらないであろう。帰るがいい」

「それだったら朱々が帰ればいいじゃない！私が先約

「ほつ…ならば…2人揃つて帰るがいい。儂が代わりに願いを叶えよ。咲子には十分過ぎる富を『与えた』

「でも俺はお金が欲しいわけじゃない」

「そう欲しいわけじゃない。」

「儂を誰だと思っておる。今まで溜めてきた神通力を使えばどんな望みも叶えられる」

「ちょっと!私の時はなぜ使わなかつた!」

「咲子は縁が無さ過ぎてのう…今まで溜めてきた分じゃ力が全然足りんのだ…」

担任が腰から折れた。つまりはだ。神頼みでもどうにもならないほど結婚は出来ない。そういうこと。「愁傷様です。

「だったらさ…青神達と一緒にいさせてくれよ。今はなんとなくだけ楽しいんだ」

「…そうか。青いの、悪いことをした。年甲斐もなく騒いで済まない」

「分かつてくれたならいいわ。許してあげる」

「こいつは全く懲りない奴だな…とつぐづく思つ。

「天月、マラソンはどうする気だ?既に頭が『ホールしてお前の家で騒いでいるが

「…リタイアさせてくれ

一刻も早く家に帰りたい。

「そうか。だつたらこれを持つていけ。課題なんだが…倒れた青神は可哀想だろ?全部お前にやろう!やつたな!」

結婚出来ないことのハツ当たりをしたくてたまらない担任様の為に受け取る。

「あ、ああ…。担任よ…。1人が寂しかつたら構つてやるからな…」「哀れむなあ!」

担任はその場で崩れ落ち、涙を垂れ流しにした。

急いで家にたどり着くと家の前に朱々が立つていた。まあ…そうだろうな。

「大丈夫だつたか？」

「家はひどい有り様…つー！」

朱々は目を一度見開き、こすり、見開く。そして、家の中に走り去つた。なんなんだ？

「とりあえず家に入るか…」

玄関の扉を開けるとそれはもう靴の山。綺麗に一段。長方形に積まれている。

「…出てけー！」

「天月遅いぞ？みんなは既に天月家の菓子類を空にしている。まあ

来い」

「なんで担任様がここに…」

「私を哀れんだ罰だ。いや…罪だ」

「どつちでもええやん…」

てか菓子類は朱々のしかなかつたはずだぞ？ラーメンスナックとかラーメンチップとかラーメングミとかラーメンとか。

「まさか…ラーメングミ食つたんじや…」

あれは人の食い物じゃねえ。口に入れた瞬間に広がるこいつてりとんこつ味。後からやつてくるあつさりしようゆ。がコンセプト。実際は口に入れた瞬間に広がるこいつてりした何か。後からやつてくるのはあつさりした何か。その何がが恐ろしい…何を原材料にしたらあの味になるんだ？しかし、一度みたんだ。原材料を。そこには一言。ラーメン。

「ああああああああ…！」

「天月が壊れた！？」

「ヤバい…あの時のこと思い出してしまつた」

「…みんな撤収だ。天月がキレる前に撤収だ！」

「…オー！」

さつきまでいたクラスメイトは一瞬のうちに走り去つた。一部を覗いて。

林一ズ、海斗。お前らあれを食つたんだな？…海斗？お前は今日

普通の授業だろつよ。

この4人なら気兼ねなく外に捨てられるな。それにしても……恐る

べしラーメンング!!。

さつさと4人を捨てて、片付けを始める。

「すまんな朱々。お前の菓子がなくなつた」

「決して許されることではない……が。ラーメンング!!だけは助かつた

ああ?お前も嫌いだつたのかよ。

「大空はどうしてあんなことを……?」

「あんなことつてなんだよ青神?」

「私達と居たいって……」

「ああ、そんなことか。だつてお前らこの世界に居たいんだろ  
?だつたら居ればいいじゃねえか」

「もう…そういう意味じやないの?」

「青いのもまだまだ若いのう。まあ、儂だつて負けてはおらんがな  
だつたら儂とかじいさんみたいな口調を直したいいと思うんだが。  
私も若い」

「おつと朱いのもおつたな。お主も青いのには負けてはおらんぞ?  
そう機嫌を損ねるな」

「まつたく

「なあ、朱々と青神はどうちが年上なんだ?」  
そう尋ねたとき3人から殴られた。

女性に年を聞くなどのことらしい。

「いてえな…。とりあえず暗くなつてきたし飯にするか?」

「カツヌードル

「上手いラーメン」

「手打ち蕎麦」

「どうしてそび偏るんだー?」

しかも麺類限定。俺は断然米派なんだが。

「間を取つてうどんは……」

「調子に乗らないで」

「嫌」

「却下だ」

「じゃあ全部か？全部作るのか？カツヌードルはまだしも、上手いラーメン？手打ち蕎麦つてなんだよ！」

「仕方ない。上手いカツラーメンでも許す」

「普通の蕎麦で譲歩しよう」

「ふふん。私が一番良いことを言つたみたいね？」

「残念だが全員最悪だ。ていうかお前らはどうして上から田線なんだよ」

3人に揃つて言われた。神様だから、と。

その後渋々、俺は注文された内容の物を作った。

…これくらい自分でやらねえか？

3人が揃つて麺をすすつているのを見て気が付いた。別に自分の飯がないことではない。自分の田の前にはカツラうどんがある。

白虎さんは何故ここで食事をしてるんでしょう？

深まる疑問。ここは言つべきか、言わざるべきか…。まあ、明日になつたらいなくなつてるだろう。そんな安直な考えが出来たのはその時だけだつた。

やつて來た朝。あの後直ぐに寝た結果、いつもより早く田が覚めた。というのも部屋の外が騒がしいからだが。

「早く起きるのじゃー」

普段なら青神か朱々が起こしにくる。この日はいつにも増してうるさい。というか青神と朱々は外から呼んだりはせずに部屋に飛び込んでくる。

なら外で叫んでるのは誰なのか。

「まだ起きんのかー！」

口調からして白虎だろ。まったく年寄りは朝が早い。

まだ朝の5時である。外の年寄りは無視して再び眠りにつく為に潜るように布団を被る。

白虎が俺を起こしに来たのに気付いたのか、青神と朱々が部屋に飛び込んでくる。

部屋に飛び込んできた2人は俺の布団を引っ剥がす。

「「なんで白虎が！」」

「ひちが聞きてえよ。

「なんでもないじゃら！」

「疑問しかねえよ」

「儂も主…うむ、大空と住むからの！」

時が止まつた。むしろさかのぼったんじゃねえか？

「意味が分からぬといつ一線を越えた。主つてなんだよ。とにかく担任の所に帰れ」

「よく考えて欲しいのじゃが…儂は昨日何と言つた？」

「忘れた」

思い出したくない。と言つた方が正しいかもしない。

「なら教えてやろう。儂は願いを叶えると言つた。それに対して主は青いのと朱いのと一緒にいたいと言つた。つまり、儂は願いを聞き入れた以上、主と一緒に生活をする」

「……………」「……………」「……………」

俺の生活は前よりも数倍賑やかに、前よりも数倍騒がしく、そして何十倍も非日常的になつていく。

## 悪魔は定期に来る（リメンバー）

ああ、分かつていた。

何をつてそりやあ悪魔が来ることだ。奴らは年に5回はやつてくる。小さい使い魔は2回やつてくる。

所謂ところの定期テストと課題テストといつやつだ。

今回は前者。

定期テスト。

つまりは悪魔だ。

この悪魔がやつてくるとろくな事が起きない。というのもあの青神が爆弾発言したからという何とも納得し難い理由である。テストの点数が悪かったのはその延長線ということにしておこう。まあ… いつもしてテストがあるので灯莉と一緒に勉強をしているわけだ。

そう。今俺はいつものメンバーに勉強を教えてもらつていてる最中だ。そして待ちに待つた灯莉との勉強。

正直なところ集中なんて出来やしない。

「あ、また間違てる」

「分かんねえ…」

訂正しよう。集中出来てたとしても分かんねえ。

「だーかーらーそこは公式を当てはめるだけなんだよ?」

「当て…はめる…ね」

…分からぬ。

「もう…教えてて心配になつてくのよ」  
「すいません…」

「休憩にしよつか?」

灯莉の鶴の一聲で辺りは一気に休憩ムードになつていた。

「飲み物買つてくる。買ってきて欲しい人はいるかしら?」

「青神が自分から…珍しいな。俺はコーラ」

「そりだな…烏龍茶を頼む」

「僕はオレンジジュース」

「私は甘いのお願い」

「ええつと…最初からおしるいに鳥龍茶、オレンジジュースに甘いのね」

「いや待て。おかしくなかつたか?」

「おかしいのは大空の頭よ。行つてくるわね」

「ちょ待てー!おしるこなのか?俺はおしるこなのか!」

叫び声は虚しく青神はさっさといつてしまつた。まあ…この時期におしるこはないだろうから大丈夫…か。

「前々から聞こうと思つてたんだけどさ。前のマラソンの時に大空の家に小さな可愛い子がいたきがするんだけど

…あーうん。いますね。ラーメンおはげがいます。

灯莉が少しでも覚えていてくれたら弁明も楽なんだらう。その灯莉は朱々との記憶を一切持つていない。

「親戚の子とか?でも両親いないのに親戚の子はないか」

樂どころか退路を塞がれたよ!

「兄妹はないだらうな。隠し子…なら俺の情報網にないわけがないしな」

どんな情報網だよ!

こうなつたら逃げ道は一つしかない。

「お前達…見たのか…。俺も時々見るんだ…あれを…」

「ゴクリと生睡を飲む。

「あれは俺にも何か分からぬんだ。妖怪か幽靈か…もしかしたら神様かもしれない。とにかく俺の家に歩く小さな女の子がいるということなんだ」

全員がシラケてた。生睡を飲んだのは自分だけらしい。

「幼女誘拐…まさか昔からの親友がそんなことを」

「てめえと親友になつた記憶もなきや、昔の記憶も存在しねえよ」

「今大空は幼女誘拐を否定しなかつたな?ふふつ。負けだ。白状す

るんだ。俺の情報網に欠けてるところがあるなんて耐えられない

お前のおかげで耐えられない人続出だけだ。

「幼女ね…確かに幼女。でもあれは妖女なんだよ」

「意味分かんない」

「とりあえずあいつはああ見えても結構年を…ってあいつ今何才だ

？」

神様の年齢の基準がまったく分からぬ。

「いくつなの？」

「あー 同い年」

口からでまかせだつた。

「学校は行つてないのか？」

「行つてない」

「一番大事なのは大空との関係じやないの？」

「ああ…拾つた」

「まあそれくらいか。まさか本当に幼女誘拐ではないだろ?しね  
「また紹介してね!」

「おうよ」

「あら?みんなで楽しそうじゃない」

しまつた。青神に聞かれたらひとたまりもない。今までの言い訳  
は泡沫と消えるだろ?う。

「龍美!家に幼女がいる?」

「ん? いないわよ」

「「「え?」「」」

「でもこれくらい小さい子確かに」

「だから言つただろ…見ちゃいけないものを見たつて」

「小さいのはいるわよ」

「え?」

「朱々のことでしょ?幼女なんかじゃないわ。大体神ぞ」

「ストップ!」

「神ぞ?」

「神さ…わつて言つのよ。神沢朱々」

冷や冷やさせんよ。大体神沢つて誰だよ。朱々の名字なんて初めて聞いたぞ。

「で、神沢朱々つてこりのは大空とどんな関係?」「嫌よ」

「青神よ。朱々といつのはどんな関係なんだ?」「そうね…」

「僕が嫌なの!?」

「居候かしら」

一斉に大きな溜め息が聞こえてくる。

「つまらんな」

「守和に楽しんでもらう為にやつてるわけじゃねえよ」

「さて、勉強しますか?」

「青神が飲み物買つてきたんだろ?飲んでからでも良くないか?」

「そうね。飲んでからにしなさい。特に大空には労力が掛かっているのだから」

「労力つてなんだ…よ!?」

「この夏に入つたつていうのに…何故おしるこがあるんだ?」

「さあ、熱いうちに一気に飲みなさい」

「んなことしたら火傷するだろうが!」

「ちつ」

「舌打ち!?」

「さあ、飲んで飲んで」

「飲めるか!」

「飲ませて欲しいのかしら」

「なお危ないわ!」

「勉強はいいのかしら?」「もういい…やうづば…」

「というわけで勉強再開。さつきの下りのせいでの疲労感が半端ねえ。結局勉強は全くはかどらないまま一日は終わっていくのだった。」

そしてテスト前日の日曜日。仕方なく海斗を訪ねることにした。  
あいつならぐだぐだにならずに勉強を教えてくれる。家じゃ朱々が  
いて全くやれねえ。

昔から押し慣れたインターほんを鳴らす。少し高い音が心地よく  
響く。今日は良い感じに勉強が出来そうな気がする。

しかし、それはただそんな気がしただけだった。

家のドアを開けたのは翠髪碧眼のボディースーツを身に纏つた巨乳  
美少女だった。

「…………」  
頭が痛くなる。「こいつは海斗の姉か？いやいや、翠髪碧眼ではな  
かつた。間違いない。染めたのか？いや、染めてもこんな鮮やかな  
翠は出ない。だつたらこいつは…まさかな。

「マスターが中でお待ちです。どうぞ中にお入りください」

「どこの国のメイドさんだ？そもそもマスターってなんだ。  
その分けの分からない少女に連れられるまま、俺は海斗の部屋に  
案内される。

「大空？こりゃしゃーい」

「いや、こりゃしゃーい…じゃねえよーあの翠髪碧眼の女の子はな  
んだ？」

「え？あ――――何で知ってるんだ！？」

「普通に出迎えしてくれたんだが…」

「そのとおりです、このくされマスター」

「ええつと…だね」

「神によつて作られた対神戦最終防衛無機物兵器・玄型です。以後  
お見知りおきを」

一番聞きたくなかったワードが引っかかった。神。

「頭いてえ…」

「無玄わ…また変わったよね？少なくとも最終防衛とかなかつたは  
ず

「記憶にござりません」

「なあ…神つてやつぱり神様だよな？」

「神様は神様だけど？」

「じゃあもしかしてそいつは神様かなんか？」

「いいえ。私は神専用無機物兵器・玄型です」

「なんか赤い彗星の愛機のような名前になつたね…」

「玄…型？玄武…つていやまさかな」

青龍、朱雀、白虎と来て神登場だからといって安直すぎるだろ？

「はい。私は超有機物生命体玄武です」

「トランسفォームしそうな名前だね…って、え？」

「なんですか？その間抜け面で疑問を浮かべるなんて…憎たらしく」

「使い方間違つてるよね？罵倒出来ればいいんだね？」

「てことは…青神の知り合いかよ…」

「青神？まさかあの青神さん？無玄と似たようなの？」

「しまつた！…まあ、こいつなつたらいいんだろうけど」

「青神を青龍と認識。又、マスターの友人から朱雀、白虎と思われる神通力を確認

「なあ…こいつは何をやつてんだ？」

「僕に聞かないでよ…」

「キュピーン。なんとなく悪い人ではなさそつと判断」

「ああそう…。で、俺は勉強を教えてもらひに来たんだが…お前は何をやつてんだ？」

「何つてギヤルゲーを…」

「聞き方を間違えたな。何でゲームをしてんだ？」

「大空如きなら問題ないかと思つて」

「誰が如きだあ！」

「そのとおりです。むしろゴリ虫はマスターであると主張します

「だから、罵倒出来ればいいんだね？」

「無視された…」

「いや、大空も凹まないで」

「さつさと教えるー！」

今日の勉強もまともに進まないようだつた。

急な神登場に結局まともに勉強なんて出来なかつた。つてかあの玄武…無玄か。出るところが出すぎだ。青神も出てると思っていたが上には上がいるりしい。そんなブツを田の前に勉強だと?冗談も大概してくれ。健全な高校生なんだ。仕方ないだろつよ。

ともかくこの調子だと勉強出来ないままテスト突入。挙げ句の果てには赤点。追試。夏休み返上。許されねえ。

ハッピーサマーバケーションを合ひ言葉に白毛で勉強を頑張つてみる。

しかし、神様というのは非情で俺の邪魔ばかりしてくる。家に着けば夕飯の用意。後片付けをして洗濯物。テスト前とは思えない。まあ仕方ないだろう。俺がやらなければキッチンは爆発、もしくは創作ラーメンだけになつてしまふのだから。

これらは仕方なかつた。しかし…

「大空! 今日のラーメンは豚骨でな…」

ラーメン談義は全然仕方なくねえよ。

今ふと思つたが朱々はいつたにビンでラーメン道楽の資金を得てるのだろうか。

「なあ、朱々。いつもお金はどうしてんだよ」

「チャレンジだ」

「はあ?」

「ラーメンチャレンジで食べきつたらお金が貰えるんだ」「なるほど」

「ラーメンチャレンジで思い出した!」

「やつちまつた…」

どうやらラーメン談義はまだまだ終わる気配はない。

知らず知らずのうちに夜は更け、朝になる。

「勉強…してねえ…」

からうじて課題は終わったといつところだがそんなのは実際遅れてもいい。

「夏休みが…」

「大空、独り言しないで起きる。もつ朝だ」

「知ってるよ。ていうか独り言の時点でき起きてるだろ」

「壮大な寝言とばかり」

「んなわけあるか！」

自分のせいにこうなったと気づいていないのか？ていうかあれだけ遅くまで話をしていた眠くないのか？って朱々は小さく見えてても実際は違うのか。神様の年齢事情がよく分からぬといつたところか。しかし青神も朱々も白虎すら答えてくれないからな…。

そんなことを考えている間にも秒針は時を刻み続けていた。つまるところの話テストの点数どころかそれ自体を受けれないと最悪の展開を迎える羽目になる。

「やべ、青神！」

一気にリビングまで駆けながら叫ぶ。

「なに？朝から騒々しい。私は決して矢部青神なんて名前にはなっていないし、今さら勉強なんて無駄よ？」

「いや、そういうことじゃなくてだな。時間を見ろ」

「ええ…いつもならもう家を出て随分経つてるわね」

「お前なら分かるだろ？これがどんな状況なのか」

「そうね…強いて言うなら…遅刻寸前」

「強いて言わなくとも遅刻寸前だ！テストに遅刻なんてしたらそれ

自体受けれないんだぞ？なんでそんなに落ち着いてるんだよ！」

「私にしたら別にテストでどんな点数を取っても大学に進むわけでも就職するわけでもないのよ？だつたら気にする必要なんてないわ

よ」

「おい、これから来る長期休暇が無くなつてもいいのかよ

「そ、それは！？」

「こんなことしてる間にも時は進んでいくところのはなんとも悲しいことだ。

「頼む！また神通力で時間を止めるやつを使ってくれよ…」

「そ、そうね。長期休暇の大空との時間を減らすなんて…。いいわよ。私に捕まりなさい」

「ああ、頼む」

「これで一段落だ。遅刻するなんてことにはならない。

「行くわよ…！」

気づいたら学校の前に着いていた。ただそこはいつもの学校のはずなのに、なぜか違和感を放っていた。

「まあ…気にも仕方ない。青神急ぐぞ。…青神？」

なんでそんなに下に向いているんだ？髪や瞳が青いのはいつもだが肌も青になつてゐるぞ？

「はははっ、やつちやつた…やつちやつたの私…はははっ」

「いや、分かんねえから。何をやつちやつたんだよー！」

不安は募るばかり。

「俺が感じた違和感と関係あるのか？なあ？」

よくよく辺りを見ると校舎がいつもより白く感じれば、入学当初から壊れて止まっていた時計もしつかり動いている。全部が新しくなつたんじゃないかと疑う程に学校が綺麗になつていた。

「はあ…大空、行くわよ」

「行くつてどこに？」

「人がいない所。ここに居たら大空の存在が危ないわ」

「青神さん？いつも以上に発言が電波なのはどうしてなんでしょうか？」

「いいから…行くわよーそうね社でいいかしら。中なら誰も入らないだろうし…」

「一人で進めるのは止めませんか？」

そんな主張は尊重されないまま青神に手を引かれて歩き進んでいく。

たどり着いた先は俺が受験前にお祈りをした神社だった。

「ここは今も昔も変わらないのね…。時が止まっているみたいに」

「あのよ…今も昔つて言ったのか？」

「たどり着いた先は俺が受験前にお祈りをした神社だった。

頭をタイムスリップという言葉が横切る。

「そう言つと少し語弊いがあるわね」

「そうだとも。タイムスリップなんてあつてあまるか」

「今も昔もつて今いる昔が今じやない。なんだかややこしくなるわ  
ね」

「ああ…」

「ここ」で神様…と願うこともあつただろうが、何を隠そう今回のことは神様の所為であつてなんの願いも聞き入れてもらえないだろ？つまりだ…ここは過去の世界なのか？」

「だからそういうって言つてるじゃない」

「一度もはつきりとは言つてないとおもうんだが」

「いいのいいの。それより問題なのは過去の自分に干渉することね」「ていうか何もしちゃいけないんだろ？過去で俺達がちょっとしたことをしてただけで未来が変わるんじゃないのか？」

「はあつ…」

「ため息つ！？」

「あなたバカなの？いえ、間違えたわ。あなたはバカだつたわね」「はいはい、バカですよ。どうせバカですよ！」

「分かりきつたことを連呼しないで。バカに拍車がかかつてゐるわよ。いい？私達は今過去にいます。これはこの先の未来からしたら過去のことになるわよね？」

「ああ…理解出来る」

正直危ないけどな。

「未来からしたら過去の事象。既に起きた事象。これは逆のことも言えるの。分かるかしら」

「ああ！分か…らねえよ…」

「本当にバカね。つまり過去からしたら未来の事象。起きるはずの事象。私達の過ごしてた時間の何年後かの未来は私達がタイムスリップをしたことを含めて決まつていて。それが運命というものなの「えつとだな…。とりあえずこの先ずつとの未来は決まつていて、

俺達はその未来の一部で…ああもう…頭の中が「ちやーちやーだ！」

「それだけ分かれれば十分よ。それ以上理解する必要もないわけだし」

「まあ…それもそうか」

「さつきも言つたけど自分だけは駄目だから。同じ運命が寄り添うことは何があるか分からぬの」

「おかしくないか？出逢つのが運命で、そもそも何があるか分からぬのが運命だろ？」

「まったく…変な所に敏感に反応しないで欲しいわね。そのまま頷いていたら良かつたのに。普通に考えてみて。何があるか分からぬ。言われたら絶対近づかないでしょ？私がそうする」と大空は最悪の運命を辿らないですむのよ

「つまりは今の最悪の運命つていつのも近づかせない為…つてことか？」

「うつ…」

「実際はどうなるんだよ？教えてくれ」

「…どうせ大空は本当のことと言つまで信用しない気よね。仕方ないから教えてあげる。あなたはその時点で存在が消えてしまうの」「また嘘だろ？」

さつきからなんとなくだが分かる。青神が嘘をついてる時、一瞬顔が陰る。氣のせいかもしぬ。俺の思い過ごしかもしれない。

だけど分かるんだ。自分でも不思議な感覚で妙な心地悪さを感じる。「なんて自分勝手な…」

「普段のお前に言つてやれよ。よっぽど自分勝手だ」

「いい？もう嘘はないわよ。大空、あなたは…みんなに忘れられる。それをいくら拒んでもそうなつたら誰も止める事は出来ないの」「忘れられるだけ…か？」

「言い換えると大空は常に存在していなかつた、ということになるわね。あなたはいる。相手もいる。だけどあなたがいくら話しかけても相手は声は聞こえてもあなたは見えない。過去の自分に出会った時点で大空は下位の神様になるの」

「…？神様？」

「そう。神様はみんな私や朱々みたいに見えるわけじゃないのよ。下位の神様だとお告げが出来るだけ。いわゆるところの天の声みたいなものね。声は聞こえるけど見えないというのはそういうこと。私だって幼い時は下位の神様だったのよ？」

「だったら俺は時間が経てば上位の神様になれるんじゃないのか？」「生まれが違うのよ。私達みたいなのは四神と言われる上位の神様。幼い時はただの幻獣でしかないのだけれど。だからこそ成長したら出世出来るの」

「…まあ、自分と会わなければ万事オーケーだろ？大体この時代に俺が生まってるか分からぬわけだしな」

「何を言つてるの？私の今の神通力じゃそう何年も前には戻れないわよ。社の中からなら問題ないのだろうけれどね」

「じゃあ、最悪のケースがあると？」

「当たり前じゃない。じゃなかつたらこんな話はいらないじゃない」「そりやそうか。でもお前は大丈夫なのか？昔の青神はこの社にいるんじゃないのか？」

「んーいるのかしら？小さい頃は両親にいろいろな時代に連れていかれたしね。なんと言つても小さい頃だから覚えがないのよ」

「タイムスリップが自由自在…どんな家族だよ…」

「まあ…それにもいろいろな理由があるみたいよ？私の運命の為に体を成熟させる為らしいんだけど…それなら普通に過ごして一気にその運命の時代に戻ればいいと思うのよ」

「そうだよな。まるで青神が未来の世界に行くのが…」

つまりは俺が今まで過ごしていた時代が青神の運命の時代なのか？成熟していく一番元気な時期。つまりはこの先の未来に青神が成熟しないで進むと大変なことがあつたりするのか？

「ん？大空？どうかしたの？まあ、それに神様っていうのは年をとるのが遅いかから仕方ないのだけれどね」

「そういえば神様って不老不死なのかな？」

「そうね、大体人間と変わらないわよ?」

「は?」

あ、そういうえば青神さんは時々電波だつたな。ははは…。

「言つてることが矛盾だらけじゃねえか!」

「矛盾なんてしてないわよ? ただ力を蓄える時は社に入つてゐるの。そこでなら神通力もすぐに溜まるし、年をとらないの。だから年をとるのが遅いの」

「遅い…そういうことか」

一年経てば普通は年をとる。でも青神は一年を時が止まつた場所にいるわけだ。

「つてじゃあお前は今いくつだよ!」

「あなたと同じよ?」

え、いや、そんな当たり前でしょ? 的な感じで言つなよ。

「いや、だつて最初会つた時は何故か莊厳な話し方だつたぞ? あれはなんだつたんだ?」

「面白いじゃない

いや、だからさ? 当たり前でしょ? 的な感じで言つのを止めないか?

「だつたら朱々は? あいつはあんなに小さいってことは…」

「そうね。同じ年よ」

「そうだよな…つて、なるか! 当たり前のように言つてござねえ! こっちの感覚が間違つてるかと錯覚しちまうわ!」

「いえ、間違つてるの」  
ドーン。  
ドーン。

いや、なに? この効果音?

「待てよ…この流れだと…白虎も同じ年か?」

「そんなわけないじゃない。バカなの…いえ、バカ…デラックスだつたわね」

ドーン。

ここに新しい称号、バカデラックスが生まれた。効果音、会つて

ないぞ。

チーノ。

終わりなのか！？俺はそんな壊滅的なバカだつたのか！？

「さつきから何をしてるの？拳動不審よ？バカデラックスクス▽2に昇格したいの？」

「もういいさ…」

「で、一つ問題があるのだけれど…いいかしら？」

「ああ…言つてくれ…」

俺は今、心の体力の回復をしてるんだ…

「昔の大空が可愛いらしくて今すぐ抱きしめたいの。構わないかしら？」

「ああ…勝手に…するなあああああ！」

「叫んだら来ちゃうわよ？あ、今から出会つておけば大空の深層心理に私という存在が植え付けられるかも…。やっぱり行つてきても…」

…

「いいわけないだろ」

呆れた感じで軽くチョップ。てか、今の俺は危ない状態にいるんじゃないかな？

「そしてもう一つ問題。小さい頃の可愛いらしい私を抱きしめてみたいと思わない？」

「それは問題とは言わねえ…？つてなんじゃそりゃー！」

「前門の虎、後門の狼…とはこのことよ」

「いや、言い切られても」

「やつぱり抱きしめてみたいわよね？私だもの。小さいながらにも気品溢れる姿をしていたら仕方がないわ」

「いや、小さいお前…鼻水たれてるぞ？」

それはもう絵に描いたように鼻水をぶらさげている小さい青神さんが社の前に居た。

「なあ、もしだぞ？小さい青神が社の扉を開けたらやつぱりヤバいのか？」

神様は神様なわけでどうなるか聞いてないからな。

「運命の力がぶつかって…私が今まで変えた運命に関わった人はみんな神様に昇格ね。まだ生きている人だと大空と灯莉くらいね」

俺がここで消えてしまつのはまだ分かる。神頼みして天罰が当たつたみたいなもんだ。でも関係のない灯莉までが消えてしまつ。そんなんのは許せない。いや、許してはいけない。

「青神…やっぱり小さいお前は可愛いかもしねえ。ちょっとくら抱きしめて、でその後遊んでくる。だから…その間暇だろ?…だつたら少し昔の俺と遊んでやつてくれよ」

「仕方ないわね。早く行きなさい」

「サンキュー」

そう言つて社から飛び出していく。

「あなたは何をちてるの?」

態度は今と変わらずか…。ちょっと笑えるな。

「とりあえず鼻水をどうにかしようか、姫?」

「む?立場が分かつていてるぢゃないの。チーーン」

「いや、俺の服で拭くな!」

「うるちやい。姫の言つことは聞きなぢやい」

そう言いながらも再びたれてくる鼻水。なんだ、あれは?鼻の中にスライムでも飼つてるのか?

「じゃあ、姫。俺は今無性に暇なんだけど遊んでくれないか?頼むよ」

「まあ、頼むんなら仕方ないわね。それじゃあ…鬼じつこをちまちよう」

いや、それは危ないだろ。もし青神のいる方に行つたら危なすぎ る。

「だるませんがころんだにしないか?」

「むむ…ちかたないわね。ぢゃああなたが鬼をちて」

「はいはい。姫様」

近くの木に場所を決め、だるませんがころんだ開始。よく考えて

みると、だるまささんがころんだなんて何年ぶりだろうか。小さい頃の記憶なんてほとんど覚えてないし、最後がいつかは分からぬ。でも確かに居たはずの幼い自分は、いつの間にか居なくなっている。そんな気がなんとなくした。

「はじめないのか？」

「あ、ああ、そうだな。だーるさんが」「ころんだ」  
ミー神（今命名）の動きがぴたつと止まる。「いや……

「どうしたらその体勢で止まれるんだよ」

バレエ選手顔負けの爪先立ちと上げられた足。

「ここのくらいには余裕ね」

「じゃ、じゃあ次行くぞ？」

だるまささんがころんだは次第にヒートアップ。ミー神は次々と無茶なポーズをとり続け、最後の方には。

「作りかけのはち！」

ブリッジを片手で行ったりと物理法則をねじ曲げてきた。  
しかし、ミー神は「こいつ」に近寄ってくる気配はない。俺が振り向く度にポーズをとるゲームと勘違いしてゐるのか？  
「姫、ちょっとこいつちおいで。遊び中断だ」

「どうかちたの？」

「いや、だるまささんがころんだのルールは知ってるか？」「鬼が後ろを向いてる間に近付くゲームでちょ？」

「そうだ。でも何で近寄つてこないんだ？」

「だって……終わっちゃうから……終わったら帰っちゃうから」

そうか。俺が帰つたらひとつぼしち。前の青神と同じ。社でひとりなんだ。

「今は……今は」「めんな。もう行かないといけないんだ

「やだ！」

「でもこの後ちょっとだけ待つてくれよ。絶対に楽しくなるからさ。それまで待つてくれるか？」

「……うん、我慢ちゅる」

「それまでに鼻水がたれるのは治せよ?」

「うん!」

「じゃあ、またな」

「またな!」

「元気がいいとこつか…無邪氣といつ言葉が似合ひ。そんな女の子に別れを告げる。

ミニ神にバレないよに社へと戻る。

流石の青神ももう移動をしてるか?と思つていたのだが…

「大空、遅かつたわね」

「いや、俺が遊んでる間に逃げるんじゃねえのか?」

「え? 大空が遊んでる間に私も遊んでいたわよ? それにあの頃の私は社には入らないわよ? 早く大きくなりたかったから」

「あーうん。これはむしろ俺が悪いのか…」

変に格好つけたせいでの言い方が遠まわしになつていていたような気がする。

「つて悪くねえ! 青神が最初っからそつ言つてくれればいいんじゃねえか」

「言おうと思つたら大空がどつしても小さい私と遊びたいって言ったから」

「安全だつて分かつてるとそう聞こえたのか…」

「違つたの?」

「いや、いいんだ。うん、いいんだ。で、このままこじこじていいのか?」

「そうね。じゃあ帰る?」

「あ、いやそんな簡単に帰れるもんなのか?」

「社にいたから力が溜まるのも速いのよ。数ヶ月分なんてあつとう間」

「ならわざと帰る? このままいて消えてしまつても笑えねえ」

「分かつたわ。私に捕まつててね」

そして…自分たちの時代に戻ってきた。戻ってきて思い出した。

「テストだつたな…」

「まあ、頑張りなさい。私は余裕だから見下してあげる」

「さいですか…」

タイムスリップは結局ミニ神に会うとこいつだけ終わった。  
でもこのことも青神の言つ運命の一部だとすると青神の幼い記憶には俺の姿があるのだろうか？

「つて遅刻するつて！」

考へても仕方ない。とりあえず魔王退治にでも行こうか。…レベル上げをもう少ししたかったけどな…。

さつきまで考へていたことはすっかり忘れ、紙に字がかれただけの魔王に挑む。神と紙だけにはじ注意ください。

これは…切実なお願いです。と偶像の神に願う俺だった。

## 慌ただしいのが常（ノースローライフ）

なんとも不思議なタイムスリップをしてから一週間もとい、悪魔のテストから一週間。

次々と返ってくるテスト達に俺は倒れそうになりながら残すは英語だけとなっていた。

ここまで赤点は一切なし。問題はこの英語…所謂イングリッシュ。英語の先生に名前を呼ばれて答案を取りに行く。

緊張は俺の中で最高潮。赤点は29点以下。

受け取った答案の点数の部分を恐る恐る見る。

「キタ――――！」

俺は某掲示板並みに叫んだ。何故って？そりや…俺の点数は30点。

赤点を免れたのだ。そう確信した。ここにちは夏休み。ハロー夏休み。

「大空。大問2の4番採点間違ってるわよ？」

「黙つてろ」

「でも間違つて…」

「黙つてろ。俺の夏休みが消えるんだぞ？」

「んー？はつ…つまりは私と大空との甘酸っぱい時間が減ってしまうの…？」

「甘酸っぱい時間はいらぬけどそうだ」

「ところで大空。採点が間違つているそりじゃないか？どうしたい？」

？」

「守和…友達無くすぞ」

「安心しろ。今すぐには言わない。それでは後々に活用出来ないからな」

「どちらもやめてくれ…」

「先生一大空の採点間違つてまーす」

「くっ、どこの誰だ？俺の赤点を誘うのは…」

教室を見渡す。声の出所は…海斗でねえか。そもそも自分の授業はどうしたんだよ。

「天月、本当なのか？」

「…本当ですよ」

「ほつ…英語教師をなめるんじゃない。じきくさに紛れて”死”といつ単語をいれおつたな」

「ちょ、それは言い掛けりですって！」

「ほらまた！赤点決定！」

「ギャーーーー！」

海斗…絶対殺す。

「でも偉いよ大空君。赤点なのに正直に言つなんて」

「灯莉…」

海斗…ちょっとナイス。

「大…2の4番点数上が…は…よね…」

「青神、ぶつぶつ言つのやめろよ」

「あ、うん、まあいいわよね。甘酸っぱい時間は仕方ないわよね」  
いつもして悪魔のテスト返却は無事には終わらずに俺の夏休みを削ることになつた。

テストの後から夏休みはあつと/or/いう間だつた。なんてことをいつても俺はまだ夏休みではないのだが。これから10日間は学校でみつちり勉強だ。

だといふのに…

「青神！朱々！なんで誰も起こしてくれねえんだよ！」

遅刻しかけていた。ちなみに遅刻は補習一週間追加だ。

それは朝のこと。

「大空ー朝ご飯はまだなのか。お腹空いた」

「んー、ああ作るか…つて今何時だ！？」

「8時」

「後30分じゃねえか！なんで誰も起こしてくれねえんだよ！遅刻

しちまつ「

「今日から夏休みと聞いた」

「俺は違うんだ」

「え……じゃあ、毎日一日中遊んでくれたりはしないのか?」「すまん朱々。夏休みがあつてもそれは無理だ」

その頃青神は寝ていた。

「あ……大空……好きよ……」

朝からなんともこそばゆい寝言であった。

急いで家を飛び出したものの時間はギリギリ。本当にギリギリ。学校の校門前の並木道にさしかかったところだ。

そう、そこにいたのはいつぞやの寝ぼけている女の子。

とは言つても今から声をかける余裕はない。夏休みがさらに減つていくなんてのは許されない。

分かっていた。遅刻は許されることを。

知つていた。声をかけたら遅刻することを。

それでも声をかけていた。

「大丈夫ですかー?」

「…………かつどーん」

今のは寝言か?寝言なのか?有り得ないだろ。すやすや道で眠る女の子がかつどーんって……あつても良さそうだな。

一人納得しつつもう一度声をかける。

「てんどーん」

「…………うなびーん」

「返事!?」

「はつー!つなびんばー!?」

「ねえよ

「あなたは……確か……うなぎ屋さん?」

「会つたこともなければつなぎ屋でもない」

「そう……お休みなさい」

「ちよつと待つて!」

「え…うなどん？」

「いや、違うけど」

「お休みなさい」

「聞きたいことがあるんだ」

「えっと…蒲焼きおかずにつなどんは食べられます」

「つなぎ好きだな…」

「はいー大好きです」

「君はここで何をしているんだ?前にモーニングで黙つてゐるを見たんだが」

「寝てるんです」

「…いいのかそれで」

「あーでも補習があつたよくなーないよくな?」

「あります。自分も今から行くところだ」

「なら、一緒に行きましょうか?私となら…大丈夫です」

「意味が分からん」

とまあ、つなぎ大好きな不思議少女と共に遅刻を伝えに職員室に行くのだった。

しかし、職員室で待っていたのは説教ではなかつた。

「大空…横にいるのは…」

「ああ、朝道で会つて話しかけたやつ。名前は知らん」

どうだこの態度は?遅刻したやつの態度とは思えないだろ?この人も偉くなれるのは横にいるやつのせいらしい。

つなぎ大好きな少女が来るなり教師総立ちで挨拶。そして何故か応接室に連れてかれてソファに座らされている。

「大空、少し別で話をしよう。こっちの応接室にこい」

「は?いや、なんでつて引っ張るな!」

「いいから来い」

引っ張られるまま隣の部屋に行く。

「どこである子と会つた?」

「どこの学校の前の並木道だよ。そこで寝てた」

「ふう…。いいか？あの子はこの学校のオーナーである人の子でも  
だつた子だ」

「オーナー！？」

それで総立ちか。

「いや、でも”だつた”ってなんだよ」

「今あの子は病院の集中治療室にいるんだよ。自動車と事故に遭つ  
てな。なのにあの子を見たという生徒がちらほらと」

「いや、俺は入学式に見たぞ？それに事故で入院中の同級生なんて  
聞いたことがない」

「なんでお前と同級生なんだ？あの子は3つ上だ」

あーぐるっと回つて同じ学年カラーなんですね。

「すんません。勘違いです」

「なんなんだ？あと、お前が謝つて思い出した。白虎は元気か？暇  
なら遊びに来い、と伝えておいてくれ」

「なんで謝つて思い出したんだよ…」

「いや、なんとなく」

引っ張つたいてやりたいところだが必死に右腕を抑えこむ。静ま  
るんだ…。

「今日のお前はいつも以上に拳動不審だな」

「いつも拳動不審じやねえけどよ…ただなんでだつたなんだ？まだ  
死んだわけじやないんだろ？」

「それがな…オーナーが自分の娘の事故を恥と思つたらしくてな。  
それで養子に入れた」

「待てよ、それはおかしいじやねえか。養子に入れる方も受け入れ  
る方も間違つてる」

「まあ正論だな。でも複雑な理由があるんだ」

「複雑な理由？」

「そこはお前が踏み込むところじゃない」

「まあ…そうだろうけどよ」

「というわけだもう戻つていいぞ」

「はいよ…つとやうだ。今自分で一番嫌な可能性を見つけたんだが言つてもいいか？」

「教師に向かつてタメ口じやなければ受け付けるが？」

「この三十路の分際で何を言つのだらうか。

「三十路に罪はないつ！」

「いや、心を読むなよ…。とにかくだな、これは神様の所為じやねえかなつて。こんな」と出来るのはあいつら神様くらいだろ？」「青神に白虎か…」

「まあ…実質あと2人いるんだけどな」

「2人？まあ、その可能性は高いな。それこそ白虎の出番だらう？」「

「ああ、とりあえず聞いてみるだ。で、俺は補習をサボつてるんだが…行つた方がいい？」

「あ、もう今日はいい。明日から」「いや、明日。今日はあの子にも話を聞きたいしな」

心で静かにガツツポーズ。

「…そうだ、明日は一度職員室に寄れ。決定だ」「

「なんでだよ…」

「いいから寄れ。担任の言つ」とはしつかり聞くべきだと思つが？」「

「はいはーい。寄りますとも、寄らせてもらいますとも」「

「分かればいいんだ」

一つだけ言つておくことがある。悪い予感しかしないのはなぜだろう。

そんな予感を抱えたまま翌日の補習は来た。

「でだ、なんでこいつがいるんだ？」

「もちろんお前と一緒に補習を受けるためだ。何分テスト自体を受けてないんだ」

「こいつが補習を受けることには問題ない。なんで俺と2人きりなんだ？」

しかも会議室で。

「もちろん彼女が補習を受けるのにどこかの教室でやるのか？後で問題になつたら大変じゃないか」

「だから！なんで俺も一緒になんだよー。」

「1人だとかわいそつだろ」

「いや、まあそつだらうけど、わざわざ俺がいなくても担任がいいやいいだろ」

「私は彼女の担任でないんだから関係ないだろ？」

「俺はもつと関係ねえ！」

「私は…邪魔ですか？」

「いや…えつと…」

「もしかして嫌われてます？さつきからこいつとか…。なら1人でも…」

「あーもう一分かつたよー。こここいつと補習を受ける…」

「あの…こいつはちょっと嫌だつたり…」

「いや、名前知らねえし」

「天月大空…」

「それは俺だな」

「はい、素敵な名前です」

そう言つてにこりと笑う。む…こうして見ると何気にも可愛いらし  
い顔をしている。青神や灯莉とはまた違つ清楚セト言つのだらうか。

「で、お前の名前」

「私…ですか？」

「もちろん。知らねえからなんて呼べばいいのか分かんねえだろ」

「あ、神無月魅靈かんなづきみれいと申します」

「そつか。なら早速補習とやらを受けるか

「咲子先生が授業を？」

「なんで私が…と言いたいところだが、私しか手が空いてないらし  
い。つたく夏休みに予定なんてありやしないのに」

「担任よ…俺で良かつたら相手になるぜ？」

「黙れ低収入。あ、学生だから無収入か。かといつて将来性も皆無

か。願い下げだな

「言いたい放題だな、おい」

「いや……私が養っていくとして家事全般を任せたなら……。よし天月、  
婿に來い」

「めんどくせえ……」

「せつかく働くのにもつたいない奴だな」

「その裏表のある性格をまずはなんとかしろ」

「クラスからは信頼されるだろ? お前には裏表だ。それでいいじ  
やないか」

「なんで表側がいいんだよ。優しく担任のほうがいいに決まってる  
だろ」

「そ、そつか……ただ、考えてみる。常に裏でいるのはつらいといっ  
かだな? どこかでリラックス出来ると違うと思わないか? その……」  
「だから裏表を無くせつて言つてるだろ。なんで裏表があつて信頼  
されてんだよ。それこそ生徒も裏表かもしけねえだろ」

「いや、そういうことじやないん……」

「とにかく!」

「あの~私は邪魔だつたりするんでしょうか?」

担任はどうか知らないがとてつもなく申し訳ない気持ちだ。てい  
うか気まずいならもつと早く止めろよ。

「なら、始めるか。2人とも教材を出せ

「咲子先生……教材がないです。そもそも貰つてないです」

「そうか、なら天月にもらえ。そいつには教材はもういらぬから  
な」

「どういうことだよ!」

「お前には教材の内容を暗記させるからな」

「いや、えつと……まじ?」

「ああ、大マジだ。毎日やれば出来る。バカはこうでもしないと頭  
は良くならない」

〔冗談にも程があるだろ、と言おうとしたその時。〕

「冗談じゃないからな。私はこれで教員試験を乗り切った

「天月君頑張つてください」

「魅靈…応援しないでくれ…止めてくれ…」

「いきなり、み、魅靈だなんて…こんな人前で…恥ずかしいです」

今時こんな奴が存在していたとは思わなかつた。こいつ程の恥じらいが家にいる2人にあつたら大分違うだろうに。

「こんな時にいちやつくな。本当に覚えさせるぞ?」

「いや、どこが嘘だよ…」

「覚えさせところだ。バカの頭が良くならないのと私の教員試験は本当の話だ」

「つまり担任は本当のバカだつてことか?」

「あー、まあそうだ。悪いか?今はお前とじや月とスッポンだがな

「くそつ」

「悔しかつたら教材の1つや2つ覚えてみろ」

「そんな軽い挑発に乗るバカじやないんでね」

「天月君!…やりましょーー私も手伝いますから!」

「ということだ。嘘から出た実だ。頑張れ天月」

「あーもうー調子が狂う!」

「さて、天月いじめはここまでにして勉強するぞ。補習の意味がなくなるからな」

「私にはいじめてるつもりはないんですけど…」

「なお悪いわ!…と心は叫んでいるものの実際言おうとする疲れきつた体が応えてくれないと「うん」だから驚きだ。魅靈につつこんでいたらキリがない。

「どちらにせよ教材が足りないのは事実。天月は見せてやれ。で、早速だがここ問題…」

さあ、補習だ。担任様のありがたい授業を話半分に聞きながら時は過ぎていく。

気付けば時計の針は12時を回り、外の日差しは高くなつていた。なんていうか…絶対部屋から出たくない。

「さて、今日はここまで。さつさと帰れ。ここで涼もうなんて思つてはいるなら間違いだ。もつ少ししたら職員会議だ。この部屋は使うんだ」

「あ、そう。んーじゃあ嫌だが帰るとしますかね？」

「はい、そうしましょう」

「いや、私がそう言つてたよな？」

なんとなく担任と別れを告げて、灼熱…とまでは言わなくとも炎天下の空の下に出る。

「魅靈はこれからどうするんだ？俺はコンビニに寄つて帰ろうと思つてるんだけど」

「私も着いて行きます」

「そうか。ならアイスの一つくらいなら奢つてやるよ。やつと決まつたら行くか

「着いて行きます！」

「ははは…そか。あ、そういうえばお前つて体がもう一つ病院にあるのか？」

「どうなんでしょう…。自分が病院にいることすら聞いて分かつたくらいですし、実はまったく別人だったりするのかもしれないですね

「別人つて有り得ないだろ。そんな世の中に瓜二つの人がいたら大変じゃねえか」

「それもそうですね。ところでコンビニを通り過ぎたんですけど…」

あ…本当だ。話しているといつもの間にか自分の家の前に着いていた。

「しまったな…とりあえず上がつていくか？アイスくらいならあつたはず」

「それならお言葉に甘えて…？そちらの小さいお方は？天月君の妹さん？」

ドアを開けてこっちをジックと見つめている朱々がいた。

「朱々なにしてんだ？」

「なにも…」

そう言ひつとドアバタンと閉めて家に戻つていぐ。

「まあ、ああいう奴なんだ。氣にするな」

「可愛いらしい妹さんですね。私は一人っ子でしたので羨ましいです」

「いや、あれはなんというか…まあ妹ではないんだが。居候?なんか。ああ見えて俺と同じ年だしな」

「それは失礼でした。まさか同じ年なのに妹なんて…」

「あいつは気にしないつて。それより早く中に入らうぜ?暑くてたまらん」

「そんなに暑いですか?」

「お前…暑くないのか?」

「全然」

一回死にかけると関係なくなるのか?それともこれは病院にいるはずの魅靈がいることと関係あるのか?

「それではお邪魔しま…」

「大空!女を連れ込むとは良い度胸じゃない。私といつものがありながらそれはないんじゃないかしら」

「天月君の許嫁の方ですか?これは失礼しました。私は神無月魅靈と言います」

「あら、この子はなかなかの礼儀を知つてゐるじゃない。それに私と大空の関係をなんて言つた?」

「え、あ…許嫁と」

「い・い・な・ず・け。良い響きじゃない!」

「俺もお前も相手の親も見たことないのになんで許嫁なんてことになつてんだよ。それと、とりあえず挨拶しろ」

「そうね。私は青神龍美。そして私と大空は運命に決められた許嫁なの」

「まあ!なんてロマンティックなんでしょう…」

「そうでしょう?私と大空は結ばれる運命なの」

「お前が運命とか言つと洒落にならないから止めろ」「いうか何で共感出来るねん。魅靈の思考は若干青神寄りの電波氣味らしい。

「大空…私とは遊びだったの？体が田当てだったのか？」

「朱々に限つて体田当てはないだろ」

「む…」

自分の胸に手を当てて「らんなんせー」。そこには不毛の大地が広がつていて。やう平らな平原が見えてくるように…。

「滅殺！」

そう言つと朱々は俺の両手に指を突き立てる。あれ？これって田潰しつてやつでは？

「いじえ！いきなりなにすんだよー！」

「いきなりではない。しつかり合図と共に放つた一撃」

「いきなりの意味が違うだろ。なんで急に田潰しをするんだ、と聞いてる！」

「言葉の重さを感じるべき」

あーそうですか。つまりは答えてもらえそにないよつで。

「なんだか賑やかですねー」

「どうか？どこもこんなもんだろ。」

まあ、確かに騒がしいかもしない。そんな環境に毎日いるから感覚なんて麻痺しまくりなのかもしない。

「そういえば白虎はどこにいるんだ？」

「白虎なら三十路の所に行つたわよ。昨日大空が三十路のことを言つてからずつと楽しみにしてたみたい」

「そんなに楽しみなのか？だったら向こうに住みやいいのに。わざわざいっちに来なくたつていいだろ」「三十路も白虎とずっといたら永遠に独身じゃない」

「それに言つてた。咲子の家には発泡酒も焼酎もある。なぜ大空は酒を買ってこんのじやー、つて」

「いや、未成年だし」

「白虎さん？」

「ああ、白虎。そのうち帰つてくるだろうから気にするな。つてい  
つまで玄関で話してるんだよ。中に入つて」

「あら、大空？私以外の女をこの家にいれるつもり？」  
「待て。それでは私は女じゃないみたいに聞こえるだろ」

「私たち以外の女をこの家にいれるつもり？」

「わざわざ言い直すな。別に灯莉だつたら何も言わないだろ？それ  
と一緒にじゃねえか」

「何を言つてるの？灯莉は私の客でしょ？」

「あーもう面倒くさい。青神の昼飯は抜きでいいか？」

「な、何を…」

「私は問題ない」

「朱々…？」

「業に入つては業に従え。ここは天月君の家ですので私には問題な  
いです」

「しょ、初対面よね？」

「満場一致で昼飯に抜きになるんだが…それでも魅靈が家に上がり  
るのはだめか？」

最初は頑張つたのだろう。悶々としているうちに吹つ切れた感じ  
になり。

「…もう…ならないわよ！勝手に上がりなさい！」

「まあ…でももう昼時か。魅靈は予定あるのか？」

「いえ、なにも」

「じゃあ食つていくか？つていつても何か作れたつけな…」

「お、お構いなく！別に私はそういうわけじゃないのです」

「その時、間抜けなお腹の音が鳴つた。

「腹減つてんじやん」

「大空、今のは私よ」

「紛らわしいわ！」

「冗談に決まつてるじゃない。正真正銘その子よ」

「どうちやねん…」

「さあ、今日のお皿はどのカップ麺にしようかしら」

「本当に自由だな。それに今日は客がいるのにカップ麺はないだろうよ」

その時だ。魅靈の目が怪しく光つた。気がする。

「か、カップ麺があるのですか？」

「あ、ああ…」

青神が鼻歌混じりでもつてきたのはコシのある麺が売りのコシ麺どう? 堂。

「それをくださいー！」

そんなお嫁にぐださいとも言わんばかりに言わなくともいいだろ？

「な、あげないわよ！これは私の大好物。大空にも匹敵する好物なのよ！」

俺への感情つてそんなもんだったんかい。って別に嘆くことでもないか。

「お願ひします！」

「いやよ！」

「別にいいじゃねえか」

そう言つて俺が青神からカップ麺を取り上げる。

「なに…？私の…カップ麺を奪つた…わよね？」

フラツシユバツク。最初のテスト後の出来事が蘇る。既に朱々は飛ぶ準備万端。

「分かつた分かつた！返す！返す！」

「ふふふ…ふふふふふふふふふふふふふ…！」

「あの…それ…欲しいです」

魅靈、諦めてくれ。この辺一帯がクレーターになっちゃうんだ

「クレーター？」

「ああ、クレーター」

「お月様でしょうか…」

…どうしち「ミを入れたものか。

「ああ、お月様は綺麗だ。私も毎日見ている」

「なあ…なんでちょいちょい話が合いつんだ?しかも話がすり変わつてるのにお構いなし」

「月はいい…」

「そうですね…」

「はいはい、そうですか」

「どうやら俺が話すことは聞こえてないらしい。」

「じゃあ飯はカップ麺でいいのか?」

「もちろん!むしろお願ひします」

「さつさと作りなさい」

あのよ…カップ麺くらい自分で作るわぜ?熱湯入れて5分待つことも出来ないのか?

基本的に出来ない、というよつしたくないよつので結局俺がやる羽目に。

ただ、ひとつだけ問題が発生した。今ここに居るのは4人。カップ麺が4つ。普通なら数は合っているはず。なのに数が合わないと言い出す4人。

「足りてるよな…」

「足りてないわよ。むしろあなたの脳みそが足りてないわ」

「大空…前にもいつたけどカップ焼きそばはラーメンではないっ!」

「天月君にはがっかりです」

いや…なんでそこまで言われてるですか?

そう。ここにあるのは「シ麺どう?」堂が2つ。カップ焼きそばが2つ。さらにコシ麺どう?堂をとれば青神がキレるオプション付きだ。

「い、いーじゃん、上手いじゃんカップ焼きそば」

「だから数が足りないの。カップ焼きそばがあと一つ足りないのよ」

「カップ焼きそばはラーメンじゃないだろ!」

「カップラーメン…およよ」

「あーもう一チャーハンだチャーハン。チャーハンを作る。誰がなんて言おうと今日の昼飯はチャーハンだ！」

「却下」

「不可」

「嫌です」

「もうやだ…。

結局俺がコンビニまで買いに行かなければいけなかつたのだった。買つてきたカップ麺の種類は5つ。とんこつ、醤油、塩、味噌、キムチ。それを3つずつ買つていく。とにかくこれで文句を言わることはない。大丈夫どうせ青神が全部食べてくれるだろう。そんなことを思つて帰つてきたはずなのに。

「なんで…誰もいねえんだよ！なんだ？隠れてるのか？」

そう思つて部屋という部屋を探して回つたが誰もいない。

「今までのことが全部夢だつたつてオチなら嬉しいけど…」

残念ながらそうではないようだ。

玄関から青神の笑い声が聞こえてくる。

「美味しかつたわね」

「絶品…」

「でも良かつたんですか？咲子先生に払わせちゃつて」

「問題ない。白虎のおかげで一生お金には困らなくなつたからな」「お金にはな。もつとも恋愛が出来ないからその代わりといつなり安いもんじゃな」

「暑いわ。早く家に入りたいわ…ってドアが開かない

「鍵がかかつてているんだ」

「ていうことは天月君が帰つてきてる？」

「青神…鍵を閉めないつて危ないぞ」

「まあ、なんともないなら大丈夫じゃろう。こら大空…鍵を開けんかいいか？よく聞け。まず俺はお前達の飯を買いに行つてたんだ。なのにてめえら…」

「あ、青いの！なんとかせい！…とつもなく危ない氣が出ておる

「私にも無理ね…。朱々はどうかしら?」

「朱々ちゃんならさつき飛んで窓へ行きました。つてあれ? 飛んで…? 朱々ちゃん飛んでましたよ! -?」

「あー朱いのにはキツく言つておかなければのう。氣にするんでない。運動神経が良すぎて跳躍が飛んでるよう見えたんじやひ

「よ、良かった…」

「おい、大空。さつさと開けないとただじゃすまんぞ」

へつ。何があつても開けるもんか。

そう決意したのも束の間。

「そうか、開けないか。ならお前の成績に1を付けざるを得ないな。残念だが来年も1年生をやるんだな」

「がーっ! いやだーーっ!」

ガチャリ。

「ガチャリ? って朱々! なんだそのしてやつたりって顔は? そのバサインをやめる!」

その時ドアが開いた。

「大空…? よくも私を締め出してくれたわね…」

「いや、そもそもお前達が悪いんであつて…」

「つるさい! 大空が何してるかなんて知らないわよ!」

「そ、そんな…」

俺は決して自分の私利私欲のために動いていたわけじゃなかつたはずだ。むしろみんなの為に働いていたはずじゃなかつたのか? なのにだ。この扱いはなんなんだろうか。

「なあ…」

「喋らないでくれるかしら? 眠が飛ぶの」

「さつきからなんなんだよ! どうしてそんなに俺の扱いが酷いことになつてんだ?」

「そ、それは…」

「青いの。話してもよからう。大空にら知る権利がある」

「いや、そんなに重い理由があるのか?」

「実はね…私の父上と母上が帰つてくるのよ」

「帰つてくるつてどこに居たんだよ」

「知らないわよ未来かもしけない。過去かも。もしかしたら現代の遠くかもね」

「それでなんで俺への扱いが酷くなるんだ?」

「単なるハツ当たりだ」

「朱々!黙つてなさい!」

「そういうわけだ。多少は多田に見てやつてくれ

「多目に見るも何も、親が帰つてくるとハツ当たりしたくなるもんなのか?」

「考えてもみる。願いを叶えるでもなく、だらだらと主の元にいるんじゃぞ?もしかしたら無理やり連れて帰るかもしねん」

「ねえ…大空…止めてくれるわよね?この家に居させてくれるって言つたわよね?」

「あ、主?願いですか?」

「ハツちの話だ。気にしなくていい」

「そうだな。すまん、魅靈。今日はひとまず帰つてもらえるか?」

「大空、それについて私から話がある。この子の体は病院にあるんだ。つまりこの子を養子に受け入れた家庭はこっちのこの子のことを知らないわけだ。まあ…ぶっちゃけた話、この子には帰る家がない」

「まで。その先は言うな」

「お前の家にこの子を預けるから」

「既に決定事項!?」

「まさか大空…私がいなくなつた穴をその子で埋める気?」

「そんなことひとことも言つてなかつたよな…」

「まあ、そういうことだ。後はよろしくやつてくれ」

「いや、だから待て」

「また遊びにくる。次は白虎に酒でも持つてくれるぞ」

「楽しみにしておる」

「だから勝手に別れを…」

その時には既に担任の姿はなくなっていた。

「で…当面の問題が増えまくってるわけだが…」

「そうね。とにかく私の両親は明後日に帰つてくるわ

「また急だな」

「この前のタイムスリップと何か関係があるのだろうか。

「多分、いえ、間違いなく私の両親がこの現状を見たら私をここに居させないわね」

「それはまあなんともおつかない両親だな」

「いや、私の記憶じゃとそんなに聞き分けのないような人物ではなかつたはずだがのう」

「そんなわけない！あの父上に母上…ああ！恐ろしいわ！」

「どつちなんだ？対応の仕方に困るじゃねえか

「多分…青神にとつていい記憶がないんだと思つぞ」

「どういふことだ？」

「そのまんまだ。両親と居て楽しい記憶がない。だからこつして怯えている」

「そういえば昔はいろんな時代を飛び回つてたんだつたけ。そういうのが関係あるのか？」

「はああああ…恐ろしい…なんで今帰つてくるの…」

「当の本人がこんななんじや何も分かんねえよ」

「あの…もしかしたら私は邪魔でしうか？」

「そうだ。白虎。魅靈の話は聞いたか？」

「さつき咲子に聞いたが…普通に考えたら起きない出来事じやのう。しかし、今回の場合は人を蘇生するのに近いような現象じやしな。並み大抵な神通力で出来るようなもんでもないしのう。中でも一番は分からるのは彼女が何も知らないことじやのう」

「普通は知つてるのか？」

「普通も何も誰かが願いを込めたのなら多少のコモニケーションはとるじやう。かといって他の神がこの魅靈といつ子を生き返ら

せる意味もない、ということじや

「じゃあどうするんだよ」

「儂が聞きたいくらいじや。それに大空はこの子をどうしたいのだ

？」

そうだ。もし田の前にいる魅靈が消えたなら元通りだ。それでは魅靈が、俺の前で首を傾げている魅靈が不憫すぎる。誰かに生み出されて勝手に消されるなんて許されるはずがない。

ならどうする？いくら考えてみても答えは見つからない。それは答えが魅靈が消える、その一択しかないようと思えた。

って俺がこんな考え方してたらダメじやねえか。大丈夫。なんとかなる。今はこれしか言えない。

「魅靈。お前は…いつたい何のためにいるんだ？」

「私ですか？何ででしょ？哲学的です…」

「まあ…いいか。ただこの世界にはお前が2人居るわけだろ？どっちが本物なんだ？いや、どっちも本物なのか？」

「分からぬです。でも私は今ここに居て、天月君といふといふ」とだけは分かります」

「大空、少なくともこの子は本物だ。神通力で出来た仮の姿なら分かるから」

「向こうは事故からそのまま…ならどちらも本物。…」りやもう一人の魅靈の目が覚めるのを待つのがいいのか？」

「三十路に聞いた話じや三年眠つてゐるのよね？だつたら待つてもどれだけかかるか分からぬじやない」

「だからといつて出来るることもないんだよ」

「だつたらいいじやない。向こうにもこの子が居て、こつちにもこの子が居る。問題ないんじやないかしら？」

「ははっ、それもそうだな」

「また家がうるさくなる…」

「いや、朱々からしたらまたじやねえだろ。とりあえず魅靈もそんなんでいいか？」

「はい。私はなんでも」

めっちゃ良い子だ… 青神も朱々も白虎も見習つて欲しい。

その時、家のインターホンの音が鳴った。

「ちょっと出てくる」

「待つて！」

「青神？」

「父上と母上… もつ…」

まさかもう来たのか？いくらなんでも早すぎる。

俺からすれば大した問題ではない。だが… 少なくとも青神の両親は家に上がるだろ。しかしだ。現在天月家の状況は酷いもので部屋は散らかりまくりになっている。他人様に上がつてもううには失礼極まりない状況である。

「朱々！部屋を片付ける！」

……。

「朱々様！部屋を片付けてくださいまし」

「仕方ないな」

「青神は来い。多少は時間稼ぎをするが」

「父上… 母上…」

「こいつは大丈夫か？最早生きてるのかどうかも不安になるようなほどだ。」

「というか時間稼ぎにこいつを使つても何にもならぬような気がする。かといって他に頼れそなのは…」

「白虎。きみに決めた！」

「はあ？」

「いや、だからきみに決めたって」

「何をじや？」

「部屋が片付くまで青神の親の引き止め

「なんで儂が？」

「なんでそんなに乗り気じやねえんだよ。青神は使い物にならねえし、青神の親見たことあるのはお前ぐらいだろ？」「？」

「普通にめんべいをだつたんじやが…。それに青いのの両親ならお主でも分かるとは思ひうんじやよ」

「あ…」

青神の親。ところ、「う」とは青髪蒼眼。明らかに浮き世離れした2人が歩いてるに違いない。

「ど、どうにしてもお前がいたほうがなにかと助かるんだって」「仕方ないのう…」

「朱々と青神は片付けを頼んだぞ!」

朱々は敬礼で分かつたと言つてこるようだつたが青神はもうだめといつた格好で野垂れ死んでいた。

「…白虎いぐぞ」

「ふう、分かつてある」

靴を履き、ドアを開け、外へ出る。「うん。」これまでよかつたんだが…。

青髪蒼眼の男女がそこにはいた。男の方は髭をしつかりと蓄えてつて髭も青かよ。とにかく年寄りに見える。女の方もそれなりの年に見えたが、それを差し引いても綺麗だつた。目元なんかは青神にそつくり…。間違いなく青神の両親です。

「あ、あああの? どちらさまでしようか?」

「噉んだあ! 僕、今噉んだ!」

「うふふ、青神と申します。実は今日、娘に会う約束をしていまして」

「娘、さんですか?」

「はい、娘の龍美はいらっしゃいますか?」

「あ、はい龍美さん。うん、きっといるんじゃないかな? うんうん。」  
いふと思ひます。ちょっと見てきます。少々お待ちください」

白虎に後は頼んだと小さく囁く。

「つたく…。それにしても久しいのう。蒼龍、お主はそんなに髭を生やすよになつたのか? 暑苦しくてかなわんわ」

「ああ… 髭か。久しく剃つてないな。そんな暇も無いほど忙しく

つてな

「それにしてお田鹿様がここにいらっしゃるとは思にもよづまへんでした」

「こうこうあつてのひ。まあ、それなりに楽しんでおる」「それは良きことで。つまりはここには2人の神が仕えてるんですけどの? といふことは2人も器がいらっしゃる…。これはなんといふ通り合わせ。ええと西洋の言葉で…、リラ ケーともむづつのでしょうか?」

「器とな? はて、なんのこじじや?」

「今回はそのことで来たのだ。龍宮にも話せなければならぬのであります」とだ。どうせなら同時に話そつ

「そうこうことなら暫し待つとしようつかの。ただその器。多分1人しかおらん」

「ふむ。どうこうことだ?」

「青いのもいる所で話したい。先ほど話せば話せりではないか」

「そうか。ならばあらわくそあらに失礼をせてもうござない立ち話になつてすまんのひ。中に青いのもこるだらひ。わあ中く」

「ちょい待ち!」

「ふむ、先程の少年。どうかしたのか?」

「いや、なんと言こますか…少し田を離したら…青神が逃げ出してしまつて…」

「まつたく…青いの…」

「そうか。問題ない。3分あれば連れ戻そつ。龍宮よ。少し離れてもらえるか

「はい。ではお願ひします」

「では失礼して」

軽く頭を下げるとき青神父は消えた。といふか消えた。なんといふか消えたとしか言えない。何が起きたか全く分からぬ。そう思つていたが、あることを思いだす。前に遅刻しそうだった時に青神が

使つたやつだ。青神の親なら難なく使えるんだね。」

3分も経つてないんじやないかといつうすに青神を腰に抱えて戻つてきた。

「青神、何がそんなに嫌なんだよ」

「う一つ」

「う一つてなんだよ」

「む一つ」

「いやだからなんだよ」

「逃げれないわね…。大空? 今から私の父上と戦つてその間に逃げろ! 的なかつこいい役をやりたくはないかしら?」

「絶対やんねえよ」

「すまないが少年。中に失礼してもいいか?」

「ああ…多分。朱々が綺麗にしてくれてるはずだから…」

元々夏休み前は朱々が家の掃除やら洗濯やらはやっていた。ただそれじゃあんまりだということで夏休み中は俺がやると言ったにも関わらず、補習やらで何も出来なかつたから散らかつっていたわけで。実際朱々にやらせれば完璧に終わるはず。

「それではお邪魔します」

「ど、どうぞ」

青神は抱えられたままなんだな。写メに撮つておきたいくらいに笑える。

もしここでパシャリとかしたら駄目なんだろうと分かつていてもしたくなるのは仕方ないと思う。

家の中は俺が思つていてる以上に片付いており、これは朱々にラーメンを奢らければならないと思わせるくらいに綺麗になつていた。「ど、どうぞそちらにお座りください…」

「ああ、すまない。よつこらせつと。でだ、白虎よ。先程の話の続きだ。まず何故私たちが来ることになつたかだが…まず龍美。お前の様子を見にきたことが一つだ」

まあ…親なら当たり前のことなんだろう。息子を置いて世界一周

に行く親もいるが。

「次が大切なんだが…龍美よ、どうしてお前の神通力を溜めることよりも成長を促したか覚えているか？」

「ええとですね？私的にはうろ覚えなのですが…確かに来るべき時が…なんとか…」

「…ある程度予想はしていた。きちんと話をしたはずだつたんだがな。まあ、器の子にも話をするつもりだつたから良いだろう。器は君かい？他の器は今は？」

「あ、そちらが言う器が何か分からぬけど多分そうつす」

「あんまり堅くななくともいい。だいたい今はこっちが客なんだ。そっちがオドオドする必要もないだろう？」

「確かにそうなんっすけど」

「それにそんな話し方もしなくていい。もっとフランクでいいからそう言われてもな…。」

「器が分からぬとおっしゃいましたね？簡単に言つてしまえば神に選ばれた人間、ということになりますね。ここには一見して3人の神がいますので少なくとも3人は器がいらっしゃるのではないかしら？」

「それがのう…青も朱も儂も大空…この男1人に仕えているんじや」

「ほう…興味深いな」

「なんか悪いことしたか…？特に心当たりはないのだが、白虎が何故か俺の名を呼び、謝り続けている。

「困っているようだから言つておこう。普通神様つていうのは1人に対しても1人。マンツーマンで関係が成立する。その常識を軽く越えるどころか大きく越えて3人と一緒にいるというのはすごいことなんだ」

「ま、まあ…いろいろあつたんだけどさ、青神以外は元々他の人のところにいたんだ」

「…」の場でうちの娘を青神、と呼ぶのは相応しくないと思わないか？」

青神×3。これはなんとも言えない状況ではある。

「そう…だな。龍美以外は他のところにいた」

「それでいい」

「はうっ…！もう一度言つて…お願ひ！」

あの…お宅の娘さん名前を呼ばれて身悶えてますよーって気にしないんですね。

「気持ち悪い反応するな。一度と呼ばねえぞ」

「はうっ、龍美…名前…初めてよ・ば・れ・た」

「だあっ！気色悪い！」

「まあまあ落ち着いてくれ。君の緊張が大分解ってきたのは非常に

嬉しいが、話が逸れるのは困るからね」

「そ、そうだな。朱々…朱雀は元々同級生の女子のところにいたんだが…色々あつてそいつが神様に関係することを全部忘れた。それを願つた。で、何故か俺の家に居候」

「違うぞ。大空が自分で来いつて言つた」

「そうだったか？で、白虎は願い主のところに行つたのはいいけどそいつの願いがどうしても叶わないでの逃亡だつけ？」

「もつと言ひ方があるじやろうが…まあそうじやのう」

「というわけだ。だつたら最初のところにいたのが器になるんじやないのか？」

「そう思うだろう？でも違う。それはね、運命がその人物を器とするのを拒んだんだ。そして運命は君を器に選んだ。これだけの神、しかも四神の三角に選ばれるなんて素晴らしい器だ。そうだろ、竜宮？」

「そのとおりですわ」

「不思議だ…四神はどれも違つた運命を司り、どれも違つた属性を持つ。その能力が適合する場所を求めるのが神という存在だ。ならば君は私たち神にとつて安らげる何かのかも知れないな」

「あの…話が飛躍しそぎじゃないか？」

「そんなことはない。現に四神のうち三人がここにいる。直に玄武

も来るのはないかと疑つてしまつくらいだ」

「玄武？ そうだ、友達のところに玄武がいたはずだ」

「なに？ それはおもしろくないな。四神が仕える器。この先に起ることも1人で受け入れてくれると思つたんだが…」

その時だ。何故かチャイムというかなんというか、ピンポーンとかいう音が鳴つた。

まさかとは思う。しかもこの青神の親父さんの発言の後だ。あの海斗が来てもおかしくないと思えた。

俺が扉を開いた先に見たのは…翠髪碧眼。あれ、なんかデジヤヴ？

「あの脳みその腐りきったファッキンマスターに愛想を尽かしました。おじやまします」

「あ、どうやってなるか…」

「…ちりり」

「…

「…ひひひひひ」

「…

「ボディースーツの一部をめくつたら私の思い通りに動くと思つたのは計算ミス。再演算開始… ぴぴっ、演算完了。結果、私にはまだ恥じらいと萌えが足りなかつたと判明。直ちに実行に移ります。データベースと照合した結果最も最適な服装を形成します」

ぴちっとしたボディースーツが光に包まれる。いつたいどんな変化が…。

「完了しました」

「つて穴が開いただけかよ！ しかし… これはこれで… 宮能的というか…」

「では、おじやまします」

「いや、なんでもうなる」

「官能的といふ発言を自己処理した結果…」

「自己処理…？ それは都合の良い方に変えただけだよな…？」

「失敗。次のステップへと移行します」

「今度はなんだ？」

さつきと同じように光に包まる。

何が来てもこれ以上の厄介事は避けたい。だが俺の予想の遙か上を超えた。

光に包まれたのにも関わらず服装は同じ穴だらけボディースーツ。変わったのは本人の格好だった。

顔を赤らめ、もじもじしながらあひる座り。そしてトドメのセリフ。

「お兄ちゃん…大人しくしてるから……………いれで」

ヤバいなんかキタ。なんだよその猫なで声は。なんというか最後の言葉に間をとつたのも意図的なのか？ヤバい興奮してき…

「大空…あなたにしてるのかしら…？」

「あ、青神…」

「龍美」

「龍美…」

「なんで名前で呼んでるの？汚らわしい」

「いや、これはだな…」

「お兄ちゃんにこうしろって言われたの…」

「妹！？妹がいたの？しかもこんなプレイを要求するなんて…。それなら私が…」

「いや、それとこれでは需要が違う、だろ？少年よ」

「青神の親父さん…話が分かるって違う！確かにそうだけど違うんだ！」

「全く面白いことになるものです。あの脳みそ腐りきつて……………が

で……………な糞マスターとは大違いです」

なんでこいつは喋りながら自分でピーって音を鳴らしてるのかが不思議でならない。

ただ海斗は最低、という部分は嫌という程伝わった。

「とまあ、いろいろな事情はぶっちゃけ面倒くさいのでしばらく無期限お邪魔します」

「ああ、超邪魔だな！」

「はつはつはつ！なんだか自分の思惑通りに事が進むと楽しいなあ

「角川アーツ文庫」

「……ちとしては悪い意味で思つた通りで止めて欲しいです」といふか神通力使ってたりしません?」

「この青神の親父さんが運命を無理やり変えてもおかしくはない。」

さすかに神の運命は変えられないんだ！」

「とまあ… 四神が同じ場所に集うとは思いもしなかった。これは確

か：何千年ぶりだ？」

「あ、それ

「」の親父さんなんか適当じゃねえか？さつきから時々変な挙動が入るし。

「ともかく今後の由々しき事態を目前にするにしても」のメンバー

がいるならどうともなるというものだ。龍美がいなくてもね」

つてゐる

「むう…どう話したものか…とりあえず大きな規模の災厄がやつて

くる。どんな形なのかは私たちにも分からぬ。自然災害か...隕石衝突、第3次世界大戦か...ひまな! たゞそひざの大きび出来事

を止めるとこいとは少なからず誰かが無理をしなくてはならない

「つまり俺が全員の災厄とやらを？」

「そんなことにはならないよ、頑張つてはもうけれど。少年には溢れかえつた運命を受け止めてもらう。たくさんの人起きるはずだつた運命、その行き先を失つた運命を君が受け止める。それについては特段技術が必要なわけじゃない。基本は神に任せればいい」「まあ、ならいいんだけど。それで龍美がいなくてもつていうのは

「おや、せつ氣なく言つたんだがバレたか。どちらかといえば本題

かもしだれない。今まで来るべき未来の為に龍美の神通力を貯めてきたつもりだつたんだが…少ない。だからまた少し社に戻つてもらおうと思つてね。これだけの神がいれば問題ないだろ?」

「父上…それは…」

「いくら親でもな…勝手過ぎるだろ!そこまで青神…龍美がしないと駄目なのかよ!」

また1人…暗い社に閉じこもつて誰とも会わずにいるなんて許さねえ。青神はここにいればいいんだ。

「そうか…君の言い分はよく分かるし、龍美の気持ちも痛いほど分かる。少なからず自分も通つてきた道だからね。だが少年よ。もし自分が未来に行けたとして…未来に見えたのが絶望だつたらどうする?」

「絶望?それが関係何かあるのか?」

「もちろん。絶望を見た君が過去に戻つてアクションを起させたらどうする?」

「アクションを起こす。だとしてもその未来はアクションを起こすことも含めて成り立つていてんじやねえのか?」

「どうやらこいつの時間軸事情を知つてているみたいだね。ただ君の起こすアクションが過去で何かをするんじやない、とすれば問題ない」

「具体的には?それが青神じゃないと駄目な理由もだ」

「青神…龍美じやないと伝わらないと言つただろう?具体的だつたな。それは歴史を一度消してしまつといふことだ。ただそれには生半可な神通力では足りない。だから最も神通力の器が大きい神を探した。そこで…皮肉なことに白羽の矢が自分の娘に当たつたのさ」

俺はひとつ勘違いをしていたらしい。それは青神にこの役目をさせるのが嫌なのは両親だつて同じだつたんだ。親身勝手じやない。出来るのが青神しかいなかつたんだ。

「じゃあ…龍美以外の神に手伝つてもらえたりは出来たりしないのか?」

「それも考えた。しかし、駄目だつた。乾電池の並列繋ぎと直列繋

ぎを知つてゐるかい？並列繋ぎだと長持ちする。変わりに電流は下がつてしまつ。直列繋ぎにすると強い電流を放つ。変わりに消耗が早くなつてしまつ。神通力も同じことなんだ」

「なら、神通力を青神に集めるとかだったら出来るだろ」

「…神には属性なるものがあつてね。簡単に言えば火の神なら火。水の神なら水の属性。同じ属性というのはほとんどないのだよ。神の数だけ属性が存在する。だからこそ神が同じ器に仕えることなんて…？そうか、そうだな！」

「父上？」

「あ、青神生きてたのか」

「今そういうことを言うタイミングじゃないわよ」

「あまりにもみんな話さねえからいなくなつたのかと」

朱々とかは本当にいなくなつてそうだしな。と、朱々を探してみると青神の母親に膝枕してもらつて寝ていた。初対面でよく出来るな…つて一応同じ年だよな？

「…いいかな、少年？」

「すみません」

本当に申し訳なかつた。

「そういう意味じやないんだ。君なら出来るんだ。4人の四神が仕える君なら」

「えつと？」

「君に神通力を送るんだ。そうすれば多分…君の中で属性が消える。純粹な神通力の形となるんだ。それなら龍美に集めるのに抵抗はないはずだ」

「だいたい分かつた。とりあえず龍美はここに居ていいんだよな？」

「そう、問題は解決した。…はずだつた。

「それとこれは話が別。年頃の女の子を男と同居？許されないんだよ少年！いいか？龍美は私と結婚するんだ！娘は私の元からは絶対に出さない！」

ドラマで見るよつたな展開が待っていた。しかも昭和のドラマ感が漂つている。いや、平成生まれだから知らないけど。

「父上…私はここにいます」

「龍美い！お父さんを見放すというのか？小さい頃はあんなにも私のことを…。もういい！そんな不良娘は知らん！」

「あらあら…そんなことを言つていると…」

穏やかに話していた青神母だったはずなんだ。なのに。

「怒りますよ？」

威圧感が半端ではなかつた。といふか正直震えてしまつたくらいだつた。

多分男にしか伝わらないような威圧感。証拠に震えているのは俺と親父さんだけだつた。

その後親父さんは拗ねていたようだつたが何か言つことはなかつた。

「で…災厄はいつ対処しなくちゃいけないんだ？」

「まあ…時がくれば分かる。むしろ時が来なければ分からぬことだ」

「なら今日来た意味は果たせたのか？」

そしていつ頃帰るんだ？ぶぶ漬け食つていくか？

「大体な。しかし、一番の目的は娘と会うことだ。果たされたといえば果たされたが…娘との再会がこんな辛氣臭い話をして終わり、なんてのは勘弁して欲しいものだな」

「勘弁…してくれ…」

外の景色も暗くなつてきていた。今日から居候が増える、いや増えてしまつのに青神の両親も泊まつていくとなつたら大所帯もいいところだ。

「大丈夫だ。私たちは近くにホテルを借りてるし、今日明日くらいは龍美がこつちに来れば問題ないだろ？それにしばらくは夏休みなのだろ？丁度いいじゃないか」

確かに…それに親子団欒を邪魔したいわけじゃない。

「よし、十分に親孝行してこよー!」

「いや

「そうだよな。久しぶりに会えたんだから話したいこともたくさんつて、なんですか?」「いや、つて言つたの。あなたは耳まで腐つきつてしまつたのかもしれません?」

「いや、つて言つたの。あなたは耳まで腐つきつてしまつたのかしら?」

「普通行くだろ!」

「行かないわよ。私が大空から離れてる間に先を越されたらまつたものじゃないわ」

「そういう問題じゃねえだら。ていうか見る、親父さんマジ泣きしだるぞ」

「知らないわよ。大体どの面下げで…」

「そうか、龍美…そんなに少年の前で昔のことを話して欲しいか…」

「あ、それはちょっと…」

「そうだな、まずは五歳の時からこいつか。あれは…縄文時代に行つた時か

「私…なにかしたかしら…」

「勝手に一人で森に入つていってな…」

「あーつだめ!だめ!だめよ!行くわー!私今からホテルに行くわよ!

!」

「やつと分かつてくれたか、娘よ!」

「母上、一緒に別の部屋を借りるわけにはいきませんか?」

「そうね、卑劣な手段を使うような人と同じ部屋は嫌よね。なんなら別のホテルで部屋を借りましょ!」

「早速準備します」

「急がなくてもいいわよ?」

「お父さん…寂しくて死んじゃつぞ…」

「さて、夕食の準備をするか?買い出しに行く時間はないし…何かあつたか?」

親父さんに構つてたら時間がいくらあつても足りない。

「確か…野菜とお肉が少しあつたはず」

そう思つた時台所から不気味な匂いがした。それは香辛料が効いているよつで甘つたるく、かといつて軽い酸味が後をつくような匂い。

恐る恐る龍美様をルック。しかし、料理をしている様子はない、といつかあれば料理か？

よくよく見てみれば姿が見えないのは魅靈の姿だった。

まさか…な。なんだかんだけで料理とか出来そうな気が…しただけだな。今この場を見る限り奴しかいねえ。

慎重に慎重を重ねて台所を覗きこむ。おっと今時だからな、キッチンと呼ばうか。

どうやらこの匂いは頭を直接刺激してゐよつだ。思考回路がぐつちやらぐちやぐぢやだ。もう自分が何を言つてゐるかも分からぬ。

「魅靈…それはなんだ？」

俺の質問は的確だつたはず。そのフライパンの上に乗つてゐる何かの正体を尋ねたはずだ。なのに、

「料理です」

料理と言いやがつた。あれが人の食い物だと?笑止!

その何かが料理というなら龍美の方がよっぽどそれらしく思える。爆発して真つ黒だが、失敗して黒くなつたといつことは分かるからだ。ただ…それは何を調合したんだ?

「はつ…まさか災いはこのことか!」

「そんなわけあるかいな!」

後ろから無玄にハリセンでツツ「まれた。

「なぜ関西弁!?」

「ハリセンがあつたからに決まつてます」

「知らねーよ!ハリセン買つた覚えもねえよ!」

「私が持つて来たのだから当然でしょう?」

なぜ当たり前のようにそれを言うのか。

「まあいいや、丁度良い。無玄ならあの料理（仮）もしくは料理と

「いつの何かを分析出来るだろ?」

「あなたは馬鹿ですか? 紛れもなく料理ではないことは一目瞭然、

百花繚乱

「わお、咲き乱れたよ。

豪華絢爛

煌びやかだな!

「いや…料理じゃないことは分かつてゐるんだが、これが本当は何なのかが気になるんだ」

「…仕方ありません。スキヤン開始。対象物質の構造を読み取り中」  
「おお、無玄の目から光が出ている。ただこいつは本当に機械なんだろうか。神で機械つておかしくないか?まあ…こいつらの存在にツツコんでいたら埒が明かないか。

「読み取り完了。スキヤン結果から申しますと、スプーン二杯で癌になり、五杯でもれなく天国…いえ、地獄に行けます。…?地獄に落とされます」

「そんな代物がここに!?」

「私そんなもの作つてません!これは料理です!」

「じゃあなんだ? 材料を言つてみる。冷蔵庫を見る限り家の食材は使つてないみたいだし」

「企業秘密です」

そつと人差し指を唇に添えればほら可愛い…

「違う、違う! それは言わないんじゃなくて言えないんだろうが!」

「そんなことはありませんよ。ちょっとは料理から想像するとかないんですか?」

「(+)から何を想像しろと? むしろ地獄が創造されてんじゃねえか!

「そんなものを創つたらみんな地獄の空氣に触れて死んでしまいます」

「死ぬんだよ! こいつを食つたら死ぬんだよ!」

「ひどいです! そこまで言うなんて」

「本当に大空は甲斐性がないわよの。女の子の手料理は有無を言わず食べるべきよ」

「まだいたのか？」

鈍い音が響いた。といつが殴られた。今のはダメですね、分かれます。言つた瞬間にやつちやつたつて思つたからな。

「だが、食つたら死ぬような代物だぞ？」

「分析結果から言つと…スプーン一杯なら余裕、といつかもつ一杯くらい食べてみてくださいよ、ニユーマスター」

「いや、でも…」

「さつさと食わんかわれえ…どたま撃ち抜くぞ糞マスター」

「とうとう故障しだしたか。変な言葉を喋つたぜ？」

「元々機械でも何でもない神なのでそりや口調なんていつでも変えられるのです糞マスター」

糞部分が定冠詞みたいになつてきた。いや、そう思つと仮分が軽

くなつて…こない。やつぱり心に響く。

「ていうかお前は機械じやないんだな」

「は？こんな高性能でハイクオリティーな機械があるはずないです

よ」

「すよう、つて言つたな？言つたよな？しかも意味が重複してゐるから

「それだけ高性能な機械なのです。ドジ機能付」

アーコー オー ケー？とでも言つたげな顔でこひらに腕を突き出し

親指を立てる。

とりあえず親指をあらぬ方向に曲げておく。

「折れてしまうやろー！」

「そんなどつかの芸人のネタみたいに言つなよー」

「そろそろ私の料理を食べてくれませんか？」

「あ、やつぱり？」

この後の出来事は恐ろしすぎて話すのも躊躇われるため一言だけで表そうじゃないか。

死にかけた。

これほど十分な表現は他に見つからない。

ああ、大切なことを忘れていた。

スタッフが後でおいしく頂きました。

ツツコミたいことは幾つかあるが、言つとかなければいけないからな。

だいたい今ここはどこか？それはだな、絶賛臨死体験中だ。だからこそ別次元であるところに話しかけているのだろう。

ぶっちゃけた話をしようじゃないか。

スプーン一杯から記憶がないんだ。話すのも躊躇われる以前に記憶がないから話せない。あの一言はもちろん現状を見れば分かるだろ？

なんて臨死体験のぶっちゃけ相談会を開いている間に龍美の声が聞こえてくる。こういうのはその声が聞こえるままにしないと駄目なんだよな。ぶっちゃけた話。お、ぶっちゃけ相談会はまだ続いたみたいだ。

この臨死体験もおしまい、というわけだ。次の相談会はぶっちゃけ死んだ時だろうな。それまで楽しみ待つてくれ。

「まだ起きない…蹴つていいか？」

「朱いの少し待て」

「そうよ、起きてから蹴りなさい」

「それはちょっと違うんじゃないかと思うんですけど…」

「データ収集完了。スプーンもう一杯で蘇生

「誰が喰うか…！」

アブねえ。もう一杯喰つたらマジで死ぬぞ。それだけの殺傷能力をヤツは持っている。

スタッフはまだ頂いていないようだ。

「魅靈はキッチンに一度と入るな。ついでに龍美もだ…ってなんでニヤニヤしてんだ？」

「いやー？もう龍美なんだ？恋人なんだ？」

「それなら俺はここにいる全員と恋人だな」  
青神以外はみんな名前で呼んでいる、といつ意味だ。そつだつた  
はず

「ここにいる全員…? ま、まあ…私が一番ならいいけど…」

「おい、誰かこいつを止めてくれ」

おもむろに無玄の目が光り出す。

「レーザー出力上昇中… 50… 60… 75%まで上昇」

「そんな止め方するな!」

「うふふふ? 私は… 大空の一一番の… 恋人… ふふつ」

「止めてくれえええ!」

悲痛な叫びが天月家に響き渡った。

「…ふう、龍美はやつと行つたか」

あの後、青神夫妻がなんとか龍美を止めて連れて行つてくれた。  
そして夕飯は無難にカレーとなつた。というよりもそれくらいしか作れなかつたというのが眞実。

「つ、疲れた…」

「私がいなければ疲れは倍だつたのでしよう」「なんでだよ…」

「私は常にマイナスイオンを発しますので」

「どこぞの空気清浄機か! ?」

「うるさい… お主らは静かに出来んのか?」

「私を含むのはやめてほしい。むしろ今日はほとんど喋つていない」

「そ、それは私もです。元々話すのが得意ではないんですけど… 途中から何がなんだかで隠れてました」

「そういえば途中からいなかくなつてたよな? ビコに隠れてたんだ?

「最近気付いたんですけど気配つていうのでしようか。それが消せるようになつたんです。ほらつ」

確かに魅靈の姿が消えてしまった。

試しに魅靈が居た場所に手を伸ばす。

「あふう……」

柔らかい感触と共に艶やかな声が聞こえてきた。この感触は……この感触は……？

「あんっ……はあ……んっ」

「いや、まさか……」

「マスターの手に乳房が触れているのを確認。疑心暗鬼なもの、ある程度把握しつつも揉みしだいている様子」

「いや、これはだな?」

「言ひ訳……無用」

「儂直々に鉄槌をくだしてやろうではないか」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n97081/>

---

青き龍に願いを込めて

2011年5月2日07時40分発行